

# 小野川流域の遺跡

駄場姥ヶ懐窯址・北梅本悪社谷・上苧屋1次・2次  
開1次・2次・南久米片廻り2次・今在家

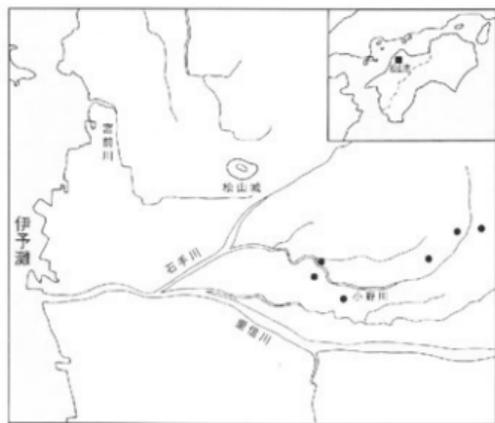
— 本文編 —

1996

松山市教育委員会  
財団法人松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター

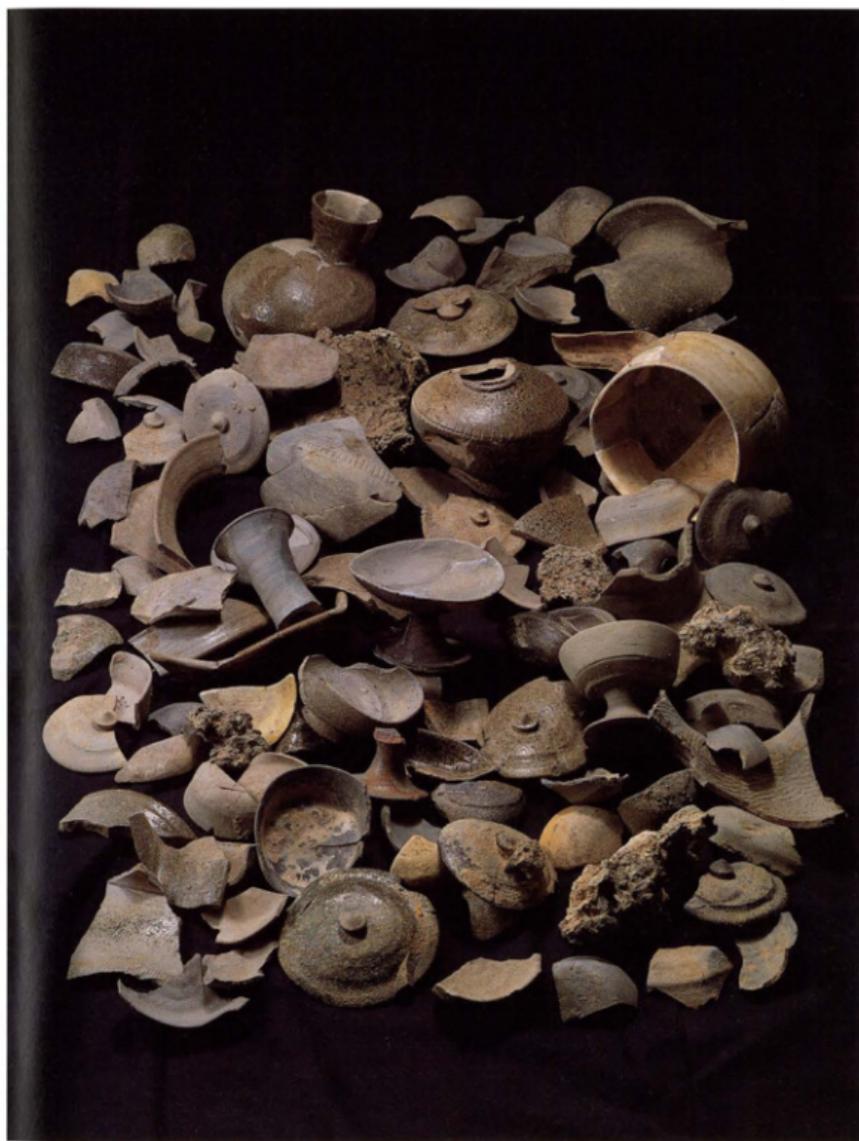
# 小野川流域の遺跡

駄場姥ヶ懐窯址・北梅本悪社谷・上苧屋1次・2次  
開1次・2次・南久米片廻り2次・今在家



1996

松山市教育委員会  
財団法人松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター



巻頭図版 駄場峠ヶ懐窯址出土の土器

## 序

本書は、昭和56年度から平成6年度までに、松山平野東部に位置する小野・平井地区と米住・久米地区を緊急調査した8遺跡の発掘調査報告書です。

「和名抄」に現れる「久米郡」内に点在する本遺跡群は、小野川流域に展開する松山平野の拠点集落の一部であります。近年、この地域における発掘調査は、急増する宅地開発に伴って増え続けているのが現状です。

今回報告します駄場姥ヶ懐窯址は、7世紀代の須恵器窯で、松山平野では数少ない古代窯の遺跡です。また、上刳屋遺跡では古墳、開道跡・南久米片廻り遺跡・今在家遺跡では集落関連遺構を確認しています。

これらの調査結果は、小野川流域の遺跡群における未調査区域や未解明部分が山積する中であって、松山平野の古代窯址や集落構造解明への基礎的資料になるものと思われれます。

こうした成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をたまわった関係各位のお陰と感謝申し上げ、今後ともなお一層のご指導、ご助言をお願い申し上げます次第であります。

また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成8年12月25日

財団法人 松山市生涯学習振興財団  
理事長 田 中 誠

## 例 言

1. 本書は、松山市教育委員会及び松山県立生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが昭和56年～平成6年の間に、松山市北梅本町、平井町、南土居町、南久米町、今在家町で実施した8遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 遺構の略号は、住居址：SB、土坑：SK、溝：SD、自然流路：SR、橋列：SA、柱穴：SP、性格不明遺構：SXとし、遺跡ごとに通し番号を1から付記した。
3. 遺構の測量は、調査担当者及び担当者の指示のもと補助員が実施した。
4. 遺物の実測及び掲載図の製図は、調査担当者の指示のもと、調査補助員を中心に水口あをい、山下満佐子、平岡直美、村上規子、渡部明日香、伊藤みわこ、竹内真琴、中平久美子、長岡千尋、山下純代、渡辺いづみ、志賀夏行、小野敬通、加島なおみ、森田利恵、松本美知子、越智令子、宮内真弓、中村紫、岡本邦栄、古角優子が行った。
5. 掲載の遺構図・遺物図は、スケールの下に縮尺を表記した。
6. 方位は、磁北を使用した。
7. 写真図版は、遺構の撮影は担当者が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。
8. 本書の執筆は栗田茂敏、梅木謙一、宮内慎一、相原浩二、山本健一、加島なおみが行い、松村 淳氏（平成7年退職）の助言を得た。浄書は、平岡直美の協力を得た。
9. 編集は梅木謙一が担当し、編集・校正においては水口あをいの協力を得た。
10. 胎上分析は、奈良教育大学三辻利一先生に協力いただき、指導と助言を賜った。記して感謝申し上げます。
11. 出土物の整理については、愛媛大学下條信行先生、日本考古学協会会長長井数秋先生に指導を賜わった。記して感謝申し上げます。
12. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

# 本文目次

第1章	はじめに	(梅木)	1
	1 調査に至る経緯 2 組織 3 環境		
第2章	駄場姥ヶ懐窯址	(栗田・加高)	7
	1 調査の経過 2 遺構と遺物 3 考察		
第3章	北梅本悪社谷遺跡	(山本)	67
	1 調査の経過 2 層位 3 遺構と遺物 4 まとめ		
第4章	上苺屋遺跡1次調査地	(宮内)	83
	1 調査の経過 2 層位 3 遺構と遺物 4 小結		
第5章	上苺屋遺跡2次調査地	(宮内)	105
	1 調査の経過 2 層位 3 遺構と遺物 4 小結		
第6章	閑遺跡1次調査地	(宮内)	123
	1 調査の経過 2 層位 3 遺構と遺物 4 小結		
第7章	閑遺跡2次調査地	(宮内)	163
	1 調査の経過 2 層位 3 遺構と遺物 4 小結		
第8章	南久米片廻り遺跡2次調査地	(松村・梅木)	193
	1 調査の経過 2 層位 3 遺構と遺物 4 小結		
第9章	今在家遺跡	(相原)	229
	1 調査の経過 2 層位 3 遺構と遺物 4 小結		
第10章	自然科学分析		
	1 上苺屋遺跡2次調査の植物珪酸体分析 (古環境研究所)		251
	2 愛媛県内の窯跡出土須恵器の蛍光X線分析 (三辻利一)		256
第11章	調査の成果と課題	(梅木)	255

# 挿 図 目 次

## 第1章 はじめに

- 第1図 松山平野の主要遺跡分布図 (縮尺1/100,000) ..... 3  
第2図 調査地周辺の遺跡分布図 (縮尺1/50,000) ..... 5

## 第2章 駄場姥ヶ懐窯址

- 第3図 調査地位図 (縮尺1/2,500) ..... 10  
第4図 遺構配置図 (縮尺1/100) ..... 12  
第5図 窯体平・断面図 (縮尺1/50) ..... 13  
第6図 窯体最終床面遺物出土状況 (縮尺1/40) ..... 15  
第7図 SK1測量図 (縮尺1/20) ..... 16  
第8図 灰原遺物出土状況 (縮尺1/60) ..... 17  
第9図 窯体出土遺物 (1) (縮尺1/3) ..... 20  
第10図 窯体出土遺物 (2) (縮尺1/3) ..... 21  
第11図 窯体出土遺物 (3) (縮尺1/3) ..... 22  
第12図 灰原出土遺物 (1) (縮尺1/3) ..... 24  
第13図 灰原出土遺物 (2) (縮尺1/3) ..... 25  
第14図 灰原出土遺物 (3) (縮尺1/3) ..... 27  
第15図 灰原出土遺物 (4) (縮尺1/3) ..... 28  
第16図 灰原出土遺物 (5) (縮尺1/3) ..... 29  
第17図 灰原出土遺物 (6) (縮尺1/3) ..... 30  
第18図 灰原出土遺物 (7) (縮尺1/3) ..... 31  
第19図 灰原出土遺物 (8) (縮尺1/3) ..... 32  
第20図 灰原出土遺物 (9) (縮尺1/3) ..... 33  
第21図 SK1出土遺物 (縮尺1/6) ..... 34  
第22図 蓋坯の分類 (縮尺1/3) ..... 35  
第23図 小野谷周辺の古窯址分布図 (縮尺1/25,000) ..... 37  
第24図 駄場姥ヶ懐2号跡確認地点 ..... 39  
第25図 駄場姥ヶ懐2号窯採集遺物 (縮尺1/3)  
第26図 悪社谷1号窯跡確認地点 ..... 40  
第27図 悪社谷1号窯採集遺物 (縮尺1/3) ..... 41  
第28図 悪社谷2号窯採集遺物 (縮尺1/3) ..... 42  
第29図 茨谷1号窯採集遺物 (1) (縮尺1/3)

第30図	茨谷1号窯採集遺物(2)(縮尺1/3).....	43
第31図	枝桑下池3号窯跡確認地点.....	44
第32図	枝桑下池3号窯採集遺物(縮尺1/3).....	45
第33図	枝桑下池4号窯採集遺物(縮尺1/3).....	
第34図	駄場姥ヶ嶽1号窯址の現況.....	66

### 第3章 北梅本悪社谷遺跡

第35図	調査地位置図(縮尺1/10,000).....	70
第36図	調査地測量図(縮尺1/600).....	71
第37図	基本層位図(縮尺1/50).....	73
第38図	T10出土遺物実測図(縮尺1/3).....	74
第39図	T10平・断面図(縮尺1/50).....	75
第40図	T11出土遺物実測図(縮尺1/3・2/3).....	76
第41図	T11平・断面図(縮尺1/80).....	77
第42図	枝桑下池窯址分布図(縮尺1/5,000).....	79
第43図	枝桑下池5号窯址出土遺物実測図(縮尺1/3).....	80

### 第4章 上苧屋遺跡1次調査地

第44図	調査地位置図(1)(縮尺1/25,000).....	86
第45図	調査地位置図(2)(縮尺1/15,000).....	87
第46図	調査地測量図(縮尺1/300).....	88
第47図	西壁土層図(縮尺1/30).....	89
第48図	北壁土層図(縮尺1/30).....	
第49図	遺構配置図(縮尺1/60).....	91
第50図	調査地区割図(縮尺1/150).....	93
第51図	1号石室測量図(1)(縮尺1/20).....	94
第52図	1号石室測量図(2)(縮尺1/20).....	95
第53図	1号石室出土遺物実測図(縮尺1/3).....	96
第54図	SK1測量図(縮尺1/20).....	97
第55図	SK2測量図(縮尺1/20).....	98
第56図	SD1測量図・出土遺物実測図(縮尺1/40・1/3).....	99
第57図	集石遺構検出状況図(縮尺1/40).....	101
第58図	第V層出土遺物実測図(縮尺1/3・1/4).....	102

## 第5章 上苅屋遺跡2次調査地

第59図	調査地位置図(1)(縮尺1/25,000)	107
第60図	調査地位置図(2)(縮尺1/1,500)	108
第61図	調査地測量図(縮尺1/600)	109
第62図	調査地区割図(縮尺1/200)	110
第63図	西壁土層図(縮尺1/30)	111
第64図	北壁土層図(縮尺1/30)	
第65図	遺構配置図(縮尺1/200)	113
第66図	掘立1測量図(縮尺1/100)	114
第67図	掘立1出土遺物実測図(縮尺1/3)	115
第68図	掘立2測量図(縮尺1/100)	
第69図	SK1測量図(縮尺1/20)	116
第70図	SK2測量図(縮尺1/20)	117
第71図	ピット出土遺物実測図(縮尺1/3)	119
第72図	第Ⅲ層出土遺物実測図(縮尺1/3)	

## 第6章 開遺跡1次調査地

第73図	調査地位置図(1)(縮尺1/25,000)	125
第74図	調査地位置図(2)(縮尺1/1,500)	126
第75図	調査地測量図(縮尺1/800)	127
第76図	調査地区割図(縮尺1/200)	128
第77図	北壁土層図(縮尺1/50)	129
第78図	東壁土層図(縮尺1/50)	
第79図	南壁土層図(縮尺1/50)	131
第80図	西壁土層図(縮尺1/50)	
第81図	遺構配置図(縮尺1/150)	133
第82図	SB2測量図・出土遺物実測図(縮尺1/80・1/3)	134
第83図	SB1測量図(縮尺1/80)	135
第84図	SB1出土遺物実測図(縮尺1/3・1/4)	136
第85図	SB3測量図(縮尺1/80)	138
第86図	SB3出土遺物実測図(縮尺1/3・1/4)	139
第87図	SB4測量図(縮尺1/80)	140
第88図	SB4出土遺物実測図(縮尺1/3・1/4)	141
第89図	SB5測量図(縮尺1/80)	142
第90図	SB5出土遺物実測図(1)(縮尺1/3・1/4)	143

第 91 図	S B 5 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	144
第 92 図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/80) .....	145
第 93 図	掘立 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3) .....	146
第 94 図	掘立 2 測量図 (縮尺 1/80) .....	147
第 95 図	掘立 3 測量図 (縮尺 1/80) .....	148
第 96 図	掘立 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/3 · 1/4) .....	149
第 97 図	S K 1 測量図 (縮尺 1/30) .....	150
第 98 図	S K 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3 · 1/4)	
第 99 図	S K 2 測量図 (縮尺 1/30) .....	151
第 100 図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	
第 101 図	第Ⅱ層出土遺物実測図 (縮尺 1/3 · 1/4) .....	153
第 102 図	地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	

## 第 7 章 開遺跡 2 次調査地

第 103 図	調査地位位置図 (縮尺 1/1,500) .....	165
第 104 図	調査地測量図 (縮尺 1/400) .....	166
第 105 図	調査地区割図 (縮尺 1/150) .....	167
第 106 図	遺構配置図 (縮尺 1/100) .....	168
第 107 図	東壁土層図 (縮尺 1/30) .....	169
第 108 図	西壁土層図 (縮尺 1/30)	
第 109 図	南壁土層図 (縮尺 1/30) .....	171
第 110 図	北壁土層図 (縮尺 1/30)	
第 111 図	S B 1 測量図 (縮尺 1/80) .....	173
第 112 図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3 · 1/4) .....	174
第 113 図	S B 2 測量図 (縮尺 1/80) .....	176
第 114 図	S B 3 測量図 (縮尺 1/80) .....	177
第 115 図	S B 2 · 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	
第 116 図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/100) .....	178
第 117 図	掘立 2 測量図 (縮尺 1/100) .....	179
第 118 図	掘立 3 測量図 (縮尺 1/100)	
第 119 図	掘立出土遺物実測図 (縮尺 1/3) .....	180
第 120 図	S K 1 測量図 (縮尺 1/20) .....	181
第 121 図	ビット出土遺物実測図 (縮尺 1/3) .....	182
第 122 図	S X 1 測量図 (縮尺 1/20) .....	183

第123図	SX1州上遺物実測図(縮尺1/3)	
第124図	第V層出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	184
第125図	第V層出土遺物実測図(2)(縮尺1/3・1/4)	185
第126図	地点不明出土遺物実測図(縮尺1/3)	186

## 第8章 南久米片廻り遺跡2次調査地

第127図	調査地位置図(縮尺1/2,000)	196
第128図	遺構配置図(縮尺1/200)	197
第129図	SB1測量図(縮尺1/60)	198
第130図	SB1出土遺物実測図(縮尺1/4・1/3)	199
第131図	掘立1測量図(縮尺1/60)	200
第132図	掘立2測量図(縮尺1/60)	201
第133図	掘立3測量図(縮尺1/60)	202
第134図	掘立4・5測量図(縮尺1/60)	203
第135図	SK1・2測量図(縮尺1/60)	204
第136図	SK4・5測量図(縮尺1/60・1/40)	205
第137図	SD4・5・6測量図(縮尺1/60)	207
第138図	SA測量図(縮尺1/60)	209
第139図	包含層出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	211
第140図	包含層出土遺物実測図(2)(縮尺1/3)	212
第141図	包含層出土遺物実測図(3)(縮尺1/3・1/4)	213
第142図	包含層出土遺物実測図(4)(縮尺1/3)	215
第143図	包含層出土遺物実測図(5)(縮尺1/4・1/3)	216
第144図	包含層出土遺物実測図(6)(縮尺1/4・1/3)	217
第145図	包含層出土遺物実測図(7)(縮尺1/4・1/3)	218
第146図	包含層出土遺物実測図(8)(縮尺1/3・1/2)	219
第147図	包含層出土遺物実測図(9)(縮尺1/3)	220

## 第9章 今在家遺跡

第148図	調査地位置図(縮尺1/2,500)	232
第149図	調査地区割図(縮尺1/800)	233
第150図	遺構配置図(縮尺1/300)	
第151図	基本層位図(縮尺1/20)	235
第152図	SK1測量図・出土遺物(縮尺1/20・1/4)	236

第153図	S K 2 測量図 (縮尺 1/20).....	237
第154図	S K 2 出土遺物 (1) (縮尺 1/4) .....	239
第155図	S K 2 出土遺物 (2) (縮尺 1/4) .....	240
第156図	S K 2 出土遺物 (3) (縮尺 1/4) .....	241
第157図	S K 2 出土遺物 (4) (縮尺 1/4 · 1/2) .....	242
第158図	S B 1 測量図 · 出土遺物 (縮尺 1/40 · 1/4) .....	243
第159図	S D 10 測量図 (縮尺 1/40) .....	245
第160図	S D 出土遺物 (縮尺 1/4 · 1/2) .....	246

## 第10章 自然科学分析

第161図	上海屋遺跡2次調査の植物珪酸体分析結果 .....	255
第162図	遺跡位置図 (縮尺 1/200,000) .....	262
第163図	窯址出土須恵器のK-Ca分布図 .....	263
第164図	窯址出土須恵器のK-Ca·Rb-Sr分布図 .....	264
第165図	窯址出土須恵器のRb-Sr分布図.....	265
第166図	窯址出土須恵器のRb-Sr分布図.....	266
第167図	窯址出土須恵器のNa因子の比較	
第168図	古墳出土須恵器のK-Ca·Rb-Sr分布図 .....	267
第169図	遺跡出土須恵器のK-Ca·Rb-Sr分布図	
第170図	官衙関連遺跡出土須恵器のK-Ca·Rb-Sr分布図 .....	268
第171図	官衙関連遺跡出土の須恵器 (縮尺 1/3) .....	269
第172図	悪社谷2号窯址採集遺物(1) (縮尺 1/3) .....	277
第173図	悪社谷2号窯址採集遺物(2) (縮尺 1/3) .....	278
第174図	枝朶下池3号窯址採集遺物 (縮尺 1/3)	
第175図	枝朶下池4号窯址採集遺物 (縮尺 1/3) .....	279
第176図	小野・平井地区の窯址分布図 (縮尺 1/5,000) .....	283

# 表 目 次

## 第1章 はじめに

表1 調査地一覽	1
----------	---

## 第2章 駄場姥ヶ懐窯址

表2 小野谷周辺窯跡の須恵器	47
表3 窯体出土遺物観察表(土製品)	49
表4 灰原出土遺物観察表(土製品)	52
表5 SK1出土遺物観察表(土製品)	59
表6 駄場姥ヶ懐2号窯採集遺物観察表(土製品)	
表7 悪社谷1号窯採集遺物観察表(土製品)	61
表8 悪社谷2号窯採集遺物観察表(土製品)	62
表9 茨谷1号窯採集遺物観察表(土製品)	
表10 枝桑下池3号窯採集遺物観察表(土製品)	65
表11 枝桑下池4号窯採集遺物観察表(土製品)	

## 第3章 北梅本悪社谷遺跡

表12 T10出土遺物観察表(土製品)	81
表13 T11出土遺物観察表(土製品)	
表14 T11出土遺物観察表(石製品)	
表15 採集遺物観察表(土製品)	82

## 第4章 上苅屋遺跡1次調査地

表16 土坑一覽	103
表17 溝一覽	
表18 1号石室出土遺物観察表(土製品)	104
表19 SD1出土遺物観察表(土製品)	
表20 第V層出土遺物観察表(土製品)	

## 第5章 上苅屋遺跡2次調査地

表21 掘立柱建物址一覽	121
表22 土坑一覽	
表23 溝一覽	

表24	掘立1出土遺物観察表(土製品)	
表25	ビット出土遺物観察表(土製品)	122
表26	第Ⅲ層出土遺物観察表(土製品)	

## 第6章 開遺跡1次調査地

表27	遺構の変遷	155
表28	竪穴式住居址一覧	156
表29	掘立柱建物址一覧	
表30	土坑一覧	
表31	溝一覧	157
表32	S B 2 出土遺物観察表(土製品)	
表33	S B 1 出土遺物観察表(土製品)	
表34	S B 3 出土遺物観察表(土製品)	158
表35	S B 4 出土遺物観察表(土製品)	
表36	S B 5 出土遺物観察表(土製品)	159
表37	掘立1出土遺物観察表(土製品)	160
表38	掘立3出土遺物観察表(土製品)	
表39	S K 1 出土遺物観察表(土製品)	161
表40	S K 1 出土遺物観察表(石製品)	
表41	S K 2 出土遺物観察表(土製品)	
表42	第Ⅲ層出土遺物観察表(土製品)	162
表43	地点不明出土遺物観察表(土製品)	

## 第7章 開遺跡2次調査地

表44	竪穴式住居址一覧	188
表45	掘立柱建物址一覧	
表46	土坑一覧	
表47	溝一覧	189
表48	性格不明遺構一覧	
表49	S B 1 出土遺物観察表(土製品)	
表50	S B 2・3 出土遺物観察表(土製品)	190
表51	掘立出土遺物観察表(土製品)	
表52	ビット出土遺物観察表(土製品)	
表53	S X 1 出土遺物観察表(土製品)	191

表54	第V層出土遺物観察表（土製品）	
表55	地点不明出土遺物観察表（土製品）	192

## 第8章 南久米片廻り遺跡2次調査地

表56	竪穴式住居址一覧表	222
表57	掘立柱建物址一覧表	
表58	土坑一覧表	
表59	溝状一覧表	
表60	S B 1 出土遺物観察表（土製品）	223
表61	包含層出土遺物観察表（土製品・石製品）	

## 第9章 今在家遺跡

表62	竪穴式住居址一覧	247
表63	土坑一覧	
表64	溝一覧	
表65	S K 1 出土遺物観察表	248
表66	S K 2 出土遺物観察表（土製品）	
表67	S K 2 出土遺物観察表（石製品）	249
表68	S B 1 出土遺物観察表	
表69	S D 10 出土遺物観察表（土製品）	250
表70	S D 10 出土遺物観察表（石製品）	
表71	S D 1・5・8 出土遺物観察表	
表72	S D 9 出土遺物観察表（石製品）	

## 第10章 自然科学分析

表73	上刈屋遺跡2次調査の植物珪酸体分析結果	254
表74	地名一覧	259
表75	愛媛県内の遺跡出土須恵器の分析	269
表76	愛媛県内の窯址出土須恵器の分析	
表77	悪社谷2号窯址採集遺物観察表（土製品）	280
表78	枝桑下池3号窯址採集遺物観察表（土製品）	281
表79	枝桑下池4号窯址採集遺物観察表（土製品）	282
表80	小野・平井地区窯址一覧	

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯（第1図）

昭和56年11月、松山市北梅本町小野谷乙658において、多量の須恵器が出土したことが、土地所有者より松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に連絡があった。

また、昭和63年から平成6年の間に、松山市北梅本町甲695、平井町937-2、平井町甲980-2、南土居町70-1、南土居町179-1、南久米町534-1・534-3、今在家町55・70・71・72について、埋蔵文化財の確認願いが開発関係者より、文化教育課に提出された。

発見届け及び確認願いが申請された地域は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地「90 権現山古墳群」、 「102 駄場窯跡群」、 「103 烏越古墳」、 「126 高畑遺物包含地」、 「132 中ノ子座寺及び遺物包含地」内にあり、周知の遺跡として知られている。

また、当該地域は、松山平野北東部の小野川流域にある。小野川上流の小野・平井地区には窯址と古墳群があり、中流の来住・久米地区には縄文時代後期から近世までの集落遺跡が展開している。特に、来住・久米には、古代の官衙遺跡である久米高畑遺跡や、白鳳期の寺院で国指定史跡である来住座寺が存在し、古代の松山平野における中心地となっている。

よって、文化教育課では、発見届け及び申請があった8地点について、埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、現地踏査と試掘調査を実施した。その結果、申請地内には、遺構や遺物が遺存し、弥生時代から中世までの集落が存在することを確認した。

踏査及び試掘調査のうち、文化教育課と申請者は、発掘調査について協議を行い、北梅本町小野谷乙658は保存を目的とした記録調査を、北梅本町甲695以下の7遺跡については遺跡が消失する地域に対する緊急調査を実施することにした。

発掘調査は、文化教育課及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者及び関係者の協力のもと、昭和56年から平成6年の間に実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在（松山市）	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間
駄場絶ヶ嶺窯址	北梅本町小野谷乙658	70	1981（昭和56）年11月25日～同年12月28日
北梅本恵社谷	北梅本町甲695外	900	1994（平成6）年5月30日～同年6月30日
上羽屋1次	平井町937-2	396	1990（平成2）年1月20日～同年3月4日
上羽屋2次	平井町甲980-2	492	1994（平成6）年1月5日～同年2月28日
閑1次	南土居町70-1	869	1989（平成元）年1月6日～同年3月7日
閑2次	南土居町179-1	498.10	1993（平成5）年11月1日～同年12月27日
南久米片廻り2次	南久米町534-1、534-3	901	1989（平成元）年2月8日～同年4月2日
今在家	今在家町55、70、71、72	2,016	1990（平成2）年11月3日～同年12月28日

## 2. 刊行組織

松山市教育委員会	教 育 長	池田 尚郷
生涯教育部	部 長	三好 俊彦
	次 長	丹下 正勝
文化教育課	課 長	松平 泰定
(助松山市生涯学習振興財団)	理 事 長	田中 誠一
	事務局長	池田 秀雄
	事務局次長	丹下 正勝
埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄三
	次 長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳 (文化教育課職員)
	調 査 員	栗田 茂敏、梅木 謙一、宮内 慎一、 相原 浩二、山本 健一、大西 朋子

## 3. 環 境 (第1・2図)

松山平野の西部には、高縄半島西麓を水源とする大小の河川がある。小野川は、松山市小野・平井地区から来住台地、天山・星ノ岡・東山の伊予三山を経て、松山平野の主要河川である石手川、さらには重信川へと合流する。小野川流域には、来住・久米の遺跡群があり、縄文時代から中世までの集落跡が展開している。ここでは、小野・平井地区から来住台地までの遺跡を概観する。

## 先土器～縄文時代

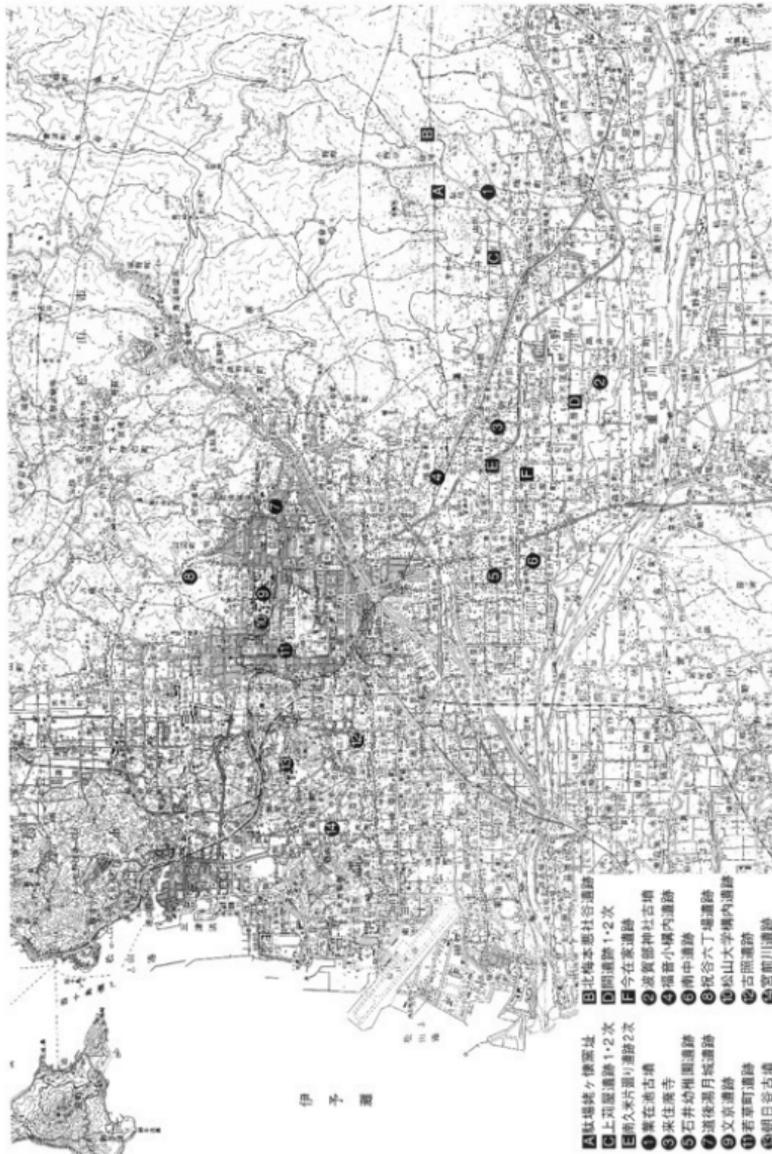
先土器時代の遺物は、石器が五郎兵衛谷古墳、筋違F遺跡、久米小田池遺跡ほかから表採されている。この時代の遺物については、長井数秋氏、重松佳久氏、多田 仁氏による石材や技法に関する論考がある(註1)。ただし、現在までに遺構の検出はなく、良好な資料が期待される。

縄文時代は、後～晩期の資料が散見される。久米窪田森元遺跡では、多量の土器が出土した土坑が検出され、松山平野でも数少ない後期資料として注目される。

## 弥生時代

来住台地とその周辺地では、前期から終末期までの遺物が出土するが、前期末～中期初頭を除くと遺構数は少ない。

前期 近年の調査により、来住台地では、前期末から中期初頭の土坑が多数検出されてい



第1図 松山平野の主要遺跡分布図 (S=1:100,000)

る。さらに、集落区画の溝が数条検出され、集落の周縁部の状況が明らかになりつつある。ただし、同時期の住居址は未検出であり、集落復元は大きな課題である。

中期 前半の資料は少ないが、後半の資料は来住廃寺15次調査より良好な一括資料がある。ただし、前期に比べると遺構や遺物の数量は、極めて少ない。

後期 来住廃寺の寺域内では竪穴式住居址が検出されており、集落の存在が確実である。また、廃寺の東方2kmの平井遺跡では完形品を含む多量の土器が出土し、近隣に集落が存在することは間違いない。よって、弥生時代終末には、来住台地一帯に複数の集落が展開していたことは明らかである。

### 古墳時代

前期古墳は確認がない。来住台地周辺は5世紀後半以降になると前方後円墳が造営され、北の山麓にも6世紀以降の群集墳があり、松山平野の主要地となる。古墳の内容と数は、伊予において上位を占める地域である。

集落は、来住台地の北部域で竪穴式住居址が検出されている。墳墓と集落の関係を解明する資料は整ってきている。

また、7世紀には北東部の小野・平井地区で窯址が経営され、須恵器の生産が活発化している。

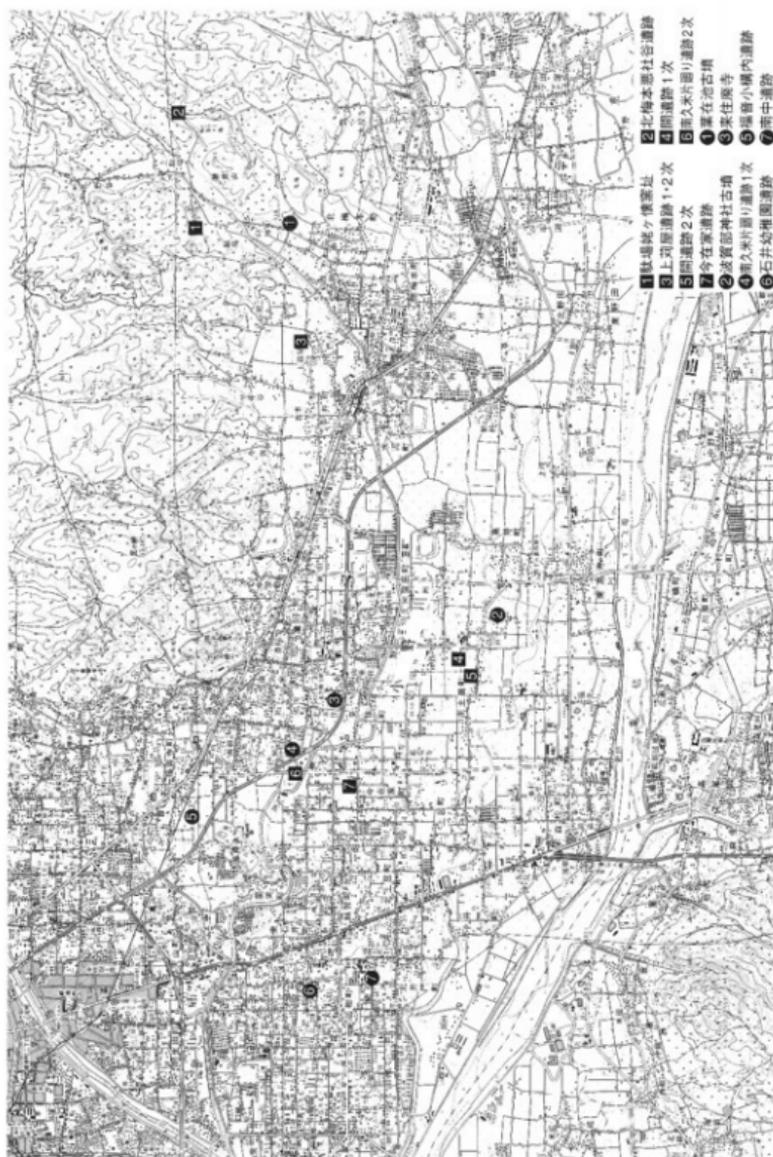
### 古 代

来住台地上には、官衙遺構が展開する。約70次におよぶ調査と研究により、西日本的に評価される遺跡であることが判明してきた。

現在、来住台地上での調査は、専任の担当者による遺構の年代決定と遺構間の関係が整理されているところである。また、委員会を設置し、調査方針や整備に向けての準備を検討中である。

### 中世～近世

中・近世の集落址は、来住台地東部の鷹ノ子遺跡一帯で集落遺構が検出されている。一方、台地の西側での検出数は極めて少ない。ところで、来住廃寺内の北部分では、掘立柱建物群が集中して検出されている。建物は幾重にも検出され、継続的な建物であったことが知られるが、性格については明らかではない。本報告が待たれる。



第2図 調査地周辺の道路分布図 (S=1:50,000)

## 〔註〕

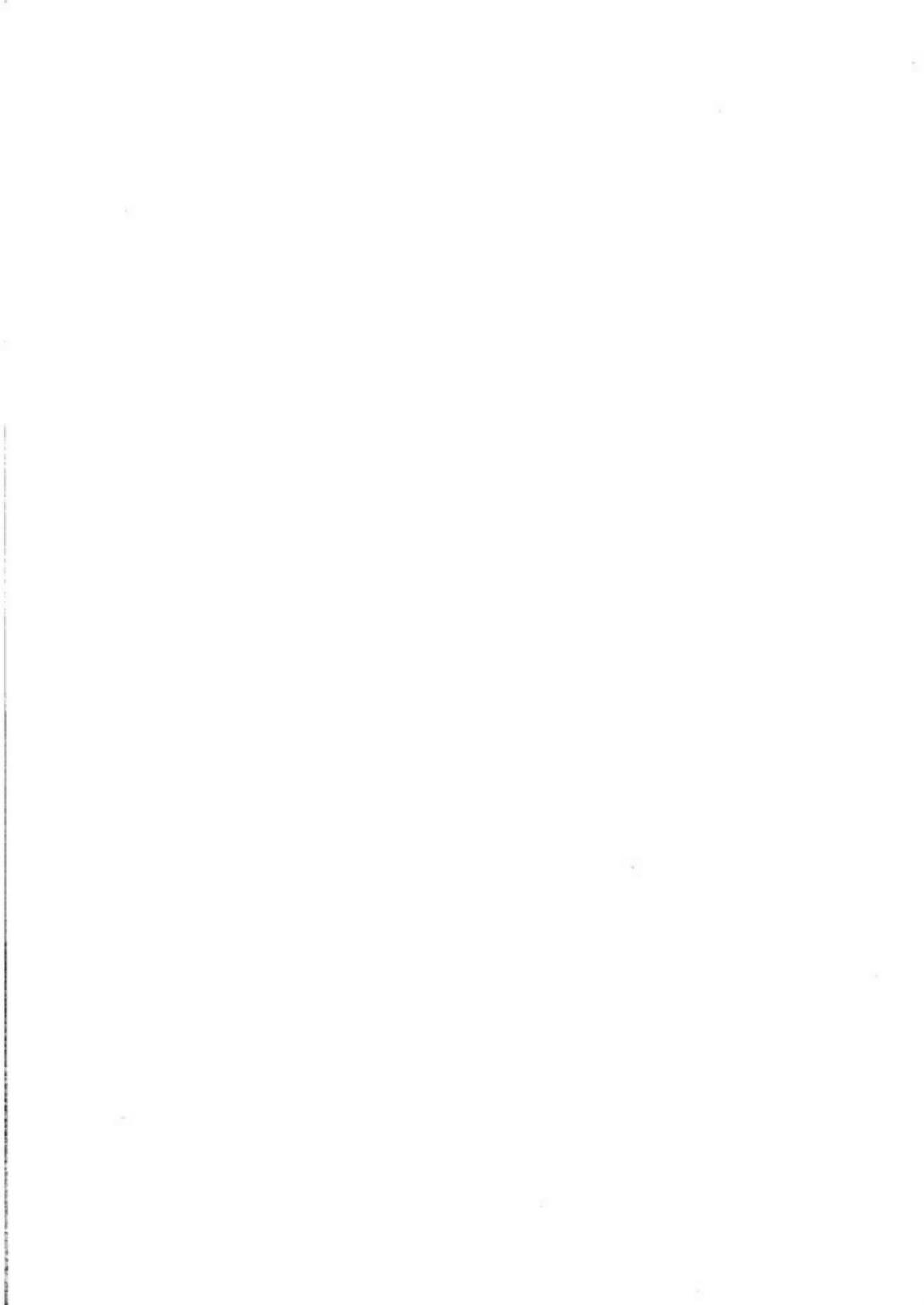
1. 長井教秋 1982 『先上器時代の遺情と遺物』『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県史編さん委員会  
 永松佳久 1992 a 『右手川水系に於ける旧石器文化』『桑原地区の遺跡』御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 永松佳久 1992 b 『小野川水系における旧石器文化』『来住・久米地区の遺跡』御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 多田 仁 1992 『松山平野の石器文化』『祝谷アイリ遺跡』御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

## 〔文献〕

- 岸 郁男・森 光晴 他 1979 『来住廃寺』松山市教育委員会  
 森 光晴 1983 『国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市教育委員会  
 海木謙一 編 1992 『来住・久米地区の遺跡』御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 西尾幸則 編 1993 『来住廃寺遺跡-第15次調査-』松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 橋本雄一 1994 『北久米浄蓮寺遺跡-3次調査地-』松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 宮内信一 1996 『来住廃寺-第19次調査-』松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 西尾幸則・栗田茂敏 他 1987 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会  
 西尾幸則・永松佳久 他 1989 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会  
 田城武志 編 1991 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター  
 田城武志 編 1992 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 梅木謙一 編 1993 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 栗田正芳 編 1994 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 田城武志 編 1995 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第2章

ダ バ ウ バ ガ タ ニ ヨ ウ シ  
駄場姥ヶ懷窯址



## 第2章 駄場姥ヶ懐窯址

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯 (第3図)

1981(昭和56)年11月、松山市北梅本町在住の山内之夫氏から松山市教育委員会(以下、市教委)に連絡があり、同氏所有の果樹園内を開墾中に多量の須恵器を伴った灰層が検出されたとのことであった。同地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地のうちNo.102「駄場窯跡群」に含まれる。この連絡を受け、市教委は同月係員を現地へ派遣し、現況調査を行ったところ、灰・焼土とともに焼け歪みの須恵器が多数散布しており、須恵器窯の一部が検出されている可能性が高いとの結論に達した。また、同氏によると、開墾中の発見以来、第三者による遺物採集が頻繁に行われ、現況のまま保存してもかなりの荒廃が予測されるとのことであった。これらの現況調査の結果にもとづき、遺跡の取り扱いについての市教委と山内氏との間の協議の結果、緊急発掘調査を実施することとなり、同年11月25日より12月28日の間、以下の組織で調査を実施した。なお、調査完了後、山内氏の協力によって窯体は保存・活用されることとなり、市教委の設置した覆屋下で遺構表示とともに露出保存されている。

#### (2) 調査組織

調査主体	松山市教育委員会
	教育長 西原多喜男
	教育次長 能田 通荘
	文化教育課長 藤原 渉
	課長補佐 坪内 晃幸
	第二係長 大西 輝昭
調査担当	主 任 西尾 幸則
	調査員 池田 學・松村 淳・栗田 茂敏
作業員	(屋外調査) 黒田一行・重松清信・高須賀康二・田中国広・松下祝衛
	(屋内調査) 加島なおみ・大西陽子

調査地	松山市北梅本町小野谷乙658番地
調査面積	70m <sup>2</sup>
調査期間	1981(昭和56)年11月25日～12月28日



第3図 調査地位置図 (S=1:2,500)

## 2. 遺構と遺物

調査地は、高尾山系南麓を南から南西方向に流れる小野川によって開削された小野谷右岸の東西方向に延びる丘陵支脈の北麓、標高143～150mにある。この丘陵支脈もさらに北方の支脈とともに小谷を形成しており、窯はこの小谷の最深部付近に存する。

検出された遺構は、窯体1基とこれに伴う灰原、および土坑1基である。なお、この窯の北方約40m付近でも須恵器の集中散布がみられており、これを2号窯、調査されたものを1号窯と呼称している。

### (1) 窯 体 (第5・6図)

窯体は果樹園の通路によって燃焼部を切られてはいるが、総長7.7mの部分が残存しており、焼成部と煙道のほとんどが残されていることになる。天井はすべて落下し、焼成部の主に燃焼部寄りに溜まっている。構築法としては、地山掘り抜きではなく半地下式の構造になっていたものと考えられる。

#### a. 燃焼部

上述のように、燃焼部は果樹園の通路によって切られており、残存しない。この通路の幅が2.3mであるから、燃焼部はこの間に存在していたことになる。

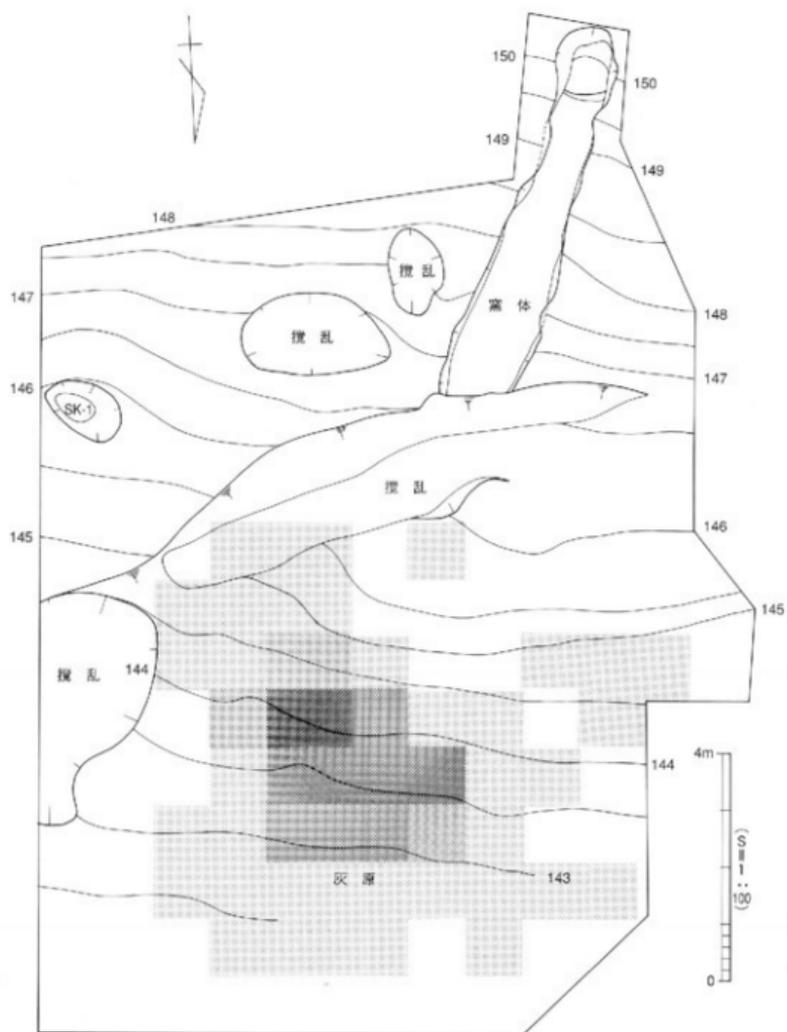
#### b. 焼成部

床面は、燃焼部の掘乱南端から1.2mの間は10°程度の緩傾斜をなすが、その後傾斜を変換し、32°の床傾斜を持ちながら4.6mの長さわたって登っている。この地点で一旦ほぼ水平な面をなしており、この部分までが焼成部と考えられる。つまり、残存長7.7mのうち5.8mが焼成部ということになる。床面最大幅は、先ほどの緩傾斜から急傾斜への変換点付近にあり、その幅1.3mを測り、煙道部に向かって先細りになっている。ちなみに、煙道部との境部分で0.7mとなっている。

床縦断面では未確認だが、横断面のうち最も燃焼部寄りの部分(第5図 D-D')で焼土層と還元硬化層からなる貼り床面が3面確認されており、最低2回の補修、3回の操業が推定される。遺物は、焼成部の最終床面から50点あまりが出土した。

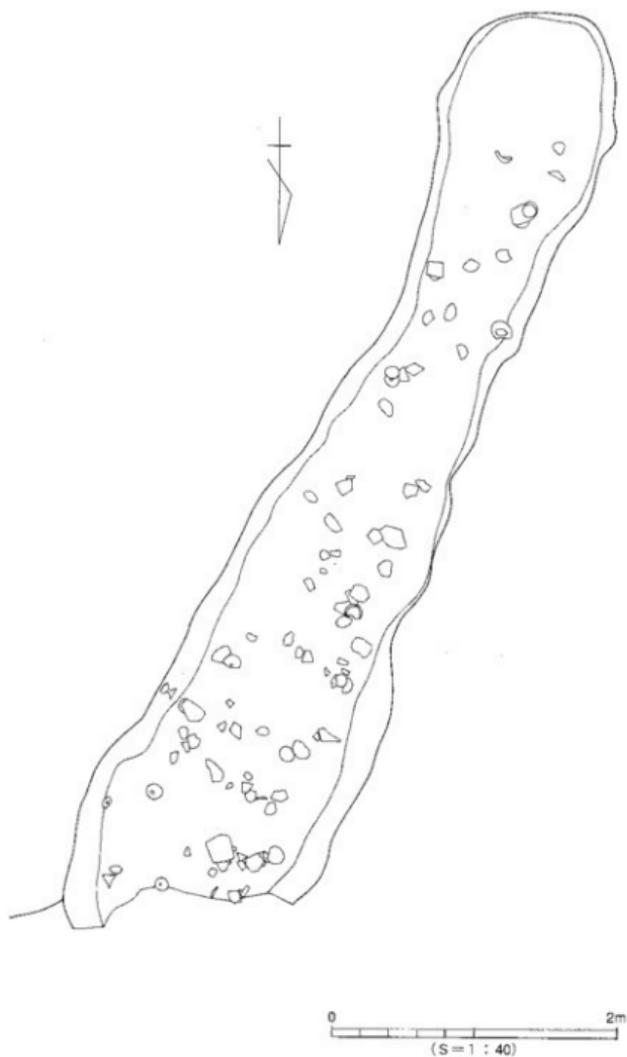
#### c. 煙道部

焼成部の上方に位置する煙道部床面は、先述のように焼成部の急傾斜から傾斜を変換して、長さ30cm程度の平坦面を経た後30°の傾斜で登り、最終的には80°近い急傾斜をなして立ち上がっている。横断面形は長楕円形もしくは「おむすび」形の焼成部とは異なり、U字状の形状をなす。



第4図 遺構配置図 (アミ点は灰層の遺物分布)





第6図 竈体最終床面遺物出土状況

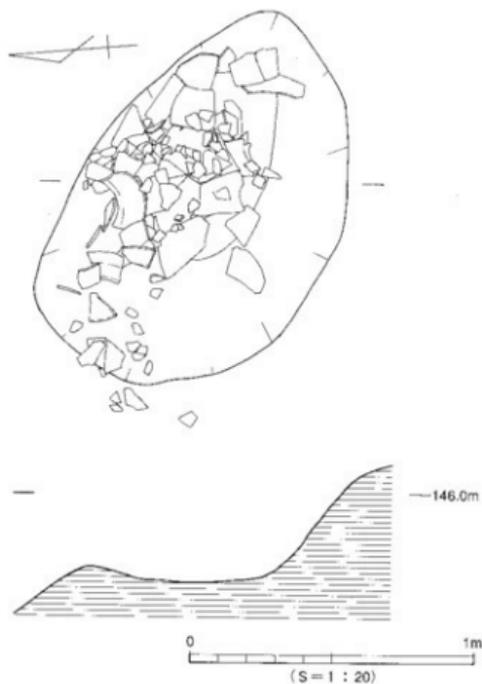
(2) 附属施設

a. 灰原 (第4・8図)

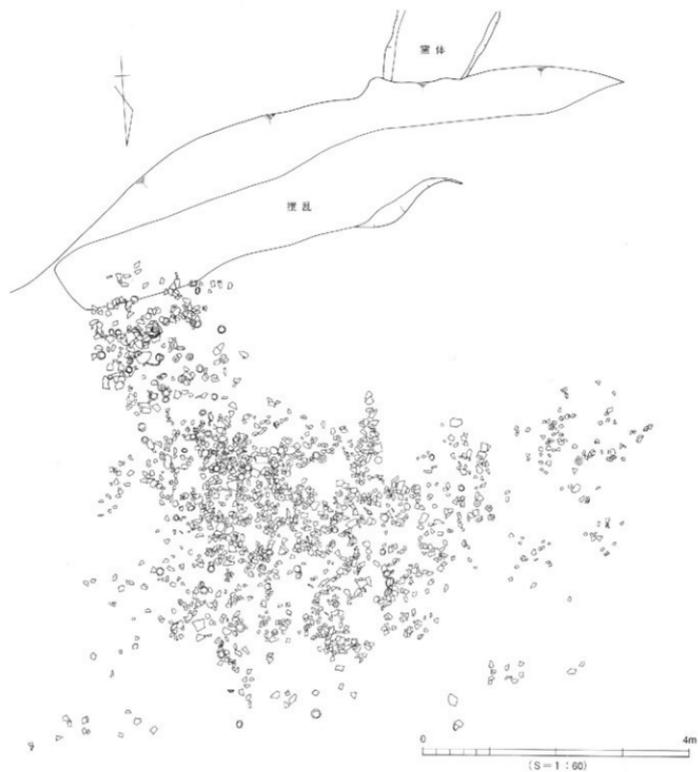
第4図に示された網点部分が灰原にあたり、 $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$  の傾斜面に広がっている。1 mメッシュで取り上げられた遺物の出土個体数が多いほど濃く表現されており、窯体主軸ラインの延長線部分でとりわけ多くの遺物が出土していることがわかるが、少なからず攪乱を受けていることもあって層位的な調査は行い得なかった。

b. SK1 (第7図)

窯体の東方3 mの位置で検出されたもので、レベル的には破壊されている燃焼部と同一レベル上にある。平面形は楕円形プランで、テラス状の断面形を呈する。須恵器甕1個体の出土がみられた。



第7図 SK1測量図



第8図 灰原遺物出土状況

### (3) 出土遺物

本窯出土遺物は須恵器のみである。遺物は、窯主体部の最終床面から完形品と破片あわせて50数点、灰原から完形品と破片あわせて遺物収納箱(44×58×15cm)47箱程度、窯体東側のSK1より数点出土した。これらのほとんどは焼け歪んでいる。以下、出土地点別に各器種の概要を述べる。

#### a. 窯体出土遺物(第9～11図、図版6～10)

坏蓋(1～12) すべて天井部中央に宝珠状のつまみを付し、口縁部内面にかえりを有するものである。1・2は全体に厚手のつくりで、かえりは尖り内傾外反する。天井部の回転ヘラ削り調整は粗略である。3～10は全体に薄手のつくりで、かえりは口縁端部とほぼ同じ高さか若干短くおさめる。天井部は平坦で回転ヘラ削り調整を施した後撫でる場合もある。11・12は天井部が弧状を呈し、回転ヘラ削り調整の範囲は広く丁寧である。口縁端部は外面に面を持ち、かえりは三角に尖る。12のつまみは上面が平坦になる。

無高台坏身(13～36) 回転ヘラ切り痕のある平底だが、底部との境が段をなすものと、そうでないものがある。13は若干厚手で底部より丸みを持ちながら立ち上がり、中位より口縁が外反し端部が尖る。14は薄手で口縁が外方に開く。底部との境が段をなす15・16は口縁が直立ぎみに立ち上がる。17～19は薄手で口縁が外方に開く。20～33は底部回転ヘラ切り未調整のうえ、立ち上がり部分に明瞭に段ができるものである。口縁は開き、端部は肥厚し丸くおさめる。36には重ね焼きの痕跡がうかがえる。

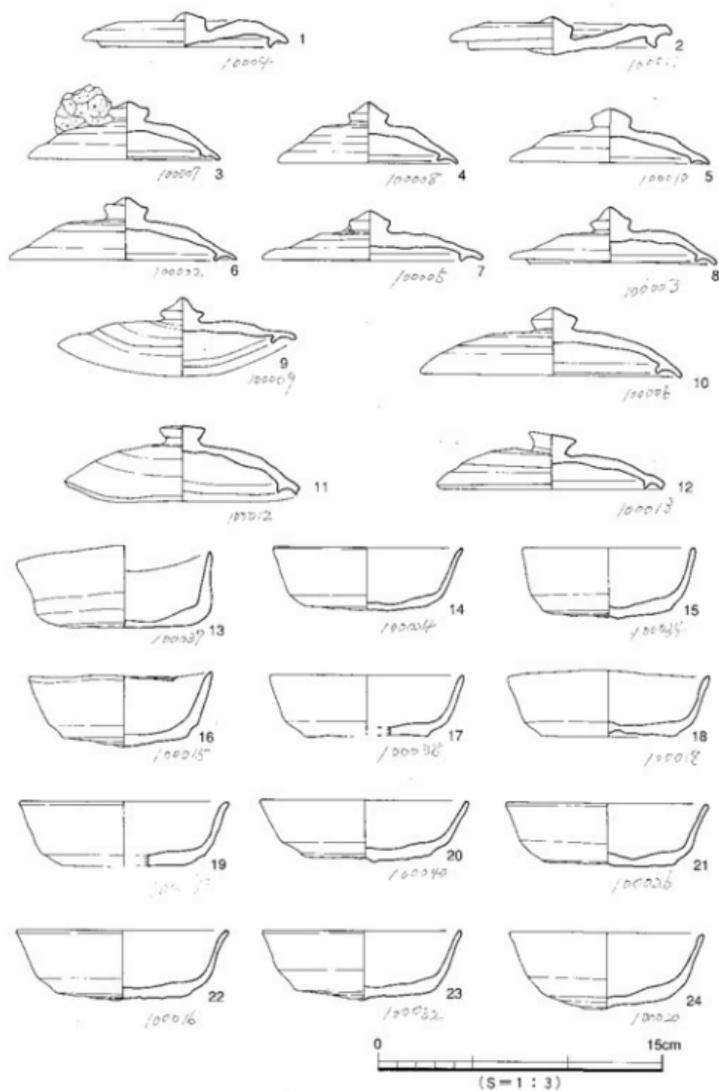
有高台坏身(37～41) 平底の坏に「ハ」字状に開く高台を貼り付けたものである。37は厚手のつくりで口縁は外方に開き、高台は内端で接地する。38は薄手で口縁端部は丸くおさめ、高台は内端を屈曲させる。この2点には体部に沈線が観察できる。39は高台端部を丸くおさめる。40・41は薄手のつくりで体部には凹線文が1条巡る。40の高台は内湾気味に伸び平坦に接地する。

碗(42～44) 42は法量が坏に比べ若干大きいことから椀とした。平底で回転ヘラ切りの際の段が残る。口縁は中位より外方に開く。43・44は口縁が内湾気味に立ち上がるもので、44は腰部に凹線文を1条巡らせ、底部外面は回転ヘラ切り後不定方向のナデを施すものである。

高坏(45～50) 45・46は同一個体と思われる。大型で坏部は浅い境状を呈する。47は小型で、脚部は水平に伸び、端部を強く外下方に挽き出している。48は無高台の坏身の形を備え、外面に凹線文を巡らす。50は小型の脚部で脚端外面は鈍い凹状の段をなしている。

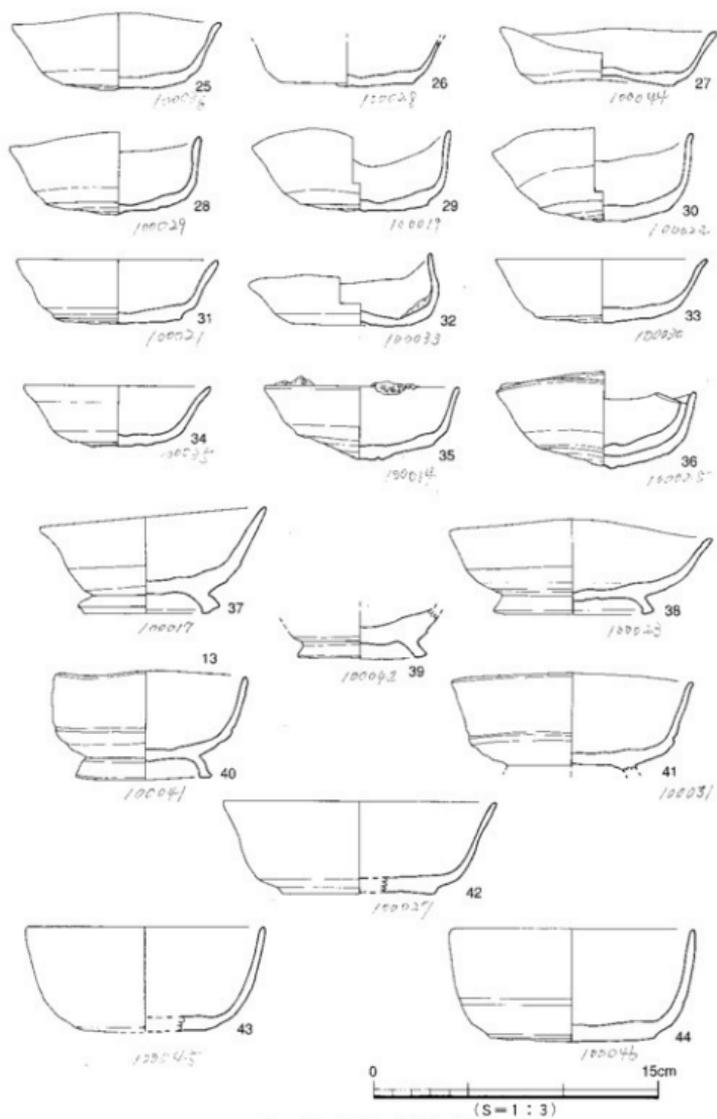
短頸壺(51) 丸みのある肩部と頸部に凹線文を1条巡らせ、内外面ともヨコナデ調整を施すものである。

長頸壺(52) 頸部径と施文の様子から長頸壺とした。肩部は丸みがあり、刺突斜線文を施す。その上を切る凹線文を観察できるが明瞭ではない。胴下半は横方向のヘラ削り調整を

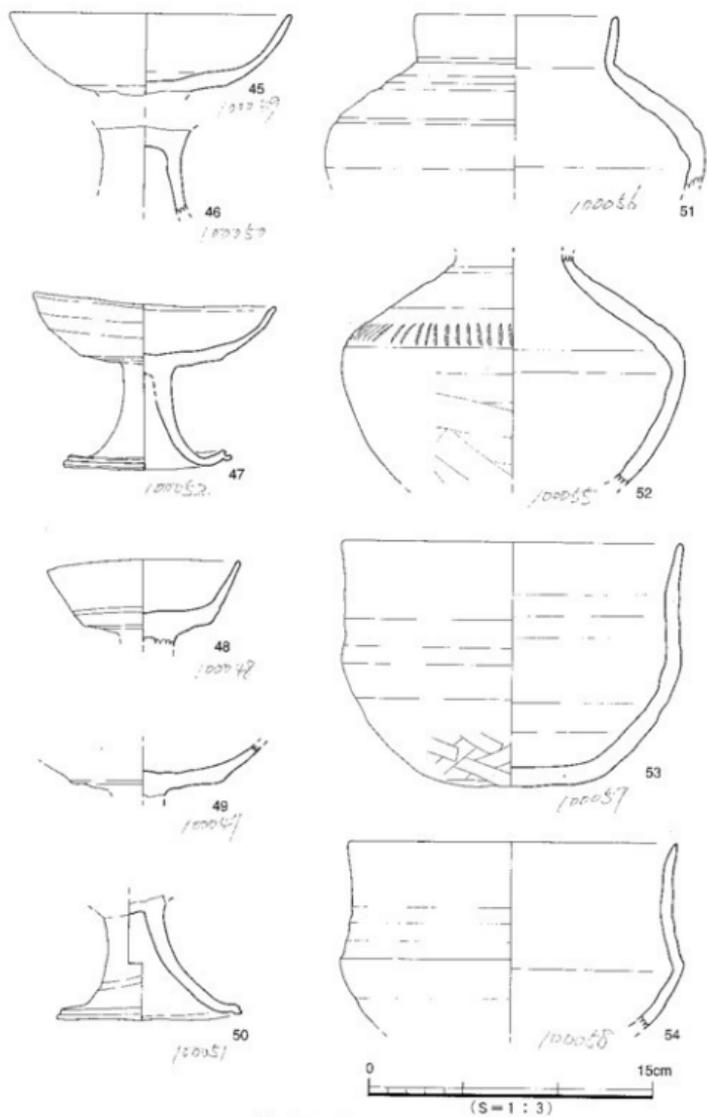


第9図 窯体出土遺物(1)

遺構と遺物



第10図 窯体出土遺物 (2)



第11図 竈体出土遺物 (3)

施している。

鉢 (53・54) 53の体部下半は椀の形態を呈し、口縁は上方に伸び端部で細る。底部はヘラ削りを施す。54は体部中位に鈍い稜を持ち、口縁が内傾外反するものである。

甕 図化し得なかったが、体部片と口縁部片の出土をみた。口縁部片は焼け歪んでいるが、凹線文が1条巡り、端部を丸くおさめるものである。体部外内は平行叩き調整の後カキ目調整を施すもので内面には同心円文がみられる。

#### b. 灰原出土遺物 (第12～20図、図版11～21)

灰原から出土した遺物は坏蓋250点、無高台坏身232点、有高台坏身15点、長脚高坏11点、短脚高坏76点、椀11点、鉢13点、長頸壺5点、平瓶3点、高盤2点、擂鉢1点、横筥3点、把手5対、甕10数点を数える。これらの点数は1/5以下の口縁部片や体部片を除き、一個体と確認しうるもののみを大まかにカウントした結果である。

##### 坏蓋 (55～87)

蓋は窠体から出土したものの同様、天井部中央に宝珠状のつまみを付し、口縁部内面にかえりを持つ。ここでは口縁からかえりにかけてのつくりに注目し、分類を試みることにした。厚手のものをa類とし、薄手のものをb類とする。薄手のつくりではあるが、口端部外面に面を持つものを特にc類とした。

a類 (55～62・64～67) 55～57は器高が高く、58・59は若干低い。60・61は肩部がなだらかで扁平なもの、62・64・65は天井部が平坦で肩から口縁にかけてが長い。66・67は出土坏蓋中で最大口径を測る。a類の天井部は回転ヘラ削り調整が顕著で、内面にタテナデを施すものがある。かえりは口縁端部より下方に伸びるか、同じ高さになり内傾外反気味で端部は尖っている。つまみはやや大ぶりで丸みがあるものが多い。

b類 (68～87) 68～70は器高が高く、71～76は扁平。これらの天井部の回転ヘラ削り調整は顕著で71・76の内面にはタテナデを施しており、かえりは口縁端部より下方に伸びる。77～85はやや器高が高く天井部は回転ヘラ削り調整後にヨコナデを施す場合がある。86・87の天井部は丁寧な回転ヘラ削り調整が施され、肩は丸みを持っている。b類のかえりは口縁端部とほぼ同じ高さで内傾し、つまみはやや小ぶりで、72のように基部がくびれた形を早している。

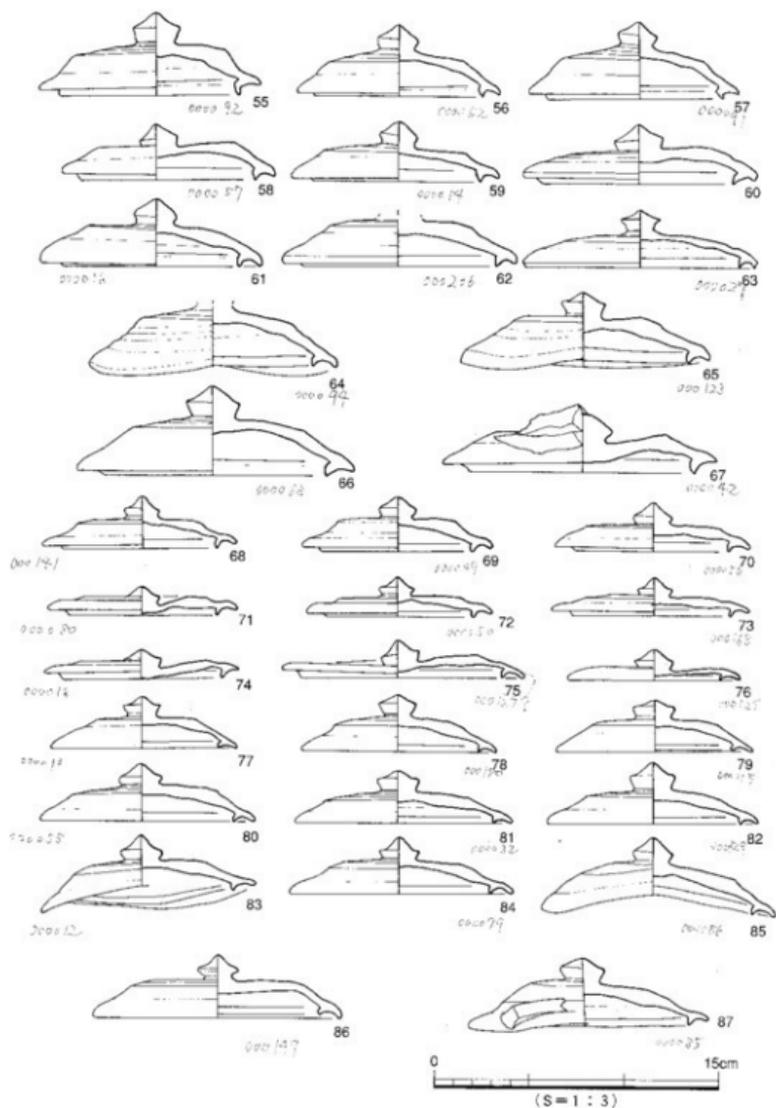
c類 (63) 63は天井部が弧を描き、回転ヘラ削り調整の範囲は広く丁寧。かえりは口縁端部と同じ高さで内傾し、尖る。つまみのつくりはシャープである。

##### 無高台坏身 (88～111)

底部に回転ヘラ切り痕のみられる平底の坏身である。体部立ち上りの器壁が比較的厚手のものと薄手のものの2種類がある。ここでは前者をa類、後者をb類とし分類を行った。

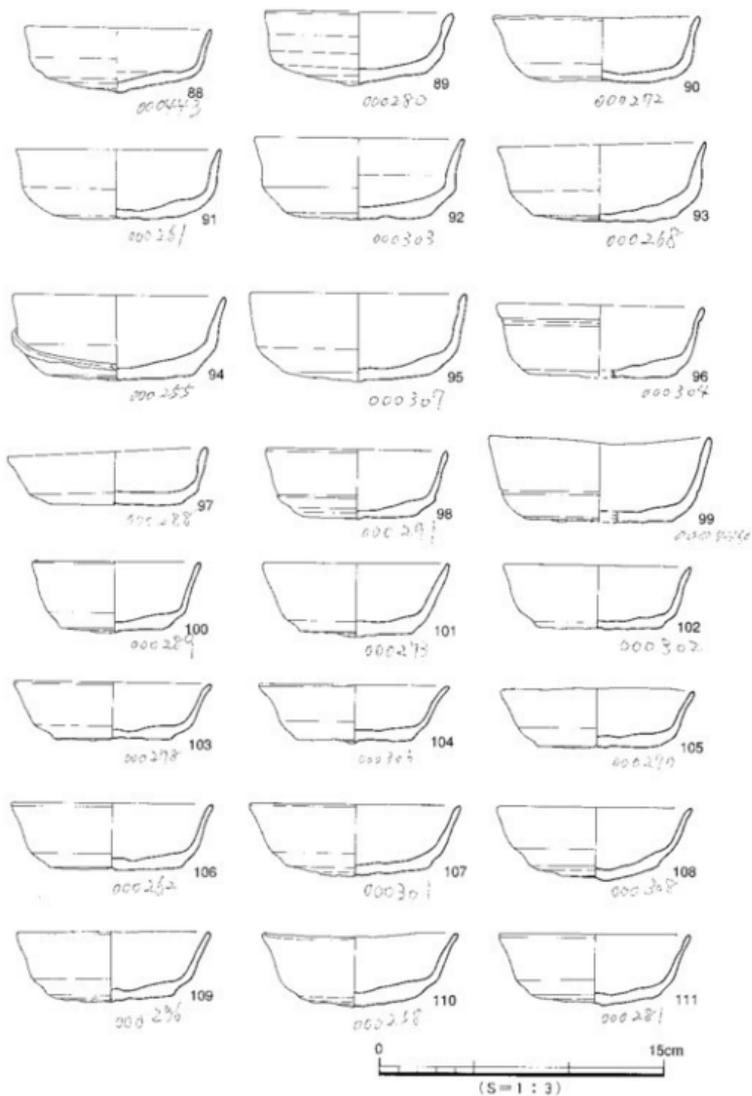
a類 (88～95) 88・89は底部が突出するが他は平底。底部より丸みをもって立ち上がり、口縁は中位より外反し細く尖るものと、肥厚し丸くおさめるものがある。底部は回転

灰原出土物



第12圖 灰原出土物(1)

透拂七瀬物



第13図 灰原出土遺物(2)

ヘラ切り後若下ナデを施している。

**b類 (96～111)** 102～111は底部回転ヘラ切り後、未調整のため立ち上がり部との境に段ができる。口縁は端部で外方に開き、端部は若干肥厚させ丸くおさめる。96は口縁下に凹線が巡る。97は特に器高の低いもの。98は腰に低い稜を持つ。99は腰部に凹線を1条巡らす。100・101は他と比べ口径に対し器高が高い。

有高台坏身 (112～118)

平底の坏身に「ハ」字に開く高台を貼り付けたもの。坏部のつくりが厚手のものと薄手のものがある。前者をa類、後者をb類とする。

**a類 (112)** 口縁は広く開き、体部中位には凹線が1条巡る。高台はしっかりしており内端が突出する。

**b類 (113～118)** 113・114は高台のつくりがしっかりしてやや高い。115～118は高台が低く簡単につくりになる。これらの口縁はa類に比べて直立ぎみに立ち上がり、端部を丸くおさめる。a類と同様、腰部に凹線を1条巡らせている。

**坩 (119～124)** 119～122は平底の底部より内湾気味に立ち上がり外方に開く。いずれも口縁端部は尖る。体部中位あたりに凹線が巡るものとそうでないものがある。底部は回転ヘラ切り後若下ナデ。123は深手のもので、口縁端部を外方に曲げ丸くおさめる。

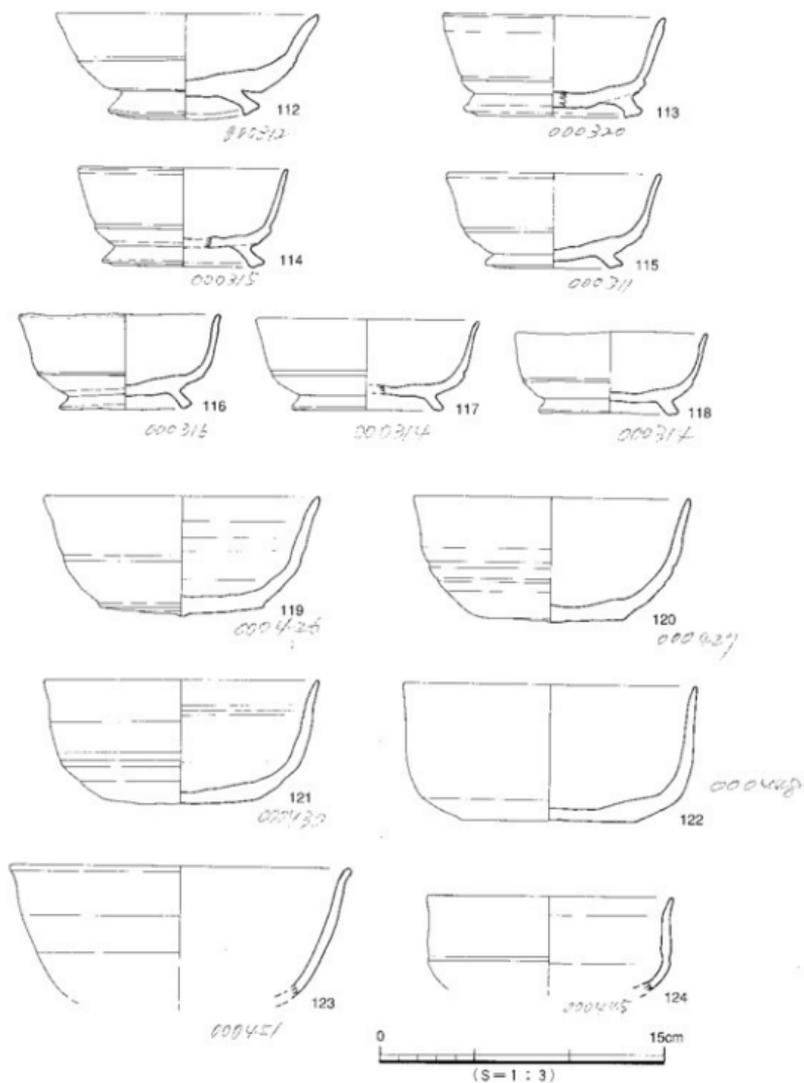
**長脚高坏 (125～127)** 無蓋の高坏で、裾は緩やかに開く。裾端部を外下方に挽き出ししている。坏部は浅い椀形を呈す。126の脚部外面には低い稜がみられる。

**短脚高坏 (128～143)** 短脚高坏には坏部が無高台坏身の形を備えるものと、浅い椀形になるものの二種類がある。前者をa類 (128～130・135～138)、後者をb類 (139～143) とする。a類の坏部には凹線を1条巡らせる場合とそうでない場合とがあるが、b類には施されない。脚部端部を外あるいは下方に挽き出すものが多い。132～134のように肥厚させたものもある。

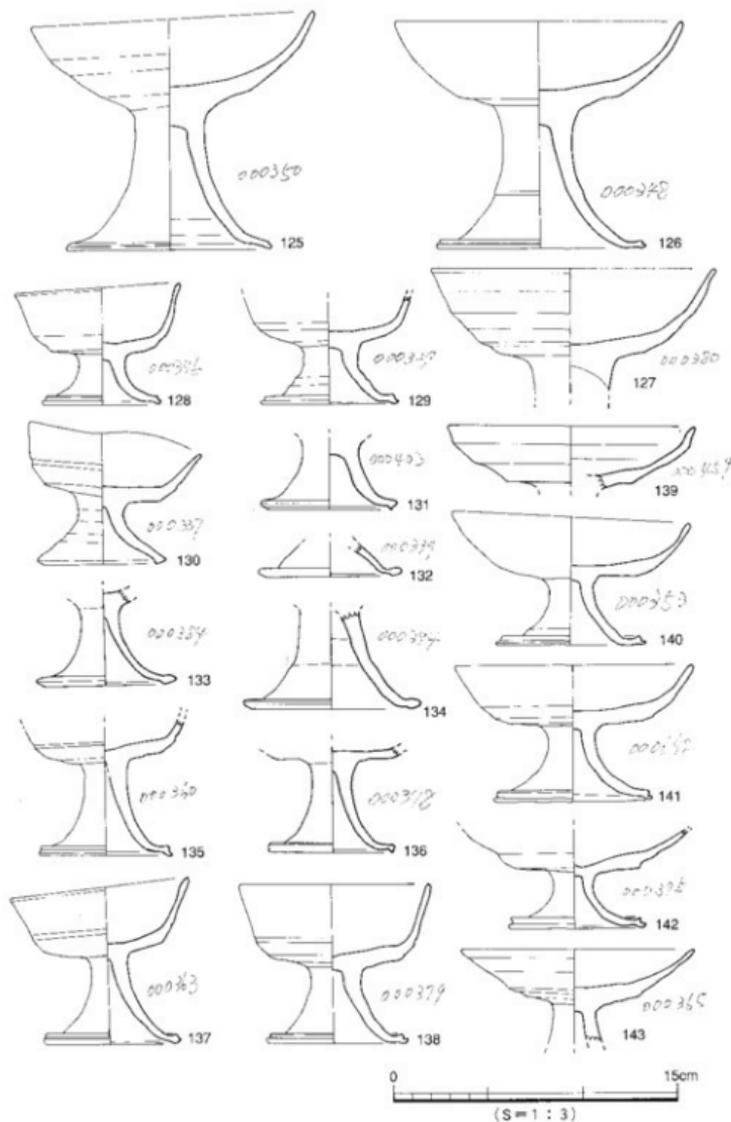
**鉢 (144～150)** 鉢の胴部より下半は椀に似た形状を呈しており、口縁は内傾外反するものと、直立するものがある。145～148は胴部径が最大となった位置に凹線を1条巡らす。焼成不良で磨減が著しく調整がわかりにくい。胴部下半はヘラ削りを施したと思われる。

**摺鉢 (151)** 円盤状の底部より真っすぐに立ち上がり、口縁部で外反する。体部外面に浅くて粗雑な沈線が2条、その下にもう1条凹線が巡る。体部の調整は内外面ともにヨコナデを施す。底部外面にはヘラ状工具による不定方向のナデがみられ、体部との接合部にも工具による横方向のナデが施される。

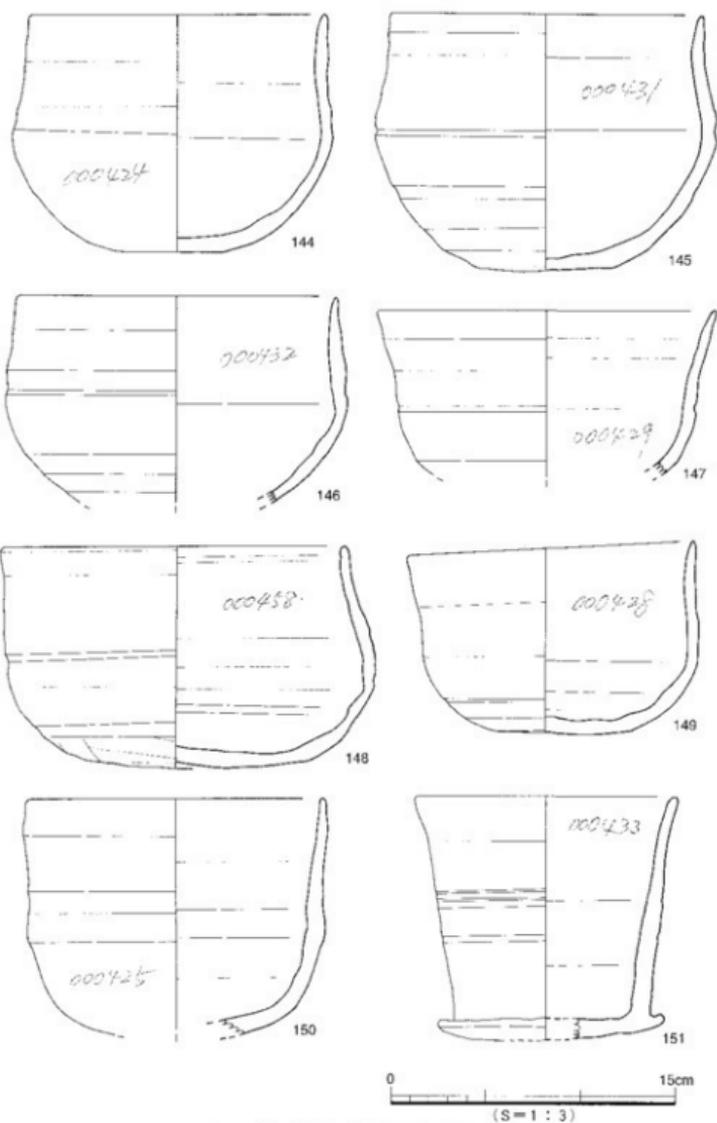
**長頸壺 (152～159)** 頸部は直線的に伸び口縁部で外反する。端部は丸くおさめる。肩部は丸味を持ち、1条の凹線と刺突斜線文を施す。高台は「ハ」字に開き内端が接地するものと平坦に接地するものがある。157・159は高台内端が突出する。胴部下半の仕上げにはカキ目調整とナデ調整がある。



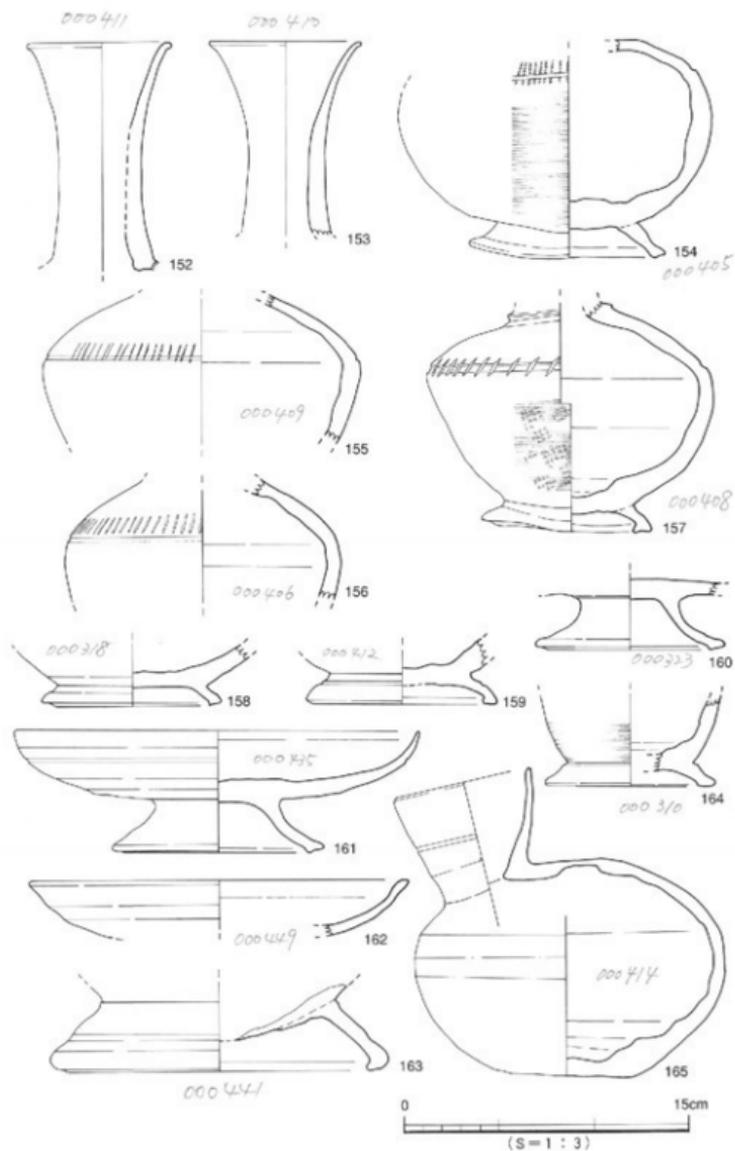
第14図 灰原出土遺物 (3)



第15圖 灰原出土遺物(4)

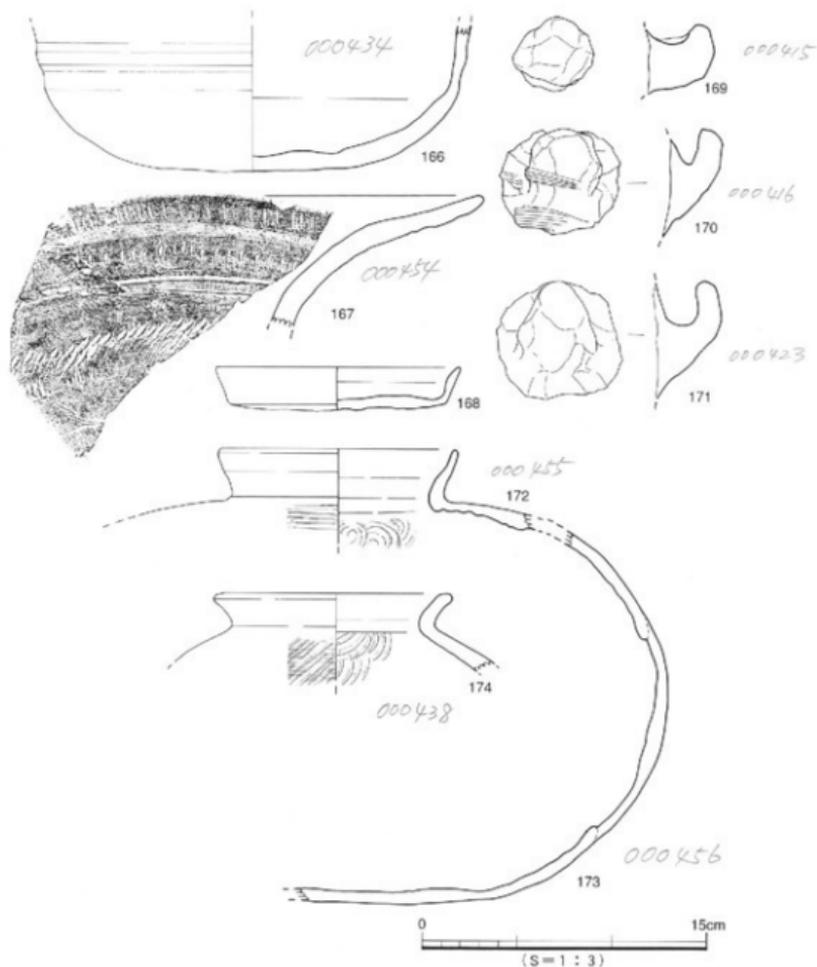


第16図 灰原出土遺物 (5)

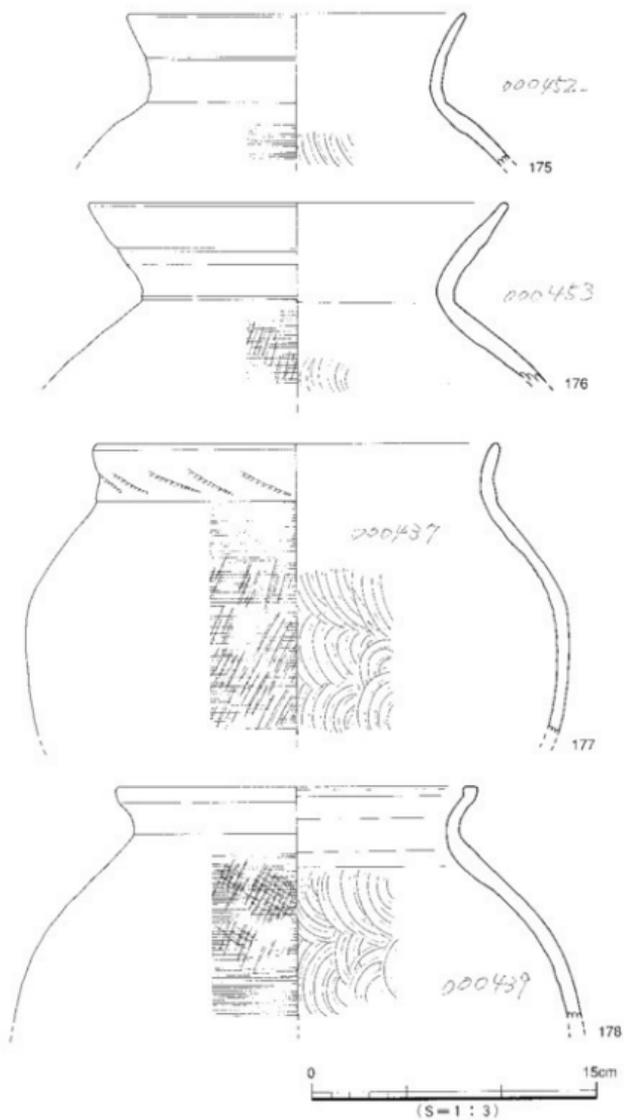


第17図 灰原出土遺物(6)

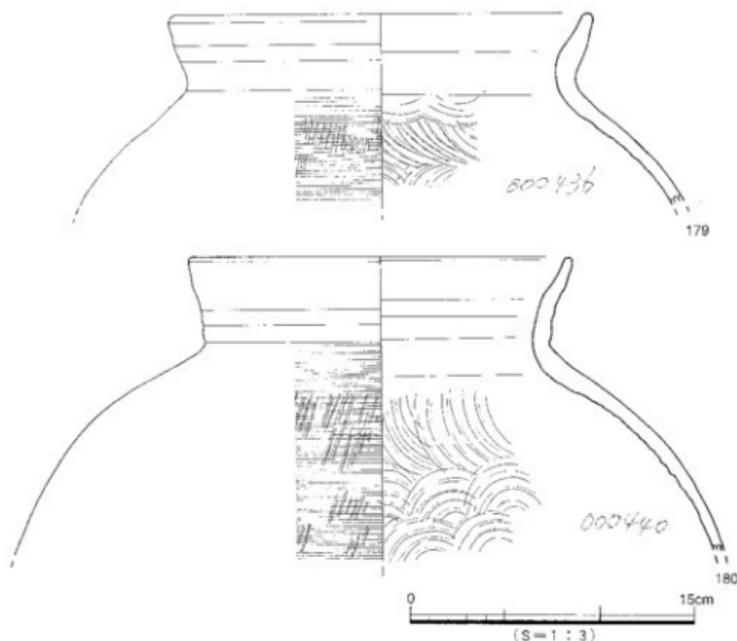
高盤 (160～162) 161の坏部は上外方に伸び、口縁端部は細く尖る。外面には1条の凹線がある。「ハ」字に開く脚部は貼り付けられており、端部は肥厚し内端接地する。坏部の外面は下1/3を回転ヘラ削りした後ヨコナア調整を施す。内面はヨコナアを施した後に坏の平坦な面に不定方向のナアを施す。162は口縁端部が肥厚し外反する。



第18図 灰原出土遺物 (7)



第19圖 灰原出土遺物 (B)



第20図 灰原出土遺物 (9)

平瓶 (165) 体部は偏球形を呈し、偏った位置に頸部をつくり、口縁は内湾気味に立ち上がる。口縁には凹線を1条巡らす。体部の天井を粘土板で塞ぎ、下半は回転ヘラ削り調整を施した後にナデている。

不明製品 (163・164・166・168) 163は壺など丸底の器種に貼り付けられていた脚と思われる。「ハ」字状に開き端部を内側に突出させる。164は壺の底部を思わせる。高台は「ハ」字状に開き平坦に接地する。体部外面にはカキ目調整を施す。166は大型の鉢か。底部より直立気味に立ち上がる。器面は磨滅しており調整は不明。168は蓋の可能性も考えられるがここでは皿状のものとした。底部は回転ヘラ切り未調整。

把手 (169～171) 剝離面の様子から甕に付されていたと思われる。牛角状を呈する。断面形には丸いものと扁平なものがある。いずれも手づくねで成形しており、170には接合時の工具痕がみられる。

横瓮 (172・173) 172と173は同一個体と思われる。口縁は中位より内湾し端部を丸くおさめる。体側部は球形を呈し粘土板で塞ぐ。体部外面は平行叩き調整、側部はカキ目調整



第21図 SK-1出土遺物

を施す。内面には同心円文がみられる。

壺(167・174~180) 167は大壺の口縁部片で大きく外反する。口縁端部には刺突斜線文を2段施し、1条の凹線を挟んでもう1段施文する。174は小型で、口縁は外反し端部を平坦におさめる。175・176の口縁は外方に開き、中位に凹線が1条巡る。177~182は口縁が真っすぐに立ち上がるもの。177の頸部には工具痕がみられる。178は口縁端部を上方に屈曲させ平坦におさめる。179・180は口縁が中位より内湾気味に開く。いずれも体部外面は平行叩き調整の後カキ目調整を施す。178は格子状叩き。内面には同心円文が観察できる。

SK1出土遺物(第21図、図版22)

壺(181) 大型で口縁33cmを測る。口縁部は内湾しながら外上方に開き、端部を平坦におさめる。波状文を4段施し、その上から凹線を2条巡らす。体部外面は平行叩き後、粗雑なカキ目調整を施す。内面には同心円文が観察できる。

### 3. 考察

#### (1) 出土須臾器について

##### a. 器種構成

灰原出土遺物から考えると、1号窯で生産された製品は主に蓋坏のセットである。セット関係には二つの組み合わせが考えられる。宝珠つまみ付蓋と平底の身、同様の蓋と高台付の身の場合である。ここでは宝珠つまみ出現以前のタイプはみられない。法量を見ると、蓋の口径は8.0~14.5cmの範囲に分布するが、主体を占めているのは10~11cm代である。無高台坏身は口径9~10cm代、器高3~4.5cmで、有高台坏身は口径10~13.7cm、器高4~5cmを測る。無高台坏身と有高台坏身の構成比は16:1と圧倒的に無高台坏身が多い。柄は口径15cm、器高6.5cm前後に規格性がうかがえる。

蓋坏に次いで多く出土したのは高坏である。これらには大型長脚のものと小型短脚のものがみられるが、いずれも脚に透かしを持たない。構成比は1:7と後者が主体を占める。前

者は寸法と形態に規格性がみられるのに対して、後者は脚高3～5cmと幅があり、坏部の形態もa類、b類の二種がある。

鉢は大型で鉄鉢形と呼ばれるものとは異なっており、他窯址ではあまり類例をみない。甕は体部片の量からすると、比較的多く生産されていた器種と思われる。口縁が短く、端部を丸くおさめるのが特徴である。そのほかの器種としては少量であるが、平瓶、横瓮、摺鉢、高盤がみられる。

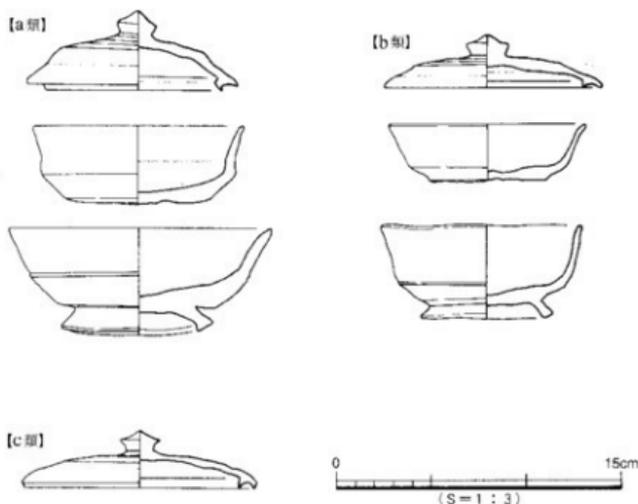
窯体出土遺物には、平瓶、摺鉢、高盤がみられなかったが、短頸壺が出土しており、以上述べた灰原・窯体での出土遺物が駄場姥ヶ懐1号窯製品の器種構成ということになる。

#### b. 姥ヶ懐1号窯址出土蓋坏の特徴

灰原から出土した蓋や坏はひとつの型式内におさまるが、細かくみてゆくと器壁の厚いものと薄いもの二者があり、本文中では前者をa類、後者をb類と分類し、蓋に関しては特にc類を設けた。ここで、器種ごとの形態や手法における特徴をまとめておくと以下のとおりである。

#### 【a類】

蓋…… 天井高が比較的高く、かえりは口縁端部より下方に伸びる傾向がある。端部のつ



第22図 蓋坏の分類

くりは尖る。天井部内面にタテナデを施す場合がみられる。

無高台坏身……口縁は直立気味。端部のつくりは尖る。底部は回転ヘラ削り後ナデを施す。

有高台坏身……角ばった断面形状をなす高台は高く「ハ」字状に開き、内端接地する。

#### 【b類】

蓋……天井高は比較的低く、かえりは口縁端部と同じ高さか、やや低くなる傾向にある。

端部は丸くおさめる。

無高台坏身……口縁は外方に開き、端部は丸くおさめる。底部は回転ヘラ切り未調整。

有高台坏身……角のとれた高台は「ハ」字状に開くが、低く平坦に接地する。

以上のように、器種ごとの形態や手法における特徴は、b類に後出の要素が強く、蓋c類に関してはさらに後出の様相を示しているものと考えられる。ここで窯体最終床面から出土した蓋坏をカウントすると、a類10%、b類85%、c類5%となり、灰原での構成比33：66：1に比べると、あきらかにb・c類の比率が高く、上記の分類の正当性を裏付けられるものといえよう。

## (2) 周辺の窯址

### a. はじめに

駒場姥ヶ懐窯址をまとめるにあたり、周辺の窯址も含めた古窯址群としての様相をとらえる目的をふまえ、3回にわたる踏査を行った。

踏査の案内役を引き受けて下さったのは平井町在住の重松隆之氏である。重松氏は小野町誌に当地区の遺跡を報告されており、その分布については熟知しておられる。今回の報告では貴重な資料もお貸し頂いた。

#### <踏査実施内容>

#### 第1回 1991年9月6日 今吉地区から北梅本地区にかけて

今吉 柳谷(やなだに)窯址、未確認に終わる。

五楽 次谷(ばらだに)窯址、灰原を確認。

駒場 姥ヶ懐1・2号窯址の現状を確認。

小野 小野谷駒場窯址の現状を確認。

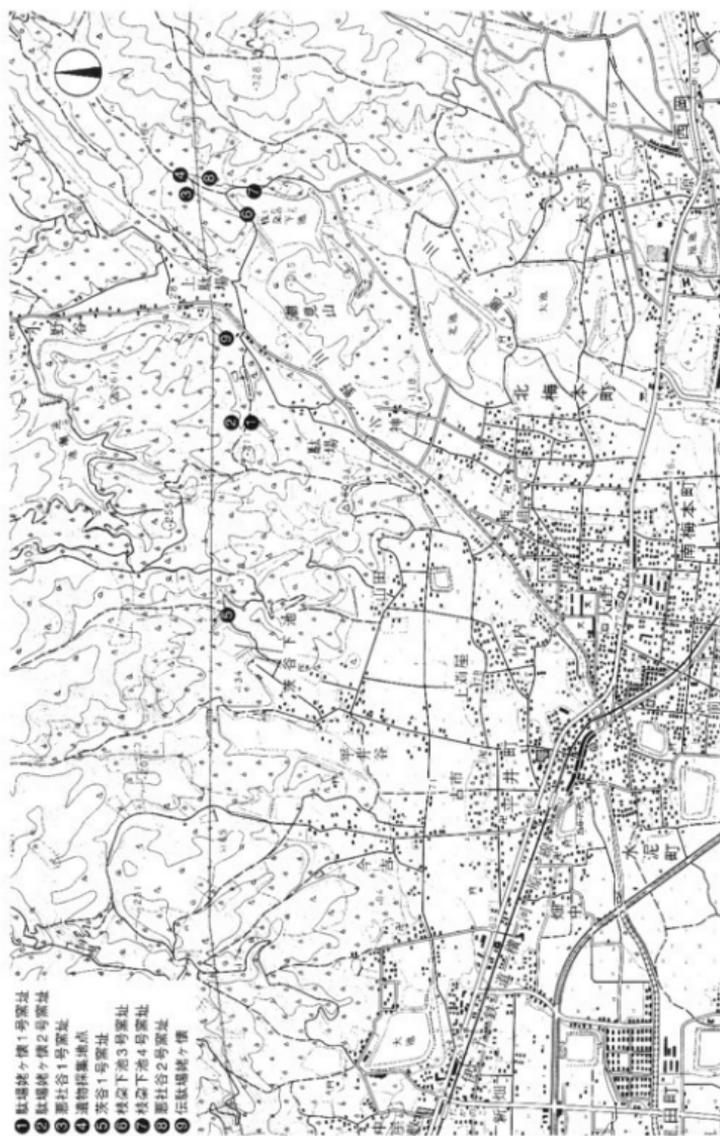
北梅本 悪社谷(あくしゃだに)1号窯址の灰原を確認。近世窯址の煙道も2基確認。

#### 第2回 1991年

今吉 柳谷窯址は開墾のため消滅したと考える。

#### 第3回 1991年11月10日

北梅本 枝桑ド(しだのした)池窯址の灰原を確認。



第23図 小野谷周辺の古窯址分布図 (S=1:25,000)

当地区における窯址の存在は早くより知られている。まず、小野谷駄場窯址については昭和40年代に圃場整備事業に伴う確認調査が行われたようである。その報告〔文献1〕の中では、4基の瓦窯と3基の須恵器窯を確認したとされている。出土遺物は、駄場姥ヶ懐1号窯に若干先行する様相のもの、併行するものと、次の段階にあたるかえりが消失した坏蓋がみられるようである。瓦については布目瓦であること以外の説明はない。

この報告には枝架下池窯址についても触れられており、小野谷駄場窯址が時期的に後続するとなっている。今回の踏査で確認した枝架下池窯址は関係者との討議の上、3号窯址とした。さて、四国地方古代窯業遺跡地名表〔文献2〕では、駄場姥ヶ懐2号窯址と悪社谷窯址について簡単な紹介がされている。地名表で報告された姥ヶ懐2号窯は1号窯址の東約300m、海拔135m地点にあり、第23図⑨地点に相当するようである。今回の踏査では該当位置に木造の倉庫が建てられているのを確認し、坏身の細片を1点採集するに終わり、窯址であるとの確証を得られなかった。一方、第23図②地点では窯壁と多数の須恵器を採集した。よって、②地点を駄場姥ヶ懐2号窯とした。地名表の悪社谷窯址は第23図④地点であるが、窯址に関する資料は確認できなかったことにより、この地点は採集地点として認知するものであり、出土遺物には布目瓦がある。

【参考文献】

1. 「小野谷駄場窯址」『松山市史料集第2巻 考古編Ⅱ』 松山市教育委員会 1986
2. 長井敬秋 「四国地方古代窯業遺跡地名表」『香川県古代窯業遺跡分布調査報告』  
瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第1号 1984

b. 各窯址の概要 (第23図)

小野地区の古窯址群は、松山平野を東西に流れる重信川の北岸にあたり、平野の東南部に位置する。今吉町から北梅木町にかけては標高300m前後の丘陵が連なる。その丘陵中腹海拔150mの位置に分布している。

小野谷は小野川によって形成された開析谷で、その支流にあたる悪社谷川は悪社谷を形成している。この地区は農業用の溜池が多く枝架下池もそのひとつである。

駄場姥ヶ懐2号窯址

所在 松山市北梅木町小野谷乙658番地 (第23図-②)

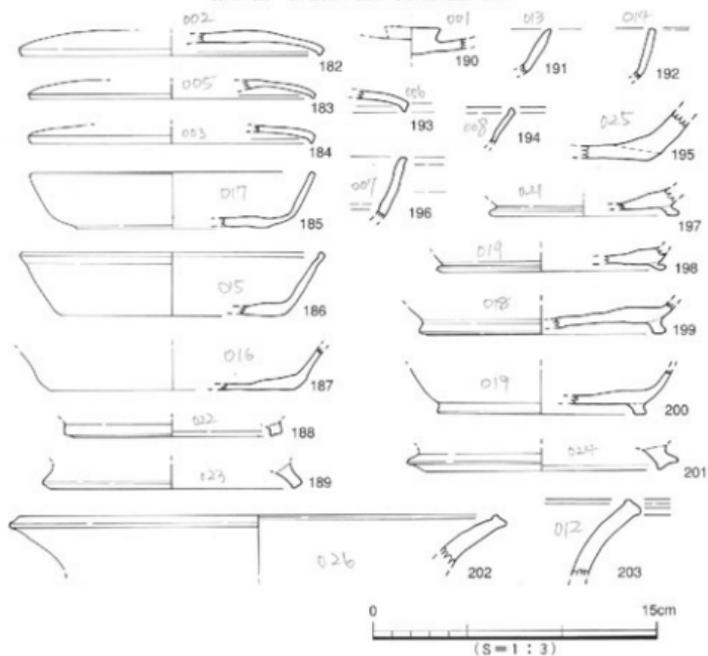
立地 小野川上流の小開析谷南傾斜。海拔145m。

遺構 未確認。須恵器の散布が著しい。

遺物 (第25図) 坏蓋はかえりを失い口縁端部を下方に短く屈曲させたもので、上面が平坦なつまみがみられる。坏身は平底で口縁が外方に開くタイプと、短い高台が付されたタイプがある。201は壺の高台と思われる「ハ」字状に開き内端が接地する。202・203は甕の口縁部で外反し端部を平坦におさめている。195は平底の甕である。



第24図 駄場峠ヶ横2号窯跡確認地点



第25図 駄場峠ヶ横2号窯採集遺物



第26図 悪社谷1号窯址確認地点

### 悪社谷1号窯址

所在 松山市北梅本町(第23図-③)

立地 悪社川上流の小開折谷南傾斜。海拔160m。

遺構 傾斜面の中位付近に窯体が構築されたと推定できる。窯付近には須恵器、窯壁片の散布が著しいが灰層は露呈していない。

遺物(第27図、図版25) 坏蓋はかえりを失い、口縁端を下方に屈曲させる。つまみは扁平である。206は山形の天井部に宝珠状のつまみが付される。坏身は平底で口縁が外方に開くもの212と、高台を付したもの214～216がある。高台の内端は屈曲させ平坦に接地する。甕の口縁には直立する227、外反する223～226がある。224・226には下垂する突帯が付く。甕体部内面は同心円文がナデ消される。他の器種では平瓶・甌・壺・埴がみられる。

### 悪社谷2号窯址

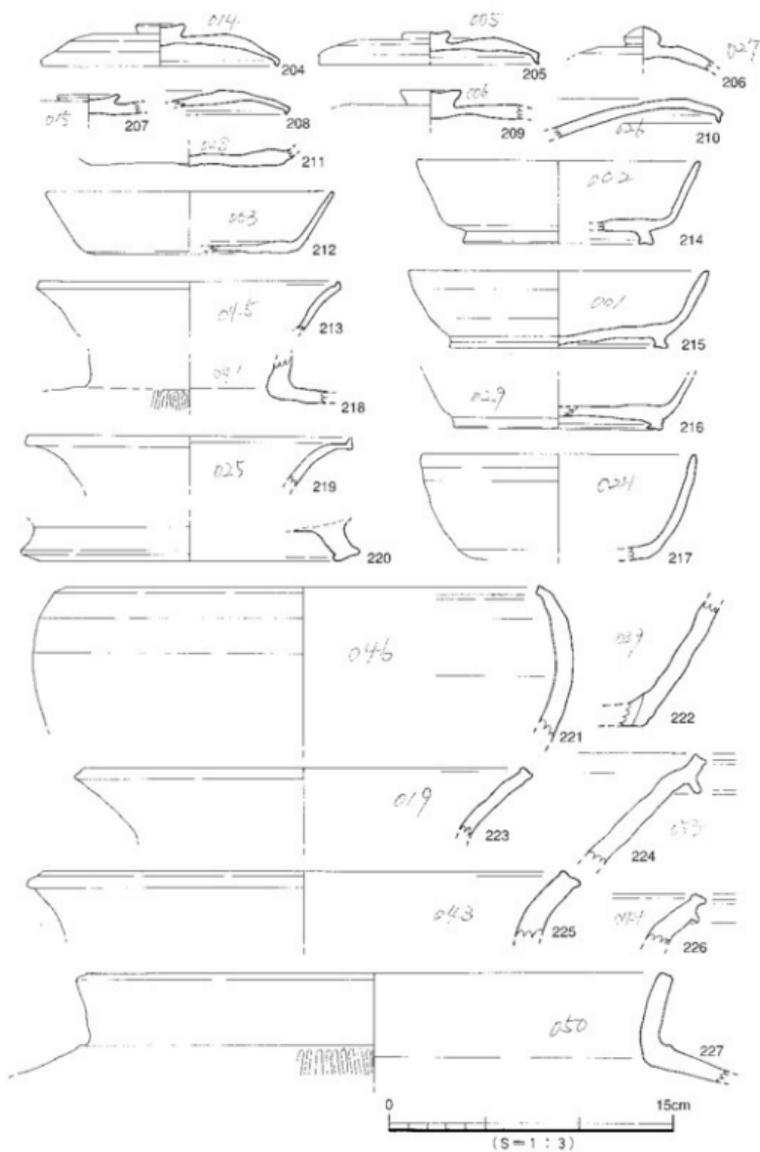
所在 松山市北梅本町(第23図-⑤)

立地 悪社川上流の小開折谷斜面。海拔165m。

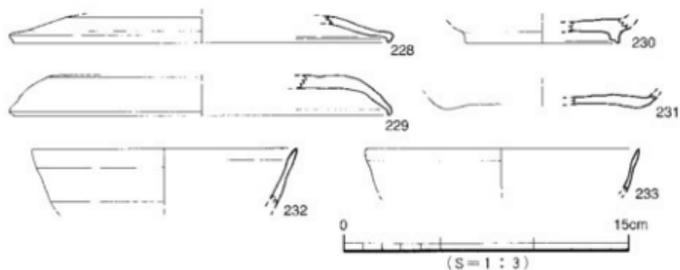
遺構 休窯中の斜面で須恵器片、窯壁片がわずかに採集された。

遺物(第28図) 坏蓋はかえりを失い、口縁端部を下方に短く屈曲させる。天井部が高い229や、口縁にかけて「ハ」字状に広がる228がある。坏身は平底の231、内端の短い高台を付した230がある。坏身口縁部の細片は、端部をやや肥厚させた後細く尖らせたものである。

遺構と遺物



第27図 悪社谷1号案採集遺物

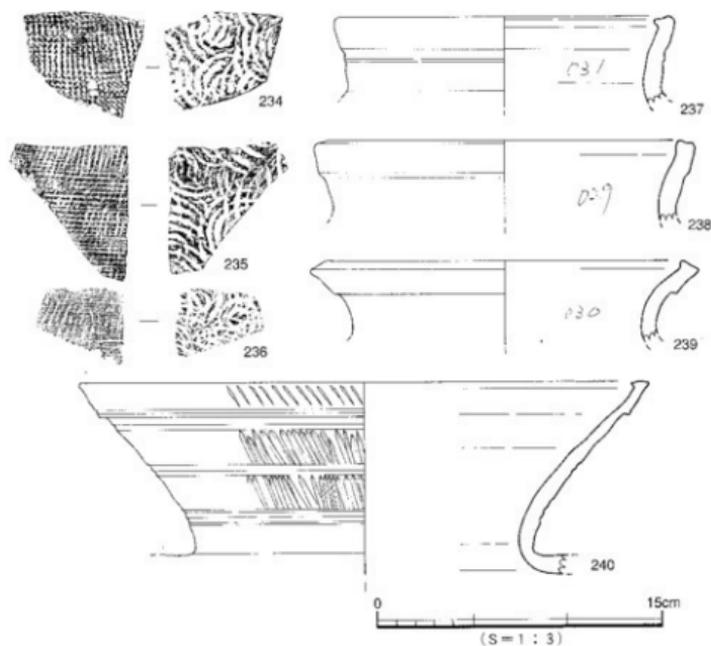


第28図 悪社谷2号窯採集遺物

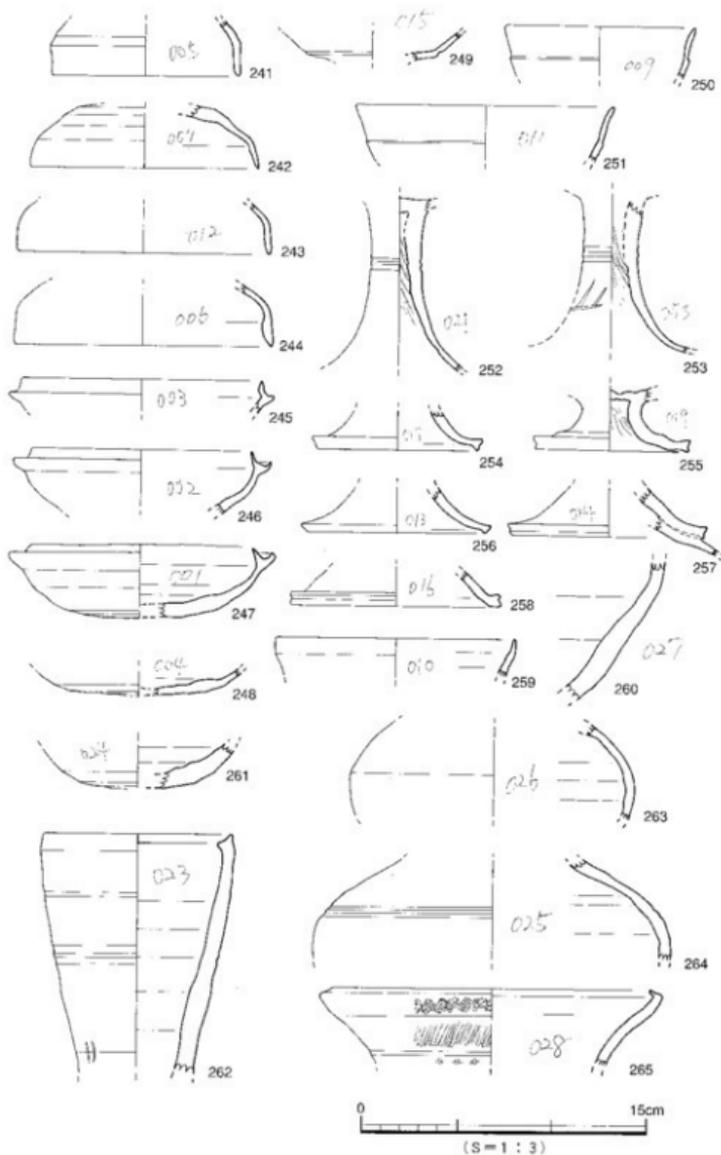
茨谷1号窯址

所在 松山市平井町2576 (第23図-⑤)

立地 小開析谷を利用した溜池より南に枝分かれした谷筋の緩傾斜面に構築したものと考



第29図 茨谷1号窯採集遺物(1)



第30図 灰谷1号窯採集遺物(2)

えられる。海拔124m。

**遺 構** 果樹園に開鑿されているため、その具体的な位置は不明である。谷部に須恵器片・窯壁片の散布が著しい。

**遺 物** (第29・30図、図版24) 坏は身にかえりを持った、古墳時代にみられるものである。245～247は受部のつくりが華奢で、口縁端を屈曲させている。247の底部調整は不明。坏蓋の天井部の調整はわからないが、口径はやや小さめになっている。高坏は長脚で脚柱が細く締まり、凹線文を2条巡らせたものと、短脚で脚裾端を強いヨコナデによって面を持たせ、なおかつ254のように下方に屈曲させたものがある。いずれも内面の紋り痕が顕著である。

他の器種としては、260～264のような壺類、237～240・265のような甕類がみられる。甕の口縁部の形態には直立するものと、外反するものがあるが、端部は強いヨコナデが施され、内端を屈曲させている。断面形は長方形に近く意識して作り出されたことがうかがえる。施文はヘラ状工具による斜線文や凹線文、ハケ目による波状文がみられる。ヘラ記号は高坏や長頸壺に施されており、平行する2本斜線を基調としている。

#### 枝桑下池3号窯址

**所 在** 松山市北梅本町(第23図-⑥)

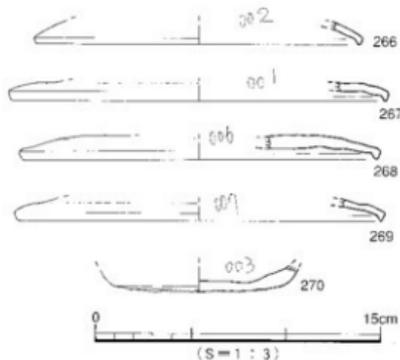
**立 地** 小開析谷を利用した溜池の北岸側に位置しており、谷筋から伸びた低丘陵の突端部にあたる緩傾斜に構築したものと考えられる。海拔142m。

**遺 構** 明確な遺構は未確認だが、斜面に灰層が露呈しており、灰原に相当するものと推測される。

**遺 物** (第32図) 坏蓋266～269はかえりを消失しており、端部を短く下方に屈曲させたものである。270は坏身の底部で外底面は回転ヘラ切り未調整である。



第31図 枝桑下池3号窯跡確認地点



第32図 枝桑下池3号窯採集遺物

沈線が巡る。276は皿で、口縁はやや外反し、端面に沈線が巡る。283は有高台坏、内底面に沈線が1条巡る。高台は低く、端部は強いヨコナデによってつまみ出されている。

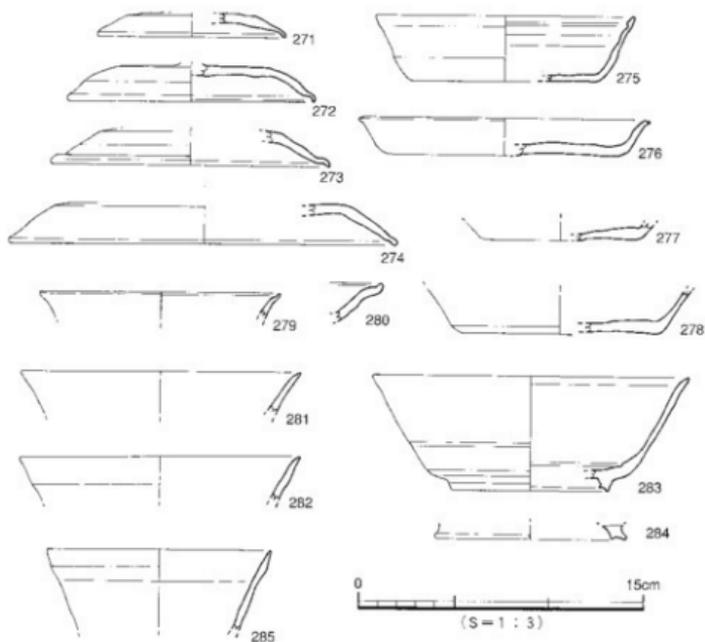
枝桑下池4号窯址

所在 松山市北梅本町(第23回-②)

立地 3号窯の対岸にあたる溜池の南岸で発見。本来、開析谷に面した緩傾斜面に構築したと考えられる。海拔142m。

遺構 未確認。

遺物 (第33図) 坏蓋271~274はかえりを消失しており、端部を下方に短く屈曲させたものである。明確な稜はなきない。275は坏身で回転ヘラ切りを行っている。口縁内端に



第33図 枝桑下池4号窯採集遺物

### (3) まとめ

前節でも述べたように、駒場姥ヶ懐1号窯の製品は細分は可能なものの、概ね一型式の範疇におさまるもので、比較的短期間の採業であったもと考えられる。

表2は悪社谷2号窯と枝朶下池3・4号窯を除いた4窯の遺物を器種ごとに呈示したもとである。茨谷1号段階では天井部に丸みを持った蓋に、短い受部、内傾するかえりを持つ身のセットがある。天井部と底部外面にはヘラ削りを施している。身の口径は11~12cm、蓋で12~13cm前後である。高坏には長脚、短脚の双方があり、長脚のものには透孔は施されない。これらの遺物を総体としてみると、田辺福年TK217の古段階に併行するものと考えられ、7世紀初頭ないし前葉の年代をあてておく。この茨谷1号窯に直接後続する段階のものは、この表には呈示されていないが、周辺の窯址の項で若干触れた小野谷駒場窯址のうちの一部のものが相当するものと推定される。

姥ヶ懐1号窯の蓋坏をみると、蓋と身が逆転したタイプで、口径は無高台坏で10cm、有高台坏で11~13cmとなるものが多く、15cmを超えるものはない。蓋のかえりは短く内傾する。無高台坏はヘラ切り未調整の平底になる。有高台坏は高台が高めで外方に開く。この窯からは茨谷タイプの蓋坏は出土していない。TK217に続くTK46併行期と考え、7世紀後半の年代をあてる。

姥ヶ懐2号窯では、蓋坏の口径が15cm代に移り大型化している。有高台坏の高台は低く、僅かに外方に開くだけになる。悪社谷1号窯では、蓋の口径が15cm以下のものと、20cmを超えるものがある。これら2窯と枝朶下池窯は、姥ヶ懐1号窯に続くもので、MT21・平城I併行の8世紀前葉のものとしておく。

#### 遺物観察表 (作成者:加島なおみ)

(1)番号は本文中の通し番号である。

(2)法量欄 ( )は復元推定値

手法欄 土器の各部位を略記

天-天井部、つ-つまみ、か-かえり、坏-高坏坏部、坏底-高坏坏部底、  
胴上-胴部上半、胴下-胴部下半、口-口縁部、肩-肩部

色調・胎土・焼成欄

色調:白灰-自然灰釉、内-内面、外-外面、

胎土:細砂粒-1mm以下の石英・長石、砂粒-1~2mm程度の石英・長石

焼成:◎-良好、○-普通、△-やや不良、×-不良

表2 小野谷周辺窯跡の須恵器

(S=1:6)

	坏	高坏	その他	壺
茂谷1号窯				
姥ヶ横1号窯				
姥ヶ横2号窯・悪社谷1号窯				<p>姥ヶ横2：182-186・199・200・202・203 悪社谷1：204・205・212・214-217・220-227</p>

遺物観察表

表3 窯体出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	分類	法量(cm)	形 態	手 法		色・胎土・焼成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
1	坏蓋	a	口 径 10.6 天井高 不明 つらみ高 1.2	燒成時天井部陥没。 かえり内縁平ら。	④内転ヘラケズリ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	青灰色(白灰) 細砂粒含む ○		6
2	坏蓋	a	口 径 11.6 天井高 不明 つらみ高 1.3	燒成時天井部陥没。 かえり内縁外反。	④内転ヘラケズリ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	青灰色(白灰) 細砂粒含む ○		6
3	坏蓋	b	口 径 10.2 天井高 2.0 つらみ高 1.1	青灰色ならぬか。 かえり遠欠陥し内縁する。	④内転ヘラケズリ ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	青灰色 積丸 ○	遺物片留書	6
4	坏蓋	b	口 径 9.6 天井高 1.9 つらみ高 1.1	天井部の削り範囲は狭い。 かえり口縁隆部より低い。内 縁する。	④内転ヘラケズリ ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		
5	坏蓋	b	口 径 10.5 天井高 2.8 つらみ高 1.3	南より口縁にかけて段がつく。 かえり口縁隆部と同じ高さで、 内縁する。	④内転ヘラケズリ ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰白色 細砂粒含む ×		6
6	坏蓋	b	口 径 12.2 天井高 2.2 つらみ高 1.1	天井部はならぬか。 かえり口縁隆部と同じ高さで、 内縁する。	④内転ヘラケズリ ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	青灰色 細砂粒含む ○		6
7	坏蓋	b	口 径 11.3 天井高 1.5 つらみ高 1.1	平縁で天井部削り範囲広い。 かえり口縁隆部とはほぼ同じ高 さで内縁する。	④内転ヘラケズリ ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○	砂粒留書	6
8	坏蓋	b	口 径 11.0 天井高 1.6 つらみ高 1.2	天井部平縁で、かえり内縁する。	④内転ヘラケズリ →ナデ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		6
9	坏蓋	b	口 径(12.0) 天井高(2.1) つらみ高 1.2	天井部の削り範囲。 南より口縁にかけて段がつき、 かえり内縁。	④内転ヘラケズリ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○		6
10	坏蓋	b	口 径 13.6 天井高 2.3 つらみ高 1.2	天井部はならぬか。 かえり口縁隆部より、やや短 く内縁する。	④内転ヘラケズリ →ナデ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		6
11	坏蓋	c	口 径 12.4 天井高(2.3) つらみ高 1.0	天井部削り平縁。口縁部外反に面をもち一角尖 る。つまみ上縁平らなみ。	④丁寧全周旋 ヘラケズリ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		6
12	坏蓋	c	口 径(12.0) 天井高(2.0) つらみ高 1.0	天井部削り平縁。口縁部に段。 薄縁外面に面をもちかえり二 角尖る。つまみ上縁平らなみ。	④丁寧全周旋 ヘラケズリ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○		6
13	黒高台 坏身	a	口 径(11.0) 器 高(3.5) 底 径 7.1	平底。足味も立ち上がる。 口縁中央より外反し、薄部天 取らぬ。	④内転ヘラ切り →未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	暗灰色(白灰) 細砂粒含む ○		6
14	黒高台 坏身	b	口 径(10.0) 器 高(3.3) 底 径 6.5	平底。 口縁開き薄部やや外反。	④内転ヘラ切り →若子ナデ ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		7
15	黒高台 坏身	b	口 径 10.6 器 高 3.4 底 径 7.0	平底。 口縁内湾みに立ち上がり、 薄部丸くおさめる。	④内転ヘラ切り →未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		7
16	黒高台 坏身	a	口 径 10.0 器 高 4.0 底 径 6.4	平底。段をもち立ち上がる。 口縁開く。	④内転ヘラ切り →未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		7
17	黒高台 坏身	b	口 径(10.2) 器 高 3.2 底 径 6.6	平底。ヘラ切り時の段。 口縁開き薄縁丸くおさめる。	④内転ヘラ切り →未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		7
18	黒高台 坏身	b	口 径(10.5) 器 高(3.3) 底 径 7.0	平底。ヘラ切り時の段。 口縁薄部丸くおさめる。	④内転ヘラ切り →未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		7

駄場施ケ横窯址

窯体出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	分類	法量 (cm)	形 態	手 法		色・質・土質	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
19	黒高台 平身	b	口径(11.0) 器高 3.3 底径(6.4)	平底。 口縁部内外反しくおさめる。	⑬内転ヘラ切り 若干ナデ ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		7
20	黒高台 平身	b	口径(11.0) 器高 3.0 底径 6.8	平底。 口縁突き縮割やや肥厚。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	⑬内転ヘラ 削り込み含む ○	(色灰) 空律片混着	7
21	黒高台 平身	b	口径(10.6) 器高 3.4 底径 7.1	平底。 口縁部細やや肥厚。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		7
22	黒高台 平身	b	口径(11.1) 器高 3.6 底径 6.8	平底。内筒どみに立ち上がる。 口縁内縁突き、基部やや肥厚。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		7
23	黒高台 平身	b	口径(10.5) 器高 3.2 底径 7.5	ヘラ切り痕突出する。 口縁突き、隅部丸くおさめる。	⑬内転ヘラ切り 若干ナデ ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		7
24	黒高台 平身	b	口径(10.0) 器高 3.1 底径 6.7	ヘラ切り痕突出。 口縁突き、隅部丸くおさめる。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		8
25	黒高台 平身	b	口径(10.0) 器高(3.7) 底径 7.0	口縁部肥厚。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		8
26	黒高台 平身	b	口径 7.5	平底。	⑬内転ヘラ切り 木調整	⑬ヨコナデ	灰白色 細砂粒含む ○		8
27	黒高台 平身	b	口径不明 器高不明 底径(7.2)	平底。 口縁部肥厚。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		8
28	黒高台 平身	b	口径(10.6) 器高(4.2) 底径 7.4	平底。 口縁部肥厚。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		8
29	黒高台 平身	b	口径不明 器高不明 底径 6.9	平底。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		8
30	黒高台 平身	b	口径不明 器高不明 底径 6.7	平底。 口縁部丸くおさめる。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰白色(314) 細砂粒含む ○		8
31	黒高台 平身	b	口径(10.5) 器高(3.4) 底径 6.7	平底。ヘラ切り時に段。 口縁部肥厚する。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○	内底に浮粒混 着	8
32	黒高台 平身	b	口径不明 器高不明 底径 7.0	平底。 口縁部丸くおさめる。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		8
33	黒高台 平身	b	口径(11.0) 器高(3.4) 底径(6.9)	平底。 口縁部肥厚する。	⑬内転ヘラ切り 若干ナデ ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	⑬内転ヘラ 削り込み含む ○		8
34	黒高台 平身	b	口径 10.7 器高 3.2 底径 7.3	口縁大きく開く。 口縁部内外反しくおさめる。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	⑬内転ヘラ 削り込み含む ○	口縁部混着 層	9
35	黒高台 平身	b	口径(10.0) 器高不明 底径 7.6	ヘラ切り痕突出。 口縁部丸くおさめる。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○	重ね焼き	9
36	黒高台 平身	b	口径不明 器高不明 底径 7.5	口縁部丸くおさめる。	⑬内転ヘラ切り 木調整 ⑭ヨコナデ	⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		9

竪穴出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	分類	流量(cm)	形 態	手 法		色澤・土・痕	備 考	図帳 番号
					外 面	内 面			
37	高台 杯	a	口 径(12.0) 器 高(5.0) 高台径 7.7	口縁部を器底のやや中央。 器底中央に浅溝1条。 高台縁に「ハ」字状の浅溝あり。	⑤⑥ 回転ヘラ切り・ 丸押し ⑦⑧ ヨコナデ ⑨⑩ ヨコナデ	⑪ ヨコナデ ⑫⑬ ヨコナデ	灰色 細砂粒含む		9
38	高台 杯	b	口 径(13.0) 器 高(4.5) 高台径	器底中央に浅溝1条。 高台「ハ」字状内縁部直さで 接地。	⑤⑥ 回転ヘラ切り・ 丸押し ⑦⑧ ヨコナデ ⑨⑩ ヨコナデ	⑪⑫ ヨコナデ・ 不定方向ナデ ⑬ ヨコナデ ⑭⑮ ヨコナデ	灰色 細砂粒含む		9
39	高台 杯	b	高台径 6.6	高台「ハ」字状。端部丸くお さめ、内縁接地のみ。	⑤ 回転ヘラ切り →丸押し ⑥⑦ ヨコナデ	⑧⑨ ヨコナデ	灰色(3灰) 細砂粒含む		9
40	高台 杯	b	口 径(10.0) 器 高(5.5) 高台径 7.1	口縁部中央に立ち上がり。 器底中央に凹線1条。 高台内縁に平直接地。	⑤⑥ 回転ヘラ切り・丸押し ⑦⑧ ヨコナデ ⑨⑩ ヨコナデ	⑪ ヨコナデ ⑫⑬ ヨコナデ	灰色(3灰) 細砂粒含む ○		9
41	高台 杯	b	口 径(12.7) 器 高 4.7	口縁部中央に立ち上がり。 器底丸くおさめる。 器底1/3部に凹線1条。	⑤⑥ 回転ヘラ切り・ 丸押し ⑦⑧ ヨコナデ	⑨⑩ ヨコナデ	灰色(3灰) 細砂粒含む ○		9
42	碗(?)		口 径(14.4) 器 高 4.8 底 径(8.0)	平底。ヘラ切り時の段がつく。 口縁中央より外反。	⑤⑥ 回転ヘラ切り・ 丸押し ⑦⑧ ヨコナデ	⑨⑩ ヨコナデ	灰白色 細砂粒含む ×		9
43	碗		口 径(12.6) 器 高 3.5 底 径(7.4)	底部より内縁直みに開き、 端部丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 細砂粒含む ×		9
44	碗		口 径 13.0 器 高 6.0 底 径 8.6	平底。口縁内湾直みに立ち、 器底に凹線1条。	回転ヘラ切り 不定方向ナデ	磨減不明	灰白色 細砂粒含む ×		9
45	長脚高杯		口 径(14.8) 杯部高 4.3	浅い碗形。 口縁斜形に器底丸くおさめる。	磨減不明	磨減不明	灰白色 細砂粒含む ×	46と同一個 体か?	10
46	長脚高杯		杯 高 4.1	長脚。	磨減不明	磨減不明	灰白色 細砂粒含む ×		10
47	高脚 高杯	b	口 径(12.8) 器 高 9.0 脚 高 8.9 底 径 8.5	杯口縁部内湾のち外反。 脚部水平に開き、 端部下方に器底、円状の段。	⑤⑥ 回転ヘラ切り ・ヨコナデ ⑦⑧ ヨコナデ	⑨⑩ ヨコナデ ⑪⑫ ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○	器底に磨減不 明	10
48	高脚 高杯	a	口 径(10.2) 杯部高 3.6	口縁部平開き。 中央に浅い凹線1条。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色(3灰) 細砂粒含む ○		10
49	高脚 高杯	b	杯底径 8.0	口縁斜形。	⑤⑥ 回転ヘラ切り →ヨコナデ	ヨコナデ	⑦⑧⑨⑩⑪⑫ 細砂粒を含む △		10
50	長脚高杯		器 高 6.0 杯 径 9.7	薄開き、淺部凹線状の盛り。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		10
51	長脚高杯		口 径(10.7) 器 高(20.0) 残 高 9.0	厚部凹線1条。 器底平直接地を呈す。	ヨコナデ	磨減不明	灰白色 細砂粒含む ×		10
52	長脚高杯(?)		口 径(18.0) 残 高 12.0	器底のぼんぼり形。 脚部斜形に開き。	⑤⑥ ヨコナデ ⑦⑧ヘラケズリ	ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ×		10
53	鉢		口 径(18.0) 器 径(18.0) 器 高 12.8	平底。真ついでに立ち上がる。 口縁外反、端部直く立ちあがり。	⑤ヘラケズリ ⑥ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄灰色 細砂粒含む ×		10
54	鉢		口 径(17.3) 器 径(18.0) 残 高 9.8	口縁部より内縁外反し、 端部立ち。	磨減不明	磨減不明	淡黄灰色 細砂粒含む ×		10

表4 灰原出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	部種	分類	法量(cm)	形 態	手 法		色澤・土質・備 考	図版番号
					外 面	内 面		
55	坏壺	a	口 径 11.6 天井高 2.6 つば高 1.5	胴より口縁にかけて段がつく。かえり口縁基部より下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ ③ヨコナデ	④ヨコナデ ⑤チチナデ ⑥ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	11
56	坏壺	a	口 径 10.6 天井高 2.4 つば高 1.4	天井部台形状。かえり口縁基部より下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ ③ヨコナデ	④ヨコナデ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	11
57	坏壺	a	口 径 11.0 天井高 2.8 つば高 1.2	天井部台形状。かえり口縁基部より下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ ③ヨコナデ	④ヨコナデ ⑤チチナデ ⑥ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	11
58	坏壺	a	口 径 11.2 天井高 不明 つば高 1.3	天井部台形状。かえり口縁基部より下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ ③ヨコナデ	④ヨコナデ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	11
59	坏壺	a	口 径 11.0 天井高 1.8 つば高 1.2	天井部扁平台形状。かえり口縁基部より若干下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ ③ヨコナデ	④ヨコナデ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	
60	坏壺	a	口 径 12.4 天井高 1.8 つば高 1.4	胴部がなだらかで扁平。かえり口縁基部より下方に伸び、内縁。口縁基部もらぎみ。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰色(白灰) 磁砂粒含む ○	複製片 11
61	坏壺	a	口 径 11.7 天井高 2.2 つば高 1.5	扁平で胴部はなだらか。かえり口縁基部とはほぼ同じ高さで内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④チチナデ ⑤ヨコナデ	灰色(白灰) 磁砂粒含む ○	11
62	坏壺	a	口 径(12.2) 天井高 2.5 つば高 欠損	天井部台形状。かえり口縁基部より下方に伸び、内縁。口縁基部に凹をもつ。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰色(白灰) 磁砂粒含む ○	
63	坏壺	c	口 径 12.3 天井高 1.7 つば高 1.1	天井部なだらかな弧状。口縁基部に面をもち、かえり口縁基部と同じ高さ。	①丁寧な回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰色(白灰) 磁砂粒含む ○	11
64	坏壺	a	口 径(12.8) 天井高 3.2 つば高 欠損	天井部斜辺長い台形状。かえり口縁基部とはほぼ同じ高さで内縁外反。	①丁寧な回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④チチナデ ⑤ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	11
65	坏壺	a	口 径(13.0) 天井高 2.4 つば高 1.4	天井部斜辺長い台形状。かえり口縁基部とはほぼ同じ高さで内縁外反。	①丁寧な回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	11
66	坏壺	a	口 径 14.2 天井高 2.9 つば高 1.6	天井部台形状。かえり口縁基部より若干下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④チチナデ ⑤ヨコナデ	灰色(白灰) 磁砂粒含む ○	11
67	坏壺	a	口 径 14.2 天井高 不明 つば高 1.4	瓶生時天井陥没し、かえり内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰色(白灰) 磁砂粒含む ○	別冊作 11
68	坏壺	b	口 径 16.0 天井高 1.6 つば高 1.1	口より口縁にかけて段がつく。かえり口縁基部より若干下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰白色 磁砂粒含む ×	12
69	坏壺	b	口 径 16.0 天井高 1.8 つば高 1.1	口より口縁にかけて段がつく。かえり口縁基部より若干下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	12
70	坏壺	b	口 径 16.3 天井高 1.5 つば高 1.1	扁平。かえり口縁基部より下方に伸び、内縁外反。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む ○	12
71	坏壺	b	口 径 9.8 天井高 不明 つば高 1.1	瓶生時に天井部陥没。口より口縁にかけて段。かえり内縁。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナデ	③ヨコナデ ④チチナデ ⑤ヨコナデ	灰色 磁砂粒含む △	

## 遺物観察表

## 灰原出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	分類	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・土・焼色	備 考	国産 番号
					外 面	内 面			
72	坏蓋	b	口 径 9.8 天井高 1.1 つば高 1.0	肩より口縁にかけて段がつく。 かえり口縁隆部より若干下 方に伸び、内傾。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ ㊨ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		12
73	坏蓋	b	口 径 10.3 天井高 1.1 つば高 1.0	扁平。 かえり口縁隆部より若干下 方に伸びる。内傾する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色 細砂粒多く含む △		12
74	坏蓋	b	口 径 10.1 天井高 不明 つば高 (1.1)	焼成時に天井部陥没する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		
75	坏蓋	b	口 径 10.3 天井高 不明 つば高 1.1	焼成時に天井部陥没する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色 細砂粒多く含む △		12
76	坏蓋	b	口 径 (9.1) 天井高 不明 つば高 1.1	焼成時に天井部陥没する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ →チチナデ ㊪ヨコナデ	灰褐色 細砂粒含む ○		
77	坏蓋	b	口 径 9.8 天井高 1.6 つば高 1.2	天井部稍り縮柄は伏しい。 かえり口縁隆部より若干平く、 内傾する。	㊦高板ヘラケズリ →ヨコナデ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰褐色 細砂粒含む ○		12
78	坏蓋	b	口 径 10.3 天井高 1.9 つば高 1.1	天井部扁平な台形状。 かえり口縁隆部とはほぼ同じ高 さで、内傾する。	㊦高板ヘラケズリ →ヨコナデ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		12
79	坏蓋	b	口 径 10.3 天井高 1.8 つば高 1.0	天井部扁平な台形状。 かえり口縁隆部より若干平く、 内傾する。	指がかり不明	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○	砂粒著多	
80	坏蓋	b	口 径 11.2 天井高 2.8 つば高 1.1	天井部扁平な台形状。 かえり口縁隆部と同じ高さで、 内傾やや外反。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色 細砂粒多く含む △		12
81	坏蓋	b	口 径 11.3 天井高 1.7 つば高 1.1	肩部ならからで扁平。 かえり口縁隆部と同じ高さで、 内傾する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○		12
82	坏蓋	b	口 径 11.0 天井高 1.8 つば高 1.3	肩部ならからで扁平。 かえり口縁隆部と同じ高さで、 内傾する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○		12
83	坏蓋	b	口 径 (11.4) 天井高 (3.2) つば高 1.3	天井部は扁平な台形状。 かえり内傾する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		
84	坏蓋	b	口 径 11.8 天井高 1.9 つば高 1.2	肩より口縁にかけて段がつく。 かえり口縁隆部とはほぼ同じ高 さで、内傾外反。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○		12
85	坏蓋	b	口 径 (12.3) 天井高 (2.0) つば高 1.2	肩部ならからで扁平。 かえり内傾外反する。	㊦高板ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	指がかり不明	灰色(白灰) 細砂粒多く含む ○		12
86	坏蓋	b	口 径 13.0 天井高 2.0 つば高 1.3	なだらかな肩より口縁にかけて 段がつく。かえり口縁隆部 より若干下向き内傾外反する。	㊦丁寧な高板 ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色 焼丸 ○		12
87	坏蓋	b	口 径 12.5 天井高 2.3 つば高 1.2	なだらかな肩より口縁にかけて段。 かえり内傾。	㊦丁寧な高板 ヘラケズリ ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	灰色(白灰) 細砂粒含む ○		12
88	灰高台 不詳	a	径 (9.8) 高 3.3 底 径 7.2	底部突出する。 上縁1/3位より外反し、 縁く突る。	㊦高板ヘラ切り→ 木脚盤 ㊧ヨコナデ	㊩ヨコナデ ㊪ヨコナデ	暗灰色 細砂粒含む ○		13

灰原出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	分類	量量(cm)	形 態	手 法		色調・土質・造	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
88	煎茶台 坏身	a	口径 10.0 器高 3.8 底径 7.3	底笠突出。 器高1/3より外反。口縁部 部肥厚し、丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ 若丁ナデ ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰褐色 細砂粒含む △		13
90	煎茶台 坏身	a	口径 11.1 器高 3.5 底径 7.7	平底。丸味もち立ち上がる。 口縁部肥厚、丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ 若丁ナデ ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		13
91	煎茶台 坏身	a	口径 10.2 器高 3.5 底径 6.9	平底。丸味もち立ち上がる。 口縁部外反し尖る。	⑤灰転へろ切り・ 若丁ナデ ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		13
92	煎茶台 坏身	a	口径(11.0) 器高 4.2 底径(7.6)	平底。腰部に低い段。 口縁外反し、細く伸びる。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		13
93	煎茶台 坏身	a	口径(11.1) 器高 4.0 底径(7.3)	平底。口縁1/3位より 外反し尖る。	⑤灰転へろ切り・ 若丁ナデ ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		13
94	煎茶台 坏身	a	口径 11.2 器高 4.5 底径 7.2	平底。 口縁やや外反尖る。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○	別添体1種 添着。	13
95	煎茶台 坏身	a	口径 11.4 器高 4.7 底径 8.0	平底。 口縁部丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥濃灰不明	厚減不明	深灰色 細砂粒多く含む ×		13
96	煎茶台 坏身	b	口径(11.0) 器高 3.8 底径(7.4)	平底。 口縁部に肥厚部、 縁部肥厚する。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	黄灰色 細砂粒含む △		13
97	煎茶台 坏身	b	口径(10.1) 器高 3.6 底径 7.4	平底。 口縁部肥厚し丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	黄灰色 細砂粒含む ○		13
98	煎茶台 坏身	b	口径(9.0) 器高 3.5 底径 6.5	平底で、へろ切り時、段がつく。 腰部に低い段。 口縁部肥厚し丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ 若丁ナデ ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		13
99	煎茶台 坏身	b	口径(11.6) 器高(4.5) 底径(8.0)	平底。 腰部に低い段1条。 口縁丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	黄灰色 細砂粒多く含む ○		14
100	煎茶台 坏身(注1)	b	口径 8.5 器高 3.7 底径 5.8	平底で、へろ切り時、段がつく。 口縁部十割は丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ ヨコナデ ⑥	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ×		14
101	煎茶台 坏身(注1)	b	口径 9.8 器高 3.9 底径 6.4	平底で、へろ切り時、段がつく。 口縁部十割は丸くおさめる。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ×		14
102	煎茶台 坏身	b	口径 9.8 器高 3.3 底径 6.8	平底で、へろ切り時、段がつく。 口縁部肥厚する。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒多く含む ○		14
103	煎茶台 坏身	b	口径 10.2 器高 3.1 底径 6.3	平底。 口縁部外反し、縁部肥厚。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	厚減不明	灰色 細砂粒含む △		14
104	煎茶台 坏身	b	口径 10.0 器高 3.2 底径 6.1	平底。 口縁1/3位より外反する。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		14
105	煎茶台 坏身	b	口径 10.0 器高 3.2 底径 6.7	口縁外反のみ。	⑤灰転へろ切り・ 木製型 ⑥ヨコナデ	⑧ヨコナデ ⑨ヨコナデ	黄灰色 細砂粒含む ○		14

## 遺物観察表

灰厚出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	分類	法量 (cm)	形 態	手 法		色調・土・焼成	備 考	国産 番号
					外 面	内 面			
106	黒高台 杯 身	b	口 径 10.0 器 高 3.3 底 径 6.7	口縁1/3位より外反し、 底部やや肥厚する。	④口縁へう切り→ 若干ナデ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		
107	黒高台 杯 身	b	口 径 11.0 器 高 3.9 底 径 7.3	底部若干突出する。 口縁向き筋彫り。	④口縁へう切り・ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ→ ナデナデ ⑥ヨコナデ	淡褐色 細砂粒含む ×		14
108	黒高台 杯 身	b	口 径 10.0 器 高 3.8 底 径 6.7	底部突出する。 口縁筋彫り厚し、若干外反。	④口縁へう切り・ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		14
109	黒高台 杯 身	b	口 径 10.2 器 高 3.8 底 径 6.9	口縁開く。	④口縁へう切り→ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		14
110	黒高台 杯 身	b	口 径 10.5 器 高 3.7 底 径 6.7	底部若干突出する。 口縁1/3位より外反。	④口縁へう切り→ 若干ナデ ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		14
111	黒高台 杯 身	b	口 径 10.2 器 高 3.9 底 径 6.9	口縁開き、底部肥厚する。	④口縁へう切り→ 若干ナデ ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		14
112	赤高台 杯 身	a	口 径 13.7 器 高 5.4 高台径 8.1	口縁外反し開く。 中に凹縁1条。 高台「ハ」字に開き内縁筋地。	④ヨコナデ ⑤高台付→ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥高台付	灰色 薄砂粒含む ○		15
113	赤高台 杯 身	b	口 径 (11.7) 器 高 5.3 高台径 9.3	口縁若干開きやや肥厚する。 底部1/4位に凹縁。 高台「ハ」字に開き内縁筋地。	④ヨコナデ ⑤高台付→ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥高台付	灰色 細砂粒含む ○		15
114	赤高台 杯 身	b	口 径 (11.3) 器 高 5.3 高台径 8.1	口縁若干開き薄縁九くおさめる。 底部1/3位に凹縁。 高台「ハ」字に開き内縁筋地。	④ヨコナデ ⑤高台付→ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥高台付	灰色 細砂粒含む ○		15
115	赤高台 杯 身	b	口 径 (11.3) 器 高 5.0 高台径 7.0	口縁筋彫り。 底部1/3位に凹縁1条。 高台開く内縁筋地。	④口縁へう切り→ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	褐色 細砂粒含む ○		15
116	赤高台 杯 身	b	口 径 (10.5) 器 高 3.9 高台径 7.0	口縁開くおさめる。 底部1/3位に凹縁1条。 高台開く底部開くおさめる。	④口縁へう切り→ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ・ ヨコ方向のナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む △		15
117	赤高台 杯 身	b	口 径 11.8 器 高 4.8 高台径 7.3	底部1/3位に凹縁1条。 高台開く筋彫りおさめる。	④口縁へう切り→ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ→ ヨコ方向のナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○		15
118	赤高台 杯 身	b	口 径 (10.1) 器 高 4.3 高台径 7.3	底部1/3位に浅い凹縁1条。 高台開く筋彫りおさめる。	④口縁へう切り→ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ→ ヨコ方向のナデ ⑥ヨコナデ	灰色 細砂粒含む ○	砂粒筋地	
119	埴		口 径 (14.5) 器 高 6.3 底 径 8.6	平底で、口縁開く。 底部中に凹縁1条。	④口縁へう切り ⑤厚減不明	厚減不明	黄褐色 砂粒多く含む ×		15
120	埴		口 径 (14.5) 器 高 6.5 底 径 7.6	平底、内高ぶみに立ち上がる。 口縁筋地若干外反し突出。 底部中に凹縁1条。	④口縁へう切り→ 未調整 ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ→ ヨコ方向のナデ ⑥ヨコナデ	淡灰色 細砂粒多く含む △		15
121	埴		口 径 14.3 器 高 6.5 底 径 8.4	口縁部内面に浅い凹縁1条。 底部中に筋地1条。	④口縁へう切り→ 若干ナデ ⑤ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ	淡褐色 細砂粒含む ×		15
122	埴		口 径 (15.4) 器 高 7.2 底 径 9.2	平底。 口縁部突出し、薄縁開く。	厚減不明	厚減不明	黄灰色 細砂粒含む ×		15

駐場絶ヶ横遺址

灰産出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	分節	法量 (cm)	形 態	手 法		色調・土質・焼成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
123	埴(?)		口 径(18.0) 残 高 7.0	口縁内湾しながら廣く、 端部外反し、丸くおさめる。	ヨコナゲ	摩滅不明	黄褐色 細砂粒含む ○		15
124	埴(?)		口 径(13.0) 残 高 5.0	体部に凹線1条。 口縁端部外反し、丸くおさめる。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		15
125	長脚高杯		口 径 14.8 脚 高 12.0 残 高 7.1 底 径 10.4	杯口縁端部外方に伸び丸くおさめる。瓶内湾きみに伸び、 凹状の段。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	淡黄色 細砂粒多(含む) ○		16
126	長脚高杯		口 径(15.0) 脚 高 12.0 残 高 7.4 底 径 10.7	杯口縁端内湾きみ丸くおさめる。 瓶水平に伸び、端部凹状の段。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	淡黄色 細砂粒多(含む) ○		16
127	長脚高杯		口 径(14.7) 外部高 (4.5)	杯口縁端斜く引き出し、 丸くおさめる。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	淡黄色 細砂粒多(含む) ○		16
128	短脚 高杯	a	口 径 (9.3) 脚 高 6.2 残 高 2.7 底 径 6.4	杯口縁高肥厚する。 横溝き溝底斜く低下。 凹状の段。	⑫⑬ヘラウズリ ⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	⑯ヨコナゲ ⑰ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		17
129	短脚 高杯	a	脚 高 3.2 底 径 7.4	脚中位で段がつく。 瓶水平に伸び、端部下方へ屈曲。 凹状の段。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	灰色 粗粒含む △		17
130	短脚 高杯	a	口 径 (9.4) 脚 高 6.5 残 高 3.2 底 径 6.7	杯底部との間に凹線1条。 瓶内湾型凹し縁地。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭⑮ヨコナゲ ヨコ方面のナゲ ⑰ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		17
131	短脚 高杯	(?)	脚 高 3.5 底 径 7.4	瓶水平に伸び、内湾短く重下。 三角に尖る。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む △		17
132	短脚 高杯	(?)	残 高 1.8 底 径 7.6	瓶内湾きみに開き、 横溝型高肥厚する。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		17
133	短脚 高杯	(?)	脚 高 4.0 底 径 7.3	瓶水平に伸び 内湾形厚し縁地。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	暗灰色 細砂粒含む ○		17
134	長脚高杯(?)		残 高 5.0 底 径 9.3	瓶水平に伸び 端部肥厚沈線1条。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		
135	短脚 高杯	a	脚 高 5.0 底 径 6.9	杯部1/3位に浅い凹線。 横溝下方へ屈曲凹状の段。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		
136	短脚 高杯	(?)	脚 高 4.8 底 径 6.7	瓶端短く重下し尖る。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		17
137	短脚 高杯	a	口 径 (9.6) 脚 高 8.3 残 高 4.8 底 径 7.3	杯部1/3位に凹線1条。 瓶端下方へ屈曲凹状の段。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		17
138	短脚 高杯	a	口 径 (12.3) 脚 高 6.8 残 高 3.5 底 径 7.7	杯部1/3位に凹線1条。 瓶水平に伸び下方へ屈曲。 凹状の段。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む △		17
139	短脚 高杯	b	口 径 (13.0)	杯口縁外反する。	⑫ヨコナゲ ⑬ヨコナゲ	⑭ヨコナゲ ⑮ヨコナゲ	灰色 細砂粒含む ○		

遺物観察表

灰原出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	分類	量量 (cm)	形 態	手 法		色調・土・焼成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
140	短頸 高杯	b	口径(12.6) 器高 6.8 器底 3.5 底径 7.7	環口縁直線。能水平に伸び端下方へ屈曲。凹状の段。	摩滅不明	摩滅不明	灰白色 細砂粒含む		16
141	短頸 高杯	b	口径(12.4) 器高 7.2 器底 4.0 底径 8.2	環口縁直線。能水平に伸び端下方へ屈曲。凹状の段。	㊶ヨコナテ ㊷ヨコナテ	㊶ヨコナテ ㊷ヨコナテ	灰白色 細砂粒含む		16
142	短頸 高杯	b	器高 3.3 底径 7.3	環口縁直線。能水平に伸び端下方へ屈曲。凹状の段。	㊶器口縁ヘラ切り ㊷ヨコナテ ㊸ヨコナテ	㊶ヨコナテ ㊷ヨコナテ	灰白色 細砂粒含む		16
143	短頸 高杯	b	口径(11.0) 器底(3.0)	環口縁直線。能水平に伸び端下方へ屈曲。凹状の段。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 細砂粒多(含む)		16
144	鉢		口径(15.7) 器高 12.4 胴径(16.7)	胴下半部。最大胴部に段がつく。胴上半内腹外反。	摩滅不明 ㊶ナズリ(?)	摩滅不明	淡黄灰色 細砂粒多(含む)		18
145	鉢		口径(16.5) 器高 13.8 胴径 18.0	最大胴部に凹線1条。口縁直線。内面直線。	摩滅不明	摩滅不明	淡黄灰色 細砂粒多(含む)		18
146	鉢		口径(17.0) 器高 11.0 胴径(18.0)	最大胴部に凹線状の段。胴上半内腹口縁直線。	摩滅不明	摩滅不明	淡黄灰色 内面直線(含む)		18
147	鉢		口径(18.0) 器高 9.0	胴部に出線1条。口縁外反する。	摩滅不明	摩滅不明	淡黄灰色 細砂粒多(含む)		18
148	鉢		口径(18.2) 器高(12.0) 胴径(19.5)	胴上半部内腹直線。体部不明腹面凹線。	㊶ヘラナズリ ㊷ヨコナテ	㊶ナテ ㊷ヨコナテ	灰色 細砂粒含む		18
149	鉢		口径 15.1 器高 9.7 胴径 14.3	胴下半 塊状。胴上半 直線に伸び口縁直線(外反する)。	摩滅不明	摩滅不明	淡黄灰色 細砂粒多(含む)		18
150	鉢		口径(15.7) 器高 12.4 胴径(16.7)	胴上半 新十内腹直線に上方へ伸びる。	摩滅不明	摩滅不明	淡黄灰色 細砂粒多(含む)		18
151	短頸 高杯		口径(13.8) 器高 12.8 底径(11.7)	底部直線。体部外上方に若干傾く。浅い凹線1条。	㊶不定方向ナズリ ㊷ヨコナテ	㊶ナテ ㊷ヨコナテ	灰色 細砂粒含む		18
152	長頸 高杯		口径(7.6) 器高 11.5	口縁外反。端部直線。能水平に伸び端下方へ屈曲。凹状の段。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 細砂粒含む		19
153	長頸 高杯		口径(8.0) 器高 10.0	口縁直線。能水平に伸び端下方へ屈曲。凹状の段。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 細砂粒含む		19
154	長頸 高杯		口径(16.5) 器高 11.5 底径(10.2)	器底に凹線を列直文。凹線1条。高台「ノ」字に開く。	㊶ヨコナテ(?) 新ナズリ ㊷ヨコナテ	㊶ヨコナテ ㊷ヨコナテ	灰色 細砂粒含む		19
155	長頸 高杯		口径(16.0) 器高 7.5	器底下方に若干直線。側面直線。凹線1条直線。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰白色 塊状		
156	長頸 高杯		口径(14.5) 器高 6.0	側面直線。凹線1条直線。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 細砂粒含む		

灰原出土土物観察表 土製品

(7)

番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・土質・地質	備 考	図版番号
				外 面	内 面			
157	灰原盤	口径(15.0) 底径 12.2 高さ (8.5)	肩部斜形稜文。 凹縁1条通る。 底付「ハ」字溝内縁直曲。	(1) ① ココナテ (2) ① 格子状クナキ →カキ目 (3) ① ココナテ	ココナテ	灰色 細砂粒含む ○		19
158	皿	底径 9.2	高台「ハ」字溝(内縁直曲)。	(1) ① 肩稜ヘラクスリ (2) ① ココナテ	(3) ① ココナテ (4) ① ココナテ	灰色 細砂粒含む ○		19
159	皿	底径 10.3	高台内溝ぞみに開く。 内縁1条通る。 内縁直曲。	(1) ① 肩稜ヘラクスリ (2) ① ココナテ	(3) ① ココナテ (4) ① ココナテ	灰褐色 焼痕 ○		19
160	高盤	口径 3.0 底径(10.2)	ハ字に開く。 新内縁直厚し接合する。	ココナテ	(1) ① 不定方向のナテ (2) ① ココナテ	灰色 細砂粒含む ○		19
161	高盤	口径(11.2) 口径 6.4 底径 2.8 底径 11.0	環に溝内溝縁直曲りきみ。 1/2段に低い段。 肩部「ハ」字に開き内縁直。	(1) ① ヘラクスリ (2) ① ココナテ (3) ① ココナテ	(4) ① 不定方向のナテ (5) ① ココナテ	灰色 細砂粒含む ○		19
162	高盤	口径(20.6)	口縁直厚し外反。	摩滅不明	摩滅不明	淡黄褐色 細砂粒含む ×		19
163	内付器(?)	口径(16.0) 底径 (3.7)	「ハ」字に開く。1/2段縁がつく。溝縁内縁に屈曲させ見くおさめる。	ココナテ	ココナテ	灰白色 細砂粒多量含む ×		19
164	皿(?)	口径 4.8 底径 (9.0)	高台「ハ」字に開く。 平縁直曲。	(1) ① カキ目 (2) ① ココナテ	ココナテ	灰色(内面) 細砂粒含む ○		19
165	平盤	口径 7.4 口径 16.0 底径 16.2	環状形。 口縁内溝ぞみに開き内縁1条。 天弁部広縁で直曲。	(1) ① ココナテ (2) ① ココナテ (3) ① ヘラクスリ	(4) ① ココナテ (5) ① ココナテ	灰色(内面) 細砂粒 ○		20
166	鉢(?)	口径 7.5	平底。 肩縁段がつく。	摩滅不明	摩滅不明	淡黄褐色 細砂粒含む ×		20
167	皿	口径(10.0)	口径より大きく外反。 斜交斜縁文2段凹縁をほきみもう1段直らす。	ココナテ	ココナテ	灰色 細砂粒含む ○		20
168	皿(?)	口径(12.1) 口径 2.2 底径 10.8	平底。 口縁直厚し外反。	(1) ① 肩稜ヘラ切り →平調整 (2) ① ココナテ	ココナテ	灰色 細砂粒含む ○		20
169	把手	径 2.4	丸い三角状。	手づくね		灰色 細砂粒含む ○		20
170	把手	径 1.4	平縁な三角状。	手づくね		灰色 細砂粒含む ○		20
171	把手	径 1.4	平縁な三角状。	手づくね		灰色 細砂粒含む ○		20
172	鉢	口径(12.6)	口径1/2位より内溝する。 隆起丸くおさめる。	(1) ① 摩滅不明 (2) ① カキ目	(3) ① 摩滅不明 (4) ① 凹縁内縁クナキ	淡黄褐色 細砂粒含む ×		21
173	鉢	口径 19.5	傾斜口形で直曲。	(1) ① 斜行クナキ・カキ目 (2) ① カキ目	(3) ① 傾斜内縁クナキ ココナテ	淡黄色 細砂粒含む ×	173と同 器体と異わ れる。	21

遺物観察表

灰原出土遺物観察表 土製品

(8)

番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・土質・焼成	備 考	図版番号
				外 面	内 面			
174	甕	口 径(12.4)	口縁外反し縁部平直。	①ココナア ②平行タタキ・カキ目	①ココナア ②同心円文タタキ	灰色 砂粒含む △		21
175	甕	口 径(18.0)	口縁外反し口縁1条高直。 裾部細く尖りきん。	①摩滅不明 ②平行タタキ・カキ目	①摩滅不明 ②同心円文タタキ	淡黄褐色 砂粒含む ×		21
176	甕	口 径(22.0)	口縁筒より縁1条高直。	①摩滅不明 ②平行タタキ・カキ目	①摩滅不明 ②同心円文タタキ	淡黄褐色 砂粒含む ×		21
177	甕	口 径(21.3) 胴 径(28.4)	口縁細く内縁外反。 口縁の幅がみられる。	①ココナア ②平行タタキ・カキ目	①ココナア ②同心円文タタキ	①赤褐色 砂粒含む ×		21
178	甕	口 径(19.0) 胴 径(29.6)	口縁外反のら上方へ屈曲させ 薄部平直。	①摩滅不明 ②平行タタキ・カキ目	①摩滅不明 ②同心円文タタキ	灰黄色 砂粒含む ×		21
179	甕	口 径(22.2)	口縁粗厚。中央より内湾。 裾部丸くおさめらる。	①ココナア ②平行タタキ・カキ目	①ココナア ②同心円文タタキ	淡褐色 砂粒含む ×		20
180	甕	口 径(30.0)	口縁上へきみに背び 沈みし高直。 口縁より内湾丸くおさめらる。	①ココナア ②平行タタキ・カキ目	①ココナア ②同心円文タタキ	灰白色 砂粒含む ×		20

表5 土坑SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・土質・焼成	備 考	図版番号
				外 面	内 面			
181	甕	口 径 33.0	口縁内湾しながら外方に開く。 外面淡灰文→内面文	②平行タタキ・カキ目	②同心円文タタキ			22

表6 駐場館ヶ懐2号窟採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	器部	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・土質・焼成	備 考	図版番号
					外 面	内 面			
182	杯	口縁	口 径(16.0) 口 径高(1.5)	天井部全周から底平。 口縁部下方に強く屈曲。 尖部丸くおさめらる。	②斜転ヘラタタキ ③ココナア	②不定方向のナア ③ココナア	灰色 細粒多(含む) ○		
183	杯	口縁	口 径(15.0)	天井部全周から底平。 口縁部下方に強く屈曲。 尖部丸くおさめらる。	ココナア	ココナア	①赤褐色 細粒多(含む) ○		
184	杯	口縁	口 径(13.0)	口縁部下方に強く屈曲。 尖部丸くおさめらる。	ココナア	ココナア	灰色 細粒多(含む) ○		
185	乳鉢	底	口 径(15.0) 口 径高(3.0) 口 径径(10.0)	平底。 口縁外方に開く。 口縁部平直におさめらる。	②斜転ヘラタタキ ③ココナア	ココナア	灰色 細粒多(含む) △		
186	乳鉢	底	口 径(16.0) 口 径高(3.3) 口 径径(11.5)	平底。 口縁外方に開く。 口縁部内方に強く屈曲。	②斜転ヘラタタキ ③ココナア	ココナア	淡灰色 細粒多(含む) ○		

駄場跡ヶ懐 2号窯採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	器部	法量(m)	形 態	手 法		色澤・土・焼成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
187	右高台 杯 身	底部	径 高 2.0 残 部 (13.0)	平底。 底部より外方に立ちあがる。	②底部へラ切り未 ③ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む ○		
188	右高台 平 身	高台	高台径(11.4)	高台低く 内縁が曲曲する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む △		
189	右高台 杯(口)	高台	高台径(13.6)	「ハ」字に開く。 内縁変換。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 磨粒多(多)含む ×		
190	盃蓋	つまみ	つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	底部より外方に立ちあがる。 上面平坦。	ヨコナデ(?)		灰色 磨粒多(多)含む ○		
191	杯 身	口縁	口縁につき 不明	口縁外方に開く。 口縁縁部丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む ○		
192	杯 身	口縁	口縁につき 不明	口縁やや外方に開く。 口縁縁部平坦におさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む ○		
193	杯蓋	口縁	口縁につき 不明	口縁縁部下方に厚白。 実る。	②口縁へラケズリ ③ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む ○		
194	杯 身	口縁	口縁につき 不明	口縁外方に開く。 口縁縁部内面にやや厚白。 実る。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む ○		
195	盃	底部	底部につき 不明	平底。 底部外方に立ちあがる。	②未調査 ③へラケズリ	底不定方向のナデ	灰色 土中の残滓含む ○		
196	杯 身	口縁	口縁につき 不明	口縁外方に開く。 口縁縁部平坦におさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む ○		
197	右高台 杯 身	底部	高台径(10.0)	高台低く「ハ」字に開く。 内縁部は丸くおさめる。	底縁不明	ヨコナデ	灰灰色 磨粒多(多)含む △		
198	右高台 平 身	底部	高台径(12.0)	高台低く「ハ」字に開く。 内縁部は若干変換。	③へラケズリ	ヨコナデ	淡灰色 磨粒多(多)含む △		
199	右高台 杯 身	底部	高台径(13.0)	高台低く 底部より立ち出した外方に開く。	②底部へラ切り未 ③ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む △		
200	右高台 杯 身	底部	高台径(11.0) 残 高 2.0	高台低く「ハ」字に開く。	②底部へラ切り未 ③ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰色 磨粒多(多)含む △		
201	盃(?)	高台	高台径(14.2)	「ハ」字に開く。 縁部上下方向につまみ出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 磨粒多(多)含む ○		
202	盃	口縁	口 径(126.0)	外方に開く。 口縁内縁を急曲させる。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰色 磨粒多(多)含む ○		
203	盃	口縁	口縁につき 不明	口縁外方なし 口縁をつまみ出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰色 磨粒多(多)含む ○		

遺物観察表

表7 恵社谷1号窯採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	器部	法量(cm)	形 態	手 法		色澤・胎土・底成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
204	坏壺		口 径 12.5 天弁部 1.6 つら高 0.6	大弁部は現代。 口縁は底く下方に屈曲する。 深部は若干丸味有り。	①回転ヘラ切り ・ヨコナダ ②ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		25
205	坏壺		口 径(11.5) 天弁部(1.3) つら高 0.5	口縁は長めに下方に屈曲する。 深部丸味。	①回転ヘラ切り ②ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		25
206	坏壺	天弁部	つら高 1.0 つら高 2.0	つまみ上岡山形。	輪が少かり不明	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		25
207	坏壺	つら高	つら高 3.3 つら高 0.5	つまみ上曲線む。		ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○	
208	坏壺	口縁	口 径(19.0)	大弁部は折れ曲む。 口縁部は下方に屈曲。 若干丸味有り。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナダ	①ナダ ②ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		
209	坏壺	天弁部	つら高 0.9 つら高 3.1	つまみは基部より上方へ若干 立ち上がり外方に開く。 上縁は直む。	①回転ヘラ切り ②ヨコナダ	①ナダ	灰色 糠粒多(△) ○		
210	坏壺	口縁	口 径(21.2)	天弁部は直む。 口縁部は下方に屈曲し 突る。	①回転ヘラケズリ ②ヨコナダ	ヨコナダ 不定方式のナダ	灰色 糠粒多(△) ○		
211	坏壺 白 土	底 径	底 径 10.1	平底。	①回転ヘラ切り	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) △		
212	坏壺 土	口 径 底 径 底 径	口 径(15.0) 底 径(3.2) 底 径(11.4)	平底。 口縁外方に直く。 深部は丸くおさめる。	①回転ヘラ切り ②ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		25
213	坏壺 土	口縁	口 径(16.0) 底 径 2.5	口縁は外反する。 深部はつまみ出され屈曲する。		ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○	
214	坏壺 土	口 径 底 径 高台径	口 径(14.9) 底 径(4.3) 高台径(10.0)	口縁は外方に開く。 高台は内側よりにつき内縁を つまみ出し屈曲させる。	①回転ヘラ切り ②ヨコナダ ③ヨコナダ	①ナダ ②ヨコナダ ③ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		25
215	坏壺 土	口 径 底 径 高台径	口 径(15.8) 底 径(3.1) 高台径(11.4)	口縁は内湾するに外方へ開く。 深部はやや膨らむ。高台は 外側よりにつき。深部つまむ。	①回転ヘラ切り ②ヨコナダ ③ヨコナダ	①ナダ ②ヨコナダ ③ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		25
216	坏壺 土	底 径 高台径	底 径 2.6 高台径(11.1)	口縁は外方に立ち上がる。 高台は外側よりにつき。 穴部をつまみ出し屈曲させる。	①回転ヘラ切り ②ヨコナダ ③ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○		25
217	坏(?)	口縁	口 径(14.3) 底 径 3.5	口縁は内湾するに外方に開く。 深部は丸くおさめる。	①ケズリ ②ヨコナダ	ヨコナダ	明灰色 糠粒多(△) ○		25
218	坏(?)	底 径	底 径(10.5)	口縁は深部より天つすくに 立ち上がる。	①ヨコナダ ②平打タタキ	②ヨコナダ ③同心打タタキ	灰色 糠粒多(△) ○		
219	坏(?)	底 径 底 径	底 径(17.1) 底 径 2.7	口縁はゆるやかに開く。 深部は下方に屈曲し突る。		ヨコナダ	ヨコナダ	灰色 糠粒多(△) ○	
220	坏(?)	高台径 底 径	高台径(16.0) 底 径 2.0	高台は平字に開く。 内縁部屈曲し縁縁。		ヨコナダ	不明 不明	灰白色 糠粒多(△) ×	

悪社谷 1 号窯採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	器部	法量 (cm)	形 態	手 法		色調・土・焼成	備 考	図版番号
					外 面	内 面			
221	鉢	口縁	口 径 (25.2) 残 高 8.1	口縁にかけて内湾する。 頸部を予想におさめる。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研を含む △		
222	瓶	底 部	底 径 (15.5) 残 高 6.5	底面より外方に立ち上がる。 環状の穿孔。	平行タタキ →ナテ	ナテ	灰白色 砂粒を含む ×		
223	甕	口縁	口 径 (24.0) 残 高 3.7	口縁は外方に大きく厚く。 頸部を若干つまみ出す。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研多量を含む ○		25
224	甕	口縁	口 径 (47.4) 残 高 5.0	口縁は大きく外方に厚く。 底面周囲はコ字状を呈し、外面 に下垂する突起がつく。	ヨコナテ	ヨコナテ	暗灰色 砂粒を含む ○		25
225	甕	口縁	口 径 (29.0) 残 高 3.2	口縁は外方に厚く。 頸部はつまみ出される。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研多量を含む ○		
226	甕	口縁	不明	口縁は外方に厚く。 頸部はつまみ出され、外 面に下垂する突起がつく。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研多量を含む ○		
227	甕	口縁	口 径 31.4 残 高 5.3	口縁は際立ぎみに立ち上がる。 頸部を予想におさめる。	①ヨコナテ ⑥平行タタキ	ヨコナテ	灰色 磨研多量を含む ○		26

表 8 悪社谷 2 号窯採集遺物観察表 土製品

番号	器種	器部	法量 (cm)	形 態	手 法		色調・土・焼成	備 考	図版番号
					外 面	内 面			
228	年 苎	口縁	口 径 (20.0) 残 高 1.5	口縁は「ハ」字に厚く。 頸部は下方に広く屈曲し、 丸くおさめる。	⑤ヘラケズリ ⑥ヨコナテ	ヨコナテ	暗灰色 磨研を含む △		
229	不 変	口縁	口 径 (20.0) 残 高 2.0	口縁は内湾ぎみに厚く。 頸部は広く下方に屈曲し、 丸くおさめる。	⑤⑥ヘラケズリ ⑥ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研多量を含む △		
230	年高台 年身	底 部	高台径 (8.0)	高台は低い。内縁部が短く 鋭がつく。	⑤ 筒形ヘラ切り ⑥ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研多量を含む ○		
231	年高台 年身	底 部	底 径 (11.0)	底面は若干すりむ。 平肉。	⑤⑥ヘラ切り ⑥ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研を含む ○		
232	不 身	口縁	口 径 (14.0) 残 高 3.0	口縁は外方に厚く。 頸部は若干肥厚したのち実る。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研を含む ○		
233	年 身	口縁	口 径 (14.4) 残 高 2.3	口縁は外方に厚く。 頸部は若干肥厚したのち実る。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨研を含む ○		

遺物観察表

表9 茨谷1号窯採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	器部	流量(cm)	形 態	手 法		色調・土・地成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
234	茶	体部	径 0.9	全体部破片	格子状タタキ	同心円タタキ	灰色 磨粒多(含む) ○		
235	茶	体部	径 0.8	全体部破片	格子状タタキ →カキ目	同心円タタキ	暗灰色 磨粒多(含む) ○		
236	茶	体部	厚 0.5	全体部破片	格子状タタキ →カキ目	同心円タタキ	灰色 磨粒多(含む) ○		
237	茶	口縁	口 径(17.8) 残 高 4.3	口縁は直立ぎみに立ち 内縁はつまみ出し屈曲させる。 外縁は平瀬状の境がつく。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		24
238	茶	口縁	口 径(20.0) 残 高 4.0	口縁は直立ぎみに立ち 内縁はつまみ出し屈曲させる。 外縁は断面方形に地味。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		24
239	茶	口縁	口 径(20.4) 残 高 3.7	口縁は外反する。 内縁はつまみ出し屈曲させる。 外縁は断面方形につくり出す。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		24
240	茶	口縁	口 径(20.0) 残 高 9.0	口縁は外方に開く。 内縁は内側につまみ出しされる。 磨粒多(含む)に気泡により区画される。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		24
241	茶	口縁	口 径(10.0)	天井部との境で歪む。 口縁は丸くおさめる。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色(赤灰) 磨粒多(含む) ○		
242	茶	口縁	口 径(12.0) 残 高 3.3	天井部との境に境がつく。 口縁は丸くおさめる。	②回転ヘラタズリ ③ヨコナテ	ヨコナテ	暗灰色 磨粒多(含む) ○		24
243	茶	口縁	口 径(13.4)	口縁は丸くおさめる。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		
244	茶	口縁	口 径(13.5)	口縁は歪みし内縁は やや尖りき。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		
245	茶	口縁	口 径(12.6) 受部径(13.9)	受部が細く かえりに直立する。	ヨコナテ	ヨコナテ	黄灰色 磨粒多(含む) ○		
246	茶	口縁	口 径(11.6) 受部径(13.6) 残 高 3.3	受部縁に上方に屈曲する。 かえりは細く尖り内縁。	ヨコナテ	ヨコナテ	黄灰色 磨粒多(含む) ○		24
247	茶	口縁	口 径(11.8) 受部径(14.0) 残 高 3.8	受部縁は上方に屈曲。 かえりは細く尖り内縁。	④回転ヘラタズリ ⑤ヨコナテ	ヨコナテ	⑥磨粒多(含む) ○		24
248	茶	口縁	残 高 1.2	やや歪平。	⑦回転ヘラタズリ ⑧ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		
249	茶	口縁	残 高 1.5	口縁立ち上がり境がつく。	ヨコナテ	ヨコナテ	暗灰色 磨粒多(含む) ○		
250	茶	口縁	口 径(10.0) 残 高 2.8	口縁は外方に開き 内縁は丸くおさめる。 中位あたりに境をつける。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 磨粒多(含む) ○		

茨谷1号窯採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	器部	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・加工・成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
251	高杯	口縁	口 径(13.6) 残 高 2.9	口縁は外方に開き 溝部は大きくおさめる。 中位あたりに溝をつける。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰褐色 凝砂粒を含む ○		
252	高杯	胴部	残 高 9.0	基部より中位にかけて細くし まる。凹溝を2条施す。 腹は緩やかに開く。	ヨコナテ	ヨコナテ しぼり痕	灰褐色 粘土 ○		24
253	高杯	胴部	残 高 8.0	基部より中位にかけて細くし まる。凹溝を2条施す。 腹は緩やかに開く。	ヨコナテ	ヨコナテ しぼり痕	灰色 凝砂粒を含む ○	ヘラ記号	21
254	高杯	底部	底 径(9.0) 残 高 2.0	胴部境やかに開く。 底部は下方につまみ出され 原曲する。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 凝砂粒多量含む ○		
255	高杯	胴部	底 径(8.2) 残 高 2.6	胴部は中位より水平方向に開く。 1/3は欠けて口状に段がつく。 凹部は上、下方向につまみ出す。	ヨコナテ	ヨコナテ しぼり痕	灰褐色 凝砂粒多量含む ○		24
256	高杯	胴部	底 径(10.0) 残 高 2.4	胴部は緩やかに広がる。 凹部が下方に突出する。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰褐色 凝砂粒多量含む △		
257	高杯	底部	底 径(10.4) 残 高 2.5	底部は緩やかに広がる。 凹部は下方につまみ出され 原曲する。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 凝砂粒多量含む ○		
258	高杯	底部	底 径(11.0) 残 高 1.8	基部部で水平に原曲させ 口状の溝をつける。	ヨコナテ	ヨコナテ	濃灰色 凝砂粒を含む ○		
259	不明	口縁	口 径(12.0)	外側とみの口縁は薄形 あたりで真上に薄び出る。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 凝砂粒を含む ○		
260	蓋	作部	蓋内径(8.5) 蓋外径(10.5)	蓋部から上方に向い 内側とみにゆるむ。	①ヨコナテ ②ヨコナテ(ヘラナズ)	③ヨコナテ ④ヨコナテ(非定方向のナテ)	灰色 凝砂粒多量含む ○		
261	皿	底部	残 高 2.3	丸底。	⑤凹縁ヘラナズリ ⑥ヨコナテ	ヨコナテ	灰色(真灰?) 凝砂粒多量含む ○		
262	甌	口縁	口 径(10.0) 残 高 12.5	頸部より内側とみにゆるむ。 口縁の溝をつまみ出し原曲させる。 頸部には凹溝状の段がつく。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰褐色 凝砂粒を含む ○	ヘラ記号	24
263	甌	胴部	残 高(14.9)	扁球形を呈す。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 凝砂粒多量含む ○		
264	甌	胴部	残 高(18.7)	扁球形を呈す。 口縁に凹溝を2条施す。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰褐色 凝砂粒多量含む ○		24
265	甌(?)	口縁	口 径(18.0) 残 高 4.0	口縁は外方に開き溝部は 内側とみにゆるむに呈す。 流状文と凝砂粒を施す。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰色 凝砂粒多量含む ○		21
266	杯蓋	口縁	口 径(17.2)	高杯の形自體の。	⑦ヨコナテ	⑧ヨコナテ	灰褐色 凝砂粒多量含む ○		
267	杯蓋	口縁	口 径(20.0)	基部下方に凹曲するが 尖味を帯びる。	⑨凹縁ヘラ切り? ⑩ヨコナテ	⑪ヨコナテ	灰色 凝砂粒多量含む ○		

遺物観察表

表10 枝桑下池3号窯採集遺物観察表 土製品

番号	器種	器部	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・胎土・構成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
268	杯蓋	口縁	口 径 (19.0)	唇部の両面滑い。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ	③ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
269	杯蓋	口縁	口 径 (19.8)	輪部の唇面滑いが 突る。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ	③ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
270	杯身	底 部	底 径 (9.0)	平底。やや丸味を帯びる。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ	③ヨコナダ	灰白 顔料粒を含有 ○		

表11 枝桑下池4号窯採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	器部	法量 (cm)	形 態	手 法		色澤・胎土・構成	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
271	杯蓋	つまみ 欠	口 径 (9.4) 器 高 1.2	天舟なだらか。口縁薄 延く短曲。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
272	杯蓋	つまみ 欠	口 径 (12.3) 器 高 1.8	天舟なだらか。口縁薄 か平状に短曲。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ ③ヨコナダ	ヨコナダ ④ナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
273	杯蓋	口縁	口 径 (13.9) 器 高 1.7	口縁「ハ」字に滑く、輪部 短く短曲。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
274	杯蓋	口縁	口 径 (19.3)	天舟なだらか。口縁薄 丸く短曲。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ ③ヨコナダ	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
275	杯身	口 径 (12.9) 器 高 3.3 底 径 (9.3)	平底。口縁口縁肥厚 器ノに比較1条。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ	③ナダ ④ヨコナダ		灰白色 顔料粒を含有 ○		
276	皿	口 径 (14.5) 器 高 1.9 底 径 (11.6)	平底。口縁縁外反し、 沈線1条。	①紅胎ヘラ切り ②ヨコナダ	③ナダ ④ヨコナダ		灰白色 顔料粒を含有 ×	穴が突き	
277	杯身	底 部	底 径 (8.0)	平底。	紅胎ヘラ切り	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 △		
278	杯蓋	底 部	底 径 (10.0)	平底。	①ヨコナダ ②紅胎ヘラ切り ③ナダ	④ヨコナダ ⑤ナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
279	不明	口縁	口 径 (12.0)	口縁内縁ヨコナダによる 沈線状の段。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
280	不明	口縁	底 高 2.0	口縁部「て」字状に直す。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
281	不明	口縁	口 径 (14.0)	口縁同き直る。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		
282	不明	口縁	口 径 (14.0)	口縁同き直る。	ヨコナダ	ヨコナダ	灰白色 顔料粒を含有 ○		

枝朶下池4号竈採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	器形	法量(cm)	形 態	手 法		色灰・土・灰磁	備 考	図版 番号
					外 面	内 面			
283	甕		口 径 15.7 器 高 5.2 底 径 7.8	口縁部を廻り内底に沈線1条。 両台強いヨコナデにより造ら れる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 黒粒多(含む) ○		
284	甕	高台	底 径 9.6	高台強いヨコナデにより造ら れる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 黒粒多(含む) ○		
285	不明	口縁	口 径 11.2	口縁やや肥厚光線る。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰色 黒粒多(含む) ○		
286	甕	口縁	口 径 3.7	口縁を廻る。 内底に沈線1条。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰色 黒粒多(含む) ○		



第34図 駄場鈍ヶ嶺1号竈址の現況 (撮影：徳水幸紀)

第3章

キタ ウメ モト アク シャ ダニ  
北梅本悪社谷遺跡



## 第3章 北梅本悪社谷遺跡

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯 (第35図)

1994(平成6)年3月、松山市農林水産部農林土木課(以下「農林土木課」という)より、松山市北梅本町甲695外における農道新設工事に伴う埋蔵文化財確認願いが、松山市教育委員会文化教育課(以下「文化教育課」という)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「103 鳥越古墳」内にある。周辺地域には、駄場焼ヶ嶺1号窯(西尾幸則、1981)を含む小野谷古窯址群が分布している。また、隣接地には、枝朶下池にて窯址1基、悪社谷にて灰原2ヶ所を確認している。

これらの事により、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1994(平成6)年4月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、須恵器を含む遺物包含層を検出し、当該地に古墳時代から古代までの遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果を受け、文化教育課の指導のもと、徳松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと農林土木課の二者は発掘調査について協議を行い、農林土木課の協力のもと1994(平成6)年5月30日より窯跡、灰原、丁房址などの確認を目的とする発掘調査を開始した。

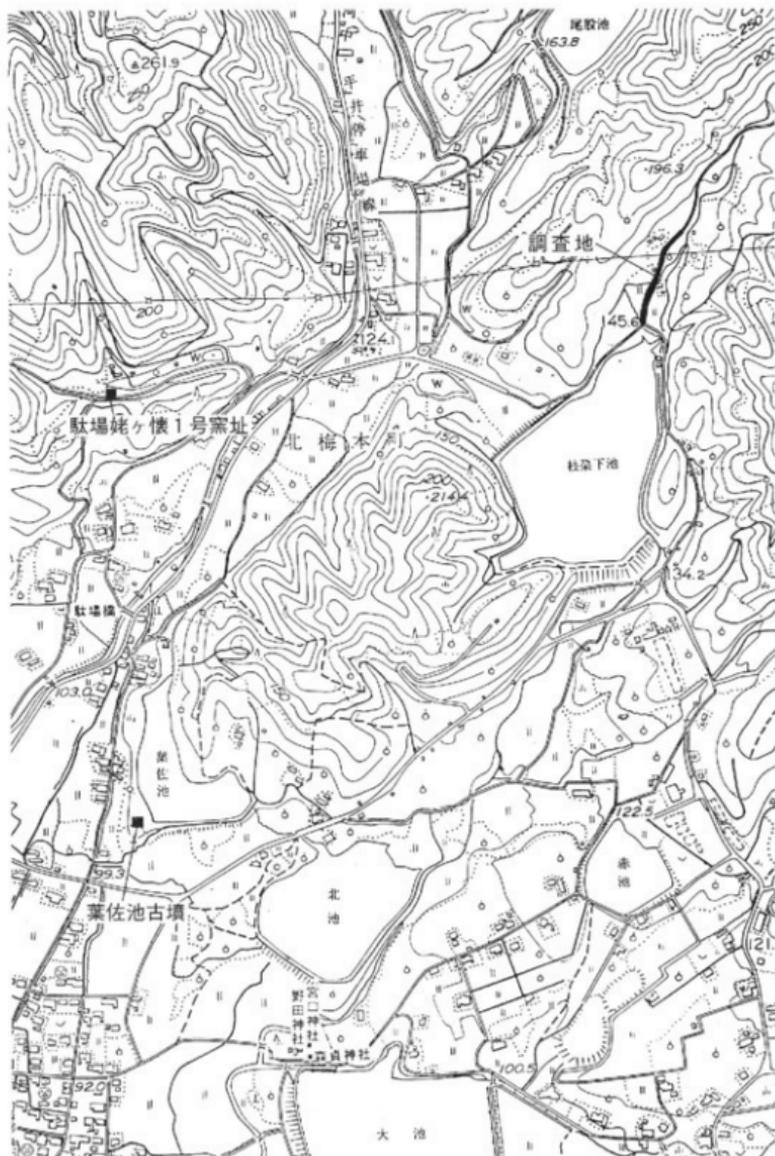
#### (2) 調査組織

調査地	松山市北梅本町甲695外
遺跡名	北梅本悪社谷遺跡
調査期間	野外調査 平成6(1994)年5月30日～同年6月30日
調査面積	900㎡
調査担当	田城武志・相原浩二・山本健一
調査作業員	石本 勝彦・岡崎 政信・蔵木 義夫・重松 吉雄・能田 久士・広沢 忠松本 敦・波辺 常義・白石あさか・関 正子・萩野ちよみ・吉井 信枝

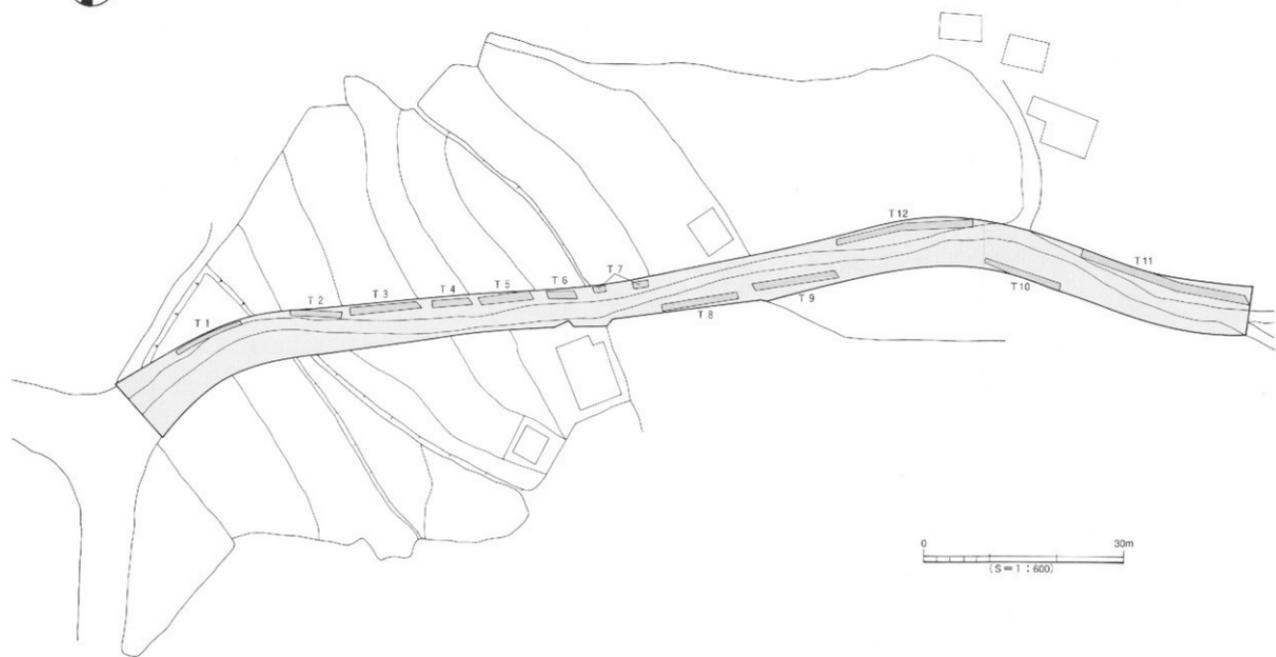
#### (3) 調査の経過 (第36図)

本調査地一帯は、南西に流れをとる悪社川によって開析された谷間である。調査地北側には南西方向に舌状に延びる尾根があり、この南傾斜面と舌状先端斜面には窯跡(枝朶下池・悪社谷)を確認している。現在は、数段からなる耕作地として利用されている。

調査区は、道路新設のため幅6m、全長150mと細長い。また、既存農道は、生活道路として利用されていることより、調査範囲は限定された。調査の結果、T1～T9及びT12は、現代の造成により遺構や包含層がない。ただし、耕作土中からは須恵器を採取している。一方、T10では旧地形の谷間、T11では遺物包含層を検出した。



第35図 調査地位置図 (S=1:10,000)



第36図 調査地測量図

## 2. 層 位 (第37図)

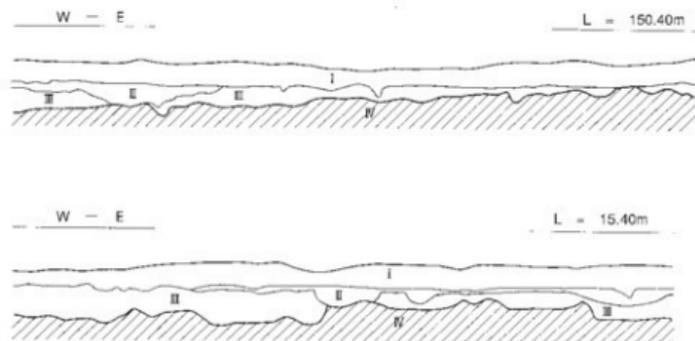
基本層位は、第Ⅰ層灰色細砂質土(耕作土)、第Ⅱ層黄橙色土(鉄錆色)、第Ⅲ層黄橙色礫混土～明黄灰色礫混土(造成土)、第Ⅳ層明黄褐色礫混土～明黄灰褐色粘性土(地山層)である。

第Ⅰ層：調査地全域でみられる。現代の耕作土である。

第Ⅱ層：耕作土床土である。現況では畑地であるが、畑地周辺に畦がみられることから、水田利用時の床土である。

第Ⅲ層：耕作地掘削時の造成土である。第Ⅰ層と同じ土壌の混入がみられること、土質が第Ⅳ層より軟弱であること、さらに第Ⅰ層、もしくは第Ⅱ層の直下にあることから造成土と判断した。

第Ⅳ層：第Ⅳ層以下は、6層分を検出した。第Ⅳ①層は明黄褐色礫混土(5～10cm大の円礫)、第Ⅳ②層は明黄褐色土、第Ⅳ③層は明黄褐色礫混土(20～30cm大の円礫)、第Ⅳ④層は明黄褐色粘性土(やや紫色を帯びる)、第Ⅳ⑤層は紫色粘性土、第Ⅳ⑥層は明黄灰褐色粘性土(20～35cm大の円礫が点在)である。



- 第Ⅰ層 灰色細砂質土(耕作土)
- 第Ⅱ層 黄橙色土(錆び色・床土)
- 第Ⅲ層 黄橙灰色礫混土～明黄灰色礫混土(造成土)
- 第Ⅳ層 明黄褐色礫混土～明黄灰褐色粘性土



第37図 基本層位図 (T8)

### 3. 遺構と遺物

今回の調査では、T10からは旧地形の谷、T11からは遺物包含層を確認した。

#### (1) T10 (第39図)

T10は、調査地東部、既存農道の三差路の南側にあり、地形が谷状に落ち込む部分にあたる。T10では基本層位の第Ⅰ・Ⅳ層と、谷間を埋める土壌Ⅰ・Ⅱ層を検出した。ただし、基本層位の第Ⅱ・Ⅲ層は検出されなかった。

第Ⅰ層は包含物の違いから4層に細分され、第Ⅰ①層灰色細砂質土、第Ⅰ②層黄橙色土、第Ⅰ③層明黄灰色礫混土、第Ⅰ④層灰色細砂質土(第Ⅰ①層よりやや暗い)である。第Ⅰ層以下は1層明灰橙色土～黄灰色砂礫(谷間上層)、2層暗青灰色粘性土(谷間下層)、第Ⅳ層黄色砂礫層(60cm大の礫石混)となる。

第Ⅰ層は4つに分層でき、耕作地を改変したことがうかがえる。第Ⅳ層以下は、礫石(60cm大)や出水が大量であったため確認していない。また、第Ⅳ層上面が谷部の基底面を形成している。

#### 旧地形の谷

トレンチ中央部から東にかけて、谷の西側傾斜部と基底部を検出した。検出長は東西5.5m、南北0.8m、深さは西側落ち込み部で0.5mを測る。基底部は南に下がる。

谷間の堆積土は、上層の明灰橙色土～黄灰色砂礫、下層の暗青灰色粘性土からなる。

上層は40～60cmの厚さを測り、11層に細分される。上層中からは遺物の出土はない。上層は、攪拌されているため造成土と判断した。

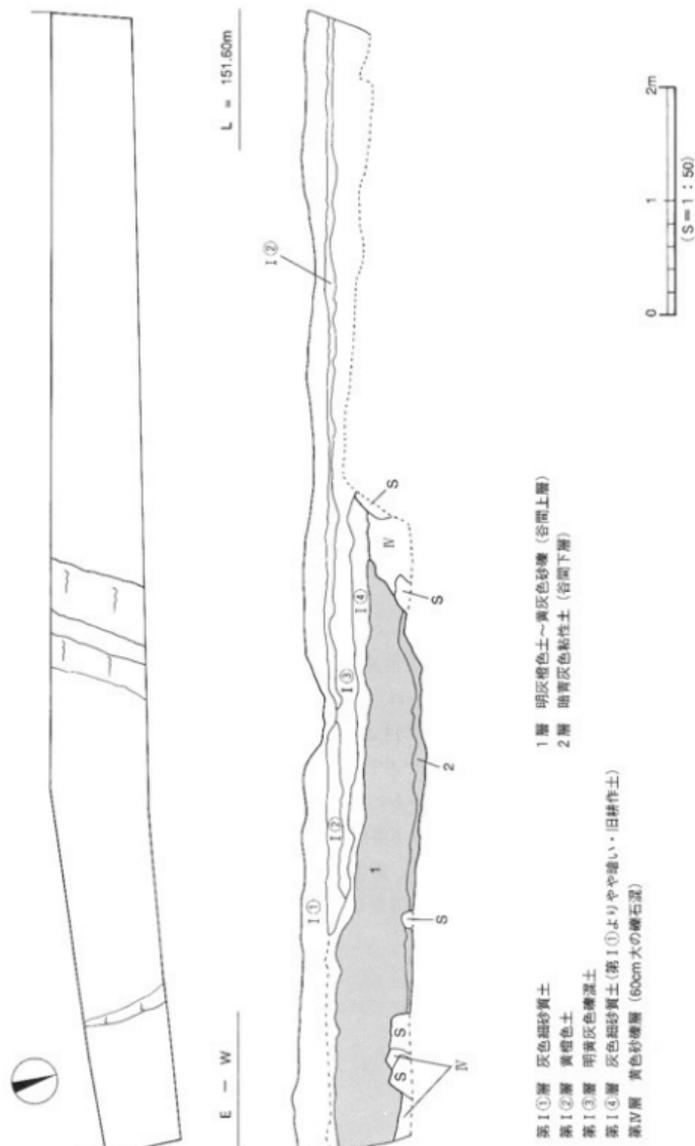
下層は、5～15cmの厚さを測る。やや灰黒い土中には、約1cm大の炭化物と、灰色粘性土が混入する。下層からは土器や石器の出土はない。

#### 出土遺物(第38図、図版30)

須恵器(1)1は、第Ⅰ②層出土で、高台の付く坏身の底部片である。高台は「ハ」の字状に付く。端部は平坦に接地する。内外面とも回転ナデ調整である。



第38図 T10出土遺物実測図



- 第I①層 灰色磁砂質土
- 第I②層 黄褐色土
- 第I③層 明黄灰色礫混土
- 第I④層 灰色磁砂質土(第I①よりやや埴い・田耕作土)
- 第IV層 黄色砂礫層(60cm大の礫石混)
- 1層 明黄褐色土～黄灰色砂礫(谷間上層)
- 2層 暗黄灰色黏性土(谷間下層)

第39図 T10平・断面図

## (2) T11 (第41図)

T11は、調査地東端部で、既存農道の北側に位置する。調査終了間際の降雨により上層壁が崩壊したため、土層図は西半部を測量するにとどまった。

層位は、第I層灰色細砂質(耕作土)、1層淡黄色細砂質土(やや赤味をおびる)、2層淡黄色細砂質土、第IV①層明黄褐色礫混土(5~10cm大の円礫)である。T11では基本層位の第II・III層はみられない。1層と2層は本トレンチに限り検出したものである。

1層は、トレンチ中央から東にかけて堆積しており、層厚は10~20cmを測る。土質は軟らかい。本層はやや赤味を帯びているが、これは上層の耕作土の汚染と思われる。2層と土質が類似しているが、遺物は出土していない。

2層は、遺物包含層で、層厚5~30cmを測る。堆積状況と土質は、1層と同様である。本層からは須恵器2点、石器1点、炭化物が出土した。須恵器片1点は3×2cm人の胸部片で、小片のため図化していない。炭化物は、1cm前後の大きさの物が数点検出された。

## 出土遺物(第40図、図版30)

須恵器(2)2は高台の付く坏身の底部片である。高台は「ハ」の字状に付き、高台端部には、沈線状の凹みが認められる。外面と底部外面は回転ナデ、内面はナデ調整を施す。

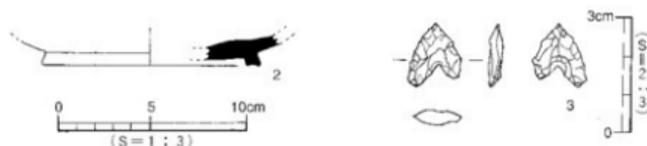
石鏝(3)3は凹基無茎式石鏝である。基部の抉りは深く、法量は長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm、重量0.67gである。石材は緑色チャートである。

## 4. まとめ

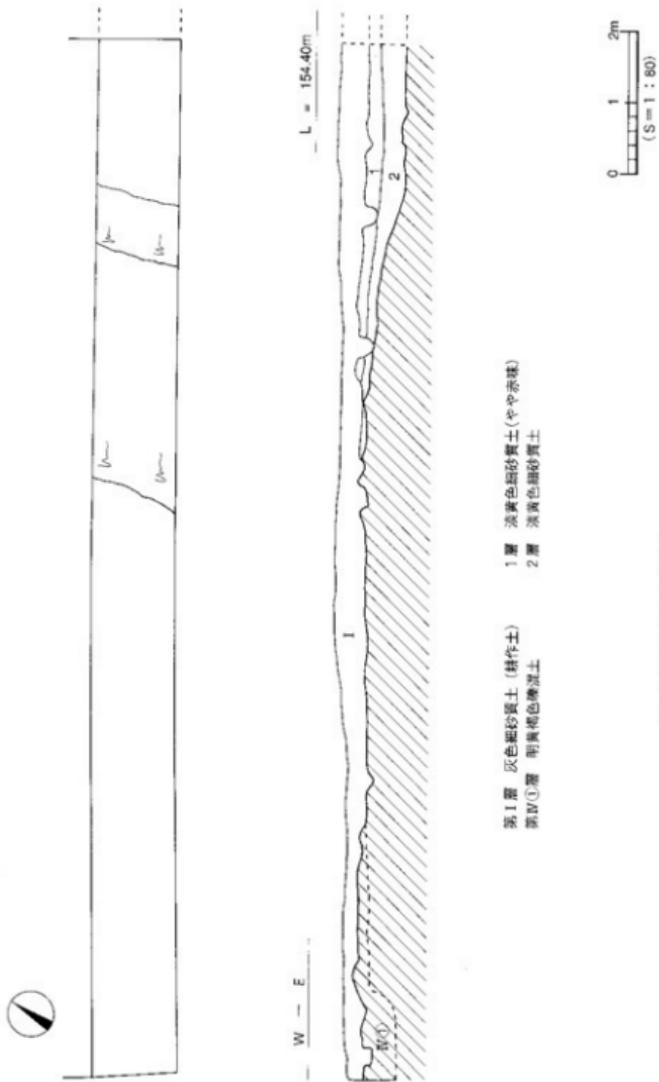
今回の調査では、調査地のほとんどが近現代の造成による掘削の影響を強く受けていた。調査地が諸般の事情で狭小であったため、調査の目的である窯跡、灰原、工房址などの遺構の検出には至らなかった。しかし、T11より北へ約40mの地点には悪社谷1号窯(第23図③)が存在することや、今回の調査でのT10・T11には、古墳時代から古代までの遺物包含層と、旧地形が確認できたこと、さらには耕作上中から須恵器片が採集されていることなどから、調査地周辺には窯址に関連する遺構・遺物が存在していることが明確となった。

今後は、周辺地域での遺構の確認と、窯址群の構造解明が課題となる。

なお、本調査では周辺地の遺跡分布調査を行った。調査の結果、窯壁と遺物を採集した。



第40図 T11出土遺物実測図



第41図 T11平・断面図

## 枝朶下池5号窯址

- 所在 松山市北梅本町枝朶下池（第42図）
- 立地 枝朶下池西斜面 海拔140m（推定）満水時は水面下に水没している。
- 遺構 斜面に窯壁上部が確認できる。灰原は未確認。
- 遺物 （第43図・図版30）窯壁裾部に須恵器と窯壁片を採集した。須恵器の器種は、蓋、坏、皿、高坏、甕がみられる。

蓋（4～9） 4は口縁部の傾斜は緩やかで、内湾の度合いも小さい。口縁端部は断面三角形状である。天井部外面はヘラケズリ、口縁部は内・外面とも回転ナデ調整が施される。復元口径25cm。5は天井部から直線気味の口縁部がやや屈曲して外下方に開いている。口縁端部は断面三角形状ではあるがやや丸味である。天井部外面はヘラケズリ、内面及び口縁部外面は回転ナデ調整が施される。復元口径23.2cm。6は口縁部片である。口縁部の傾斜は緩やかで、内湾の度合いも小さい。口縁端部は下方に短く屈曲する。内外面とも回転ナデ調整が施される。7は天井部から直線気味の口縁部がやや屈曲して外下方に開いている。口縁端部は下方に短く屈曲する。焼成はあまく内・外面とも磨滅のため調整は不明。8は口縁部片である。口縁端部は下方に短く屈曲する。内・外面とも回転ナデ調整が施される。9は口縁部の傾斜は緩やかで端部は下方に短く屈曲する。天井部は低く平らで、 $1/2$ よりやや口縁部よりに短く円筒状のつまみが付く。天井部外面はヘラケズリ、内面はナデ、口縁部内・外面とつまみ貼り付け部は回転ナデ調整が施される。復元口径22.4cm、復元つまみ径13cm、つまみの高さは0.9cmを測る。

坏（10～13） 10・11は口縁部が底部から内湾して上外方に開くもので10はほぼ上方向にたちあがっている。口縁部は内・外面とも回転ナデ調整が施される。13はやや外反気味に上外方向へたちあがる口縁部片である。内・外面とも回転ナデ調整が施される。

皿（14） 14は底部より直線的に上外方向に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラケズリ調整、底部内面はナデ、口縁部内・外面とも回転ナデ調整が施される。推定口径18cm、器高2.2cmを測る。

高坏（15） 15は脚裾部片である。ラッパ状に開く裾部で裾端部は下方へ短く屈曲する。内外面とも回転ナデ調整が施される。

甕（16） 16は口縁部片である。外反し端部を平坦におさめる。内外面とも回転ナデ調整が施される。

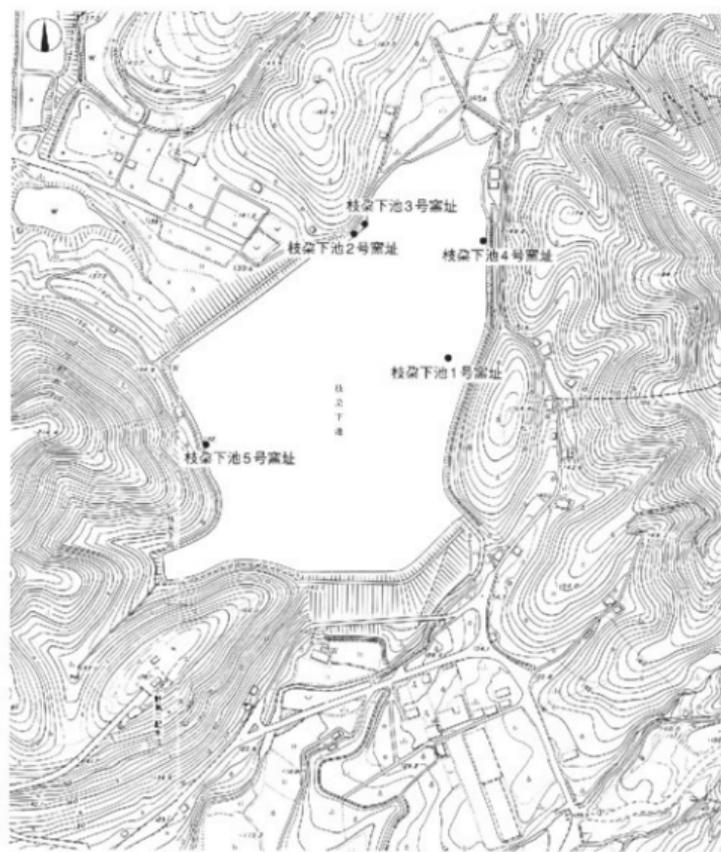
## 遺物について

今回報告を行った合計13点の資料は、採集遺物ではあるが、数少ない窯跡出土資料として松山平野における須恵器編年の一部を埋める重要な資料となるものである。

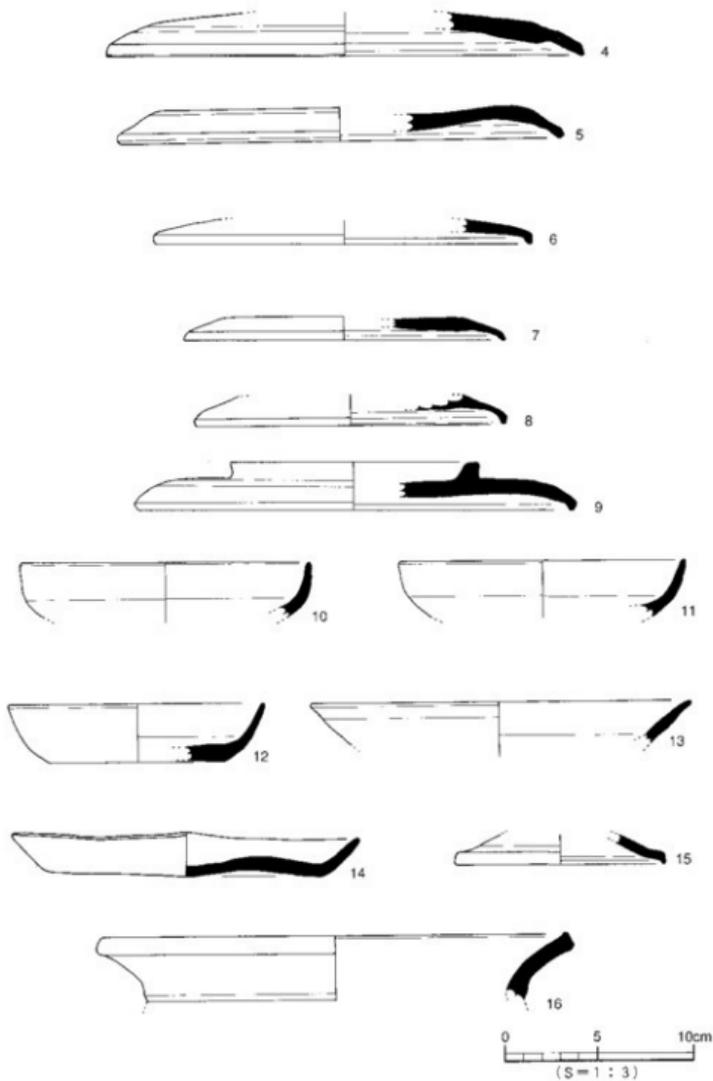
坏蓋9は、天井部に円筒状のつまみを貼り付けたもので、こうした形態をもつものは松山平野では初例である。砥部町通谷池4号窯跡からは、類似する形態をもつ坏蓋が出土している。しかし、後者の場合は天井中央部に退化した宝珠つまみを付し、更にその周囲に円筒状の突帯を貼り付けている。宝珠つまみを付さない9の資料とはやや異なるものである。

これらの須恵器は、坏蓋の形態などから8世紀前半（陶邑彌年）頃に比定される。松山平野では、駄場焼ヶ嶺2号窯出土資料（第2章）に後出するものと位置づけられる。

今回は、採集遺物の紹介にとどまったが、本格的な調査の機会に恵まれたならば、編年研究の一助となり得るものである。



第42図 枝桑下池窯址分布図 (S=1:5,000)



第43图 枝染下池5号窟採集遺物実測図

## 遺物観察表 (作成者：山本健一)

(1) 以下の表は、本調査検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) は復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 長(1~2.5)→「1~2.5mmの長石を含む」である。

焼成欄の記号について。◎→良好、○→良、△→不良。

表12 T10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	坏	高台径(13.0) 高台高 0.6 残 高 1.8	高台は「ハ」の字状に突き、 斜直内形で底層端よりやや 内側につく。	刷毛ナデ	刷毛ナデ	青灰色・灰色 灰色	長(1) ◎		30

表13 T11 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
2	坏	高台径(11.4) 高台高 0.5 残 高 1.7	高台は「ハ」の字状に突き、 断面内形で底層端につく。	刷毛ヘラケズリ	刷毛ナデ・ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		30

表14 T11 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				高さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
3	石 摩	定 形	緑色チャート	1.7	1.4	0.35	0.67	凹溝式	30

表15 枝染下池5号窯採集遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
4	坏蓋	口径(25.0) 残高 2.3	口縁周部を内側に屈曲させる。	同転ケズリ 同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) 径(1.5-2) ○		30
5	坏蓋	口径(23.2) 残高 1.8	口縁部から段をなして下がり、口縁部は下方へ屈曲。基部は丸い。	ケズリ 同転ナデ	ナデ	灰色 灰色	長(1-2.5) ○		30
6	坏蓋	口径(19.6) 残高 1.2	口縁部を内側に屈曲させる。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(3.5-1) ○		30
7	坏蓋	口径(17.0) 残高 1.2	宇州と天井部を著し、口縁部は下方へ屈曲。基部は丸い。	マメフ	マメフ	灰白色 灰白色	径(1.5-2) ○		30
8	坏蓋	口径(16.0) 残高 1.6	天井部から段をなして下がり、口縁部は下方へ屈曲。基部は丸い。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5-1) ○		30
9	坏蓋	口径(22.4) 口縁(13.0) 口縁(9.9) 残高 2.5	天井部に前後台形の溝を走り付けている。口縁周部を内側に屈曲。	同転ナデ 同転ケズリ	同転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		30
10	坏身	口径(13.0) 残高 2.9	基部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は尖り気味に丸い。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		30
11	坏身	口径(15.0) 残高 3.0	基部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は尖り気味に丸い。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		30
12	坏身	口径(13.4) 部高 3.1 残高(19.2)	外上方に内湾しつつ口縁へのびる。口縁部は尖り気味に丸い。	同転ナデ 同転ケズリ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5-1) ○		30
13	坏身	口径(20.0) 残高 2.2	外上方へのび、口縁部は外反し、基部は尖り気味に丸い。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(0.5) ○		30
14	皿	口径(26.0) 部高 2.2 残高(14.4)	口縁部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさまられている。	同転ナデ 同転ケズリ	ナデ 同転ナデ	灰白色 灰白色	径(1) ○		30
15	高杯	口径(11.0) 残高 1.5	ハ、の字状に外反し、口縁部付近で段をなす。基部は丸く尖り気味で下方に下がる。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		30
16	甕	口径(22.4) 残高 3.5	口縁部は外反し、基部は尖をもつ。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色・黒色 灰白色	長(3.5-1) ○		30

第4章

カミ カリ ヤ  
上 苧 屋 遺 跡

— 1 次調査地 —



## 第4章 上苅屋遺跡1次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経過 (第44・45回)

1989(平成元)年11月、大西久生氏より松山市平井町937番地2内における住宅建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.90 権現山古墳群」内にあたり周知の遺跡として知られている。周辺には、当地の北方に広がる丘陵部にかいなご古墳群、平井谷古墳群、今吉古墳群など数多くの古墳が分布している。北東部の丘陵斜面には古墳時代後半から古代にかけての須恵器生産が営まれていたと考えられる駄場姥ヶ懐窟跡が確認されている。また、当地の西方には来住舌状台地が広がっており来住廃寺跡や久米高畑遺跡群など、弥生時代から古代にかけての集落関連遺構や遺物が数多く確認されている。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲を確認するため、1989(平成元)年12月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、須恵器、土師器を含む遺物包含層とピット11基を検出し、当該地に古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と申請者の二者は遺跡の取扱いについて協議を行った。開発によって破壊される遺構・遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は古墳時代における当地の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり申請者の協力のもと1990(平成2)年1月20日に開始した。

#### (2) 調査組織

調査地 松山市平井町937番地2

遺跡名 上苅屋遺跡1次調査地

調査期間 1990(平成2)年1月20日～同年3月4日

調査面積 396㎡

調査主体 松山市教育委員会文化教育課

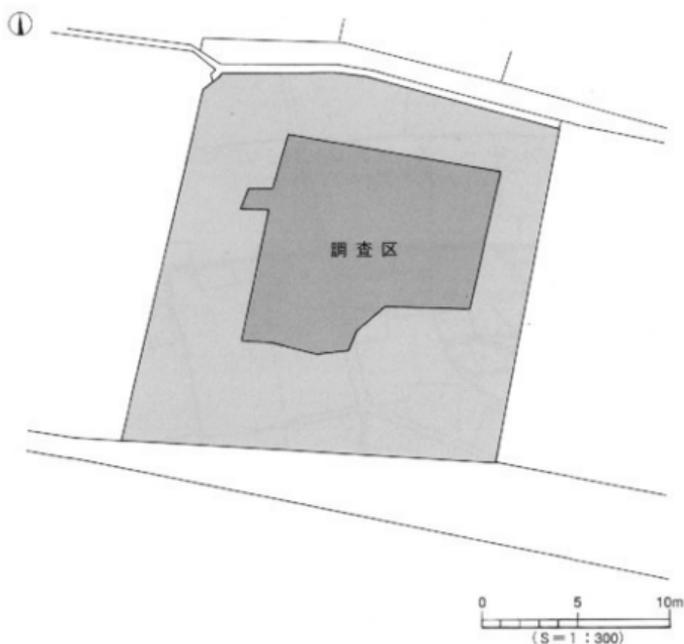
調査担当 主任 重松 佳久

調査補助員 高尾 和長





第45図 調査地位置図(2) (S=1:1,500)



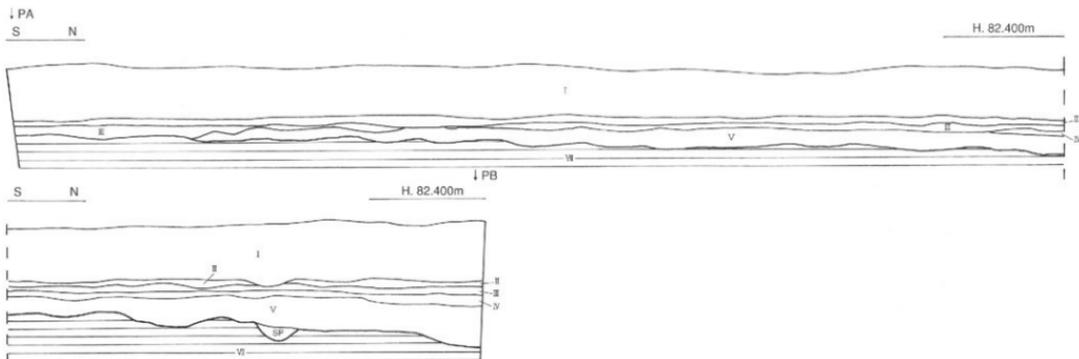
第46図 調査地測量図

## 2. 層位 (第47・48図)

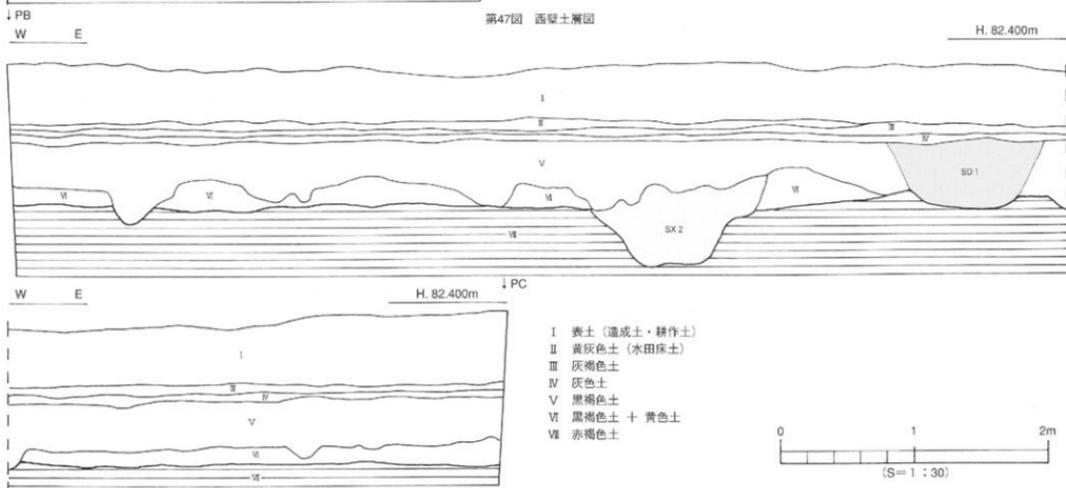
調査地は松山平野南東部、小野川流域左岸に位置し、小野川水系による高縄山系南麓の開析扇状地上、標高約82.2mに立地する。調査地は調査以前は水田であった。調査対象面積は396㎡であるが、廃土置場を確保したため、最終の発掘調査面積は120㎡余りである。

調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黄灰色土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層灰色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黒褐色土と黄色土の混合土、第Ⅶ層赤褐色土である。

第Ⅰ層及び第Ⅱ層は近現代の水田耕作に伴う耕作土で地表下30～50cmまで開発が行われている。第Ⅲ層及び第Ⅳ層は調査区ほぼ全域にみられ、厚さ5～15cmの堆積である。両土層からは土師器小片が数点出土している。



第47図 西登土層図



第48図 北登土層図



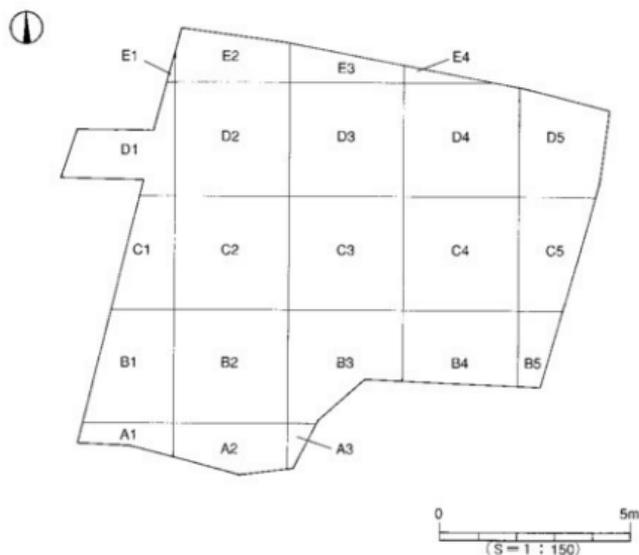
第49回 遺構配置図

第V層は調査区全域にみられ、粘性の強い土壌である。南から北に向けて緩傾斜堆積をなしており、厚さは北側で約30cm、南側で約10cmである。遺物は弥生土器、土師器、須恵器片が少量出土している。第VI層は調査区北東部のみに検出された。第V層と同様粘性の強い土壌で、厚さ10～20cmの堆積である。本層中からは弥生土器、土師器小片が数点出土している。第VII層は小礫を含む土壌である。本層上面にて遺構を検出した。

遺構は第V層上面、第V層中及び第VII層上面で検出した(第49図)。第V層上面では溝1条(SD1)、第V層中では性格不明遺構1基(SX1)を、第VII層上面では石室1基、土坑2基、性格不明遺構1基(SX2)、ピット87基を検出した。

第VII層上面の標高を測量すると調査区北東部が最も高く、漸次南西方向へ向けて緩傾斜している(比高差40cm)。なお、調査にあたり調査区内を3m四方のグリッドに分けた。呼称名は第50図に記す。

また、土層図のポイントPA・PB・PCは、ポイント位置を第49図に記載している。



第50図 調査地区割図

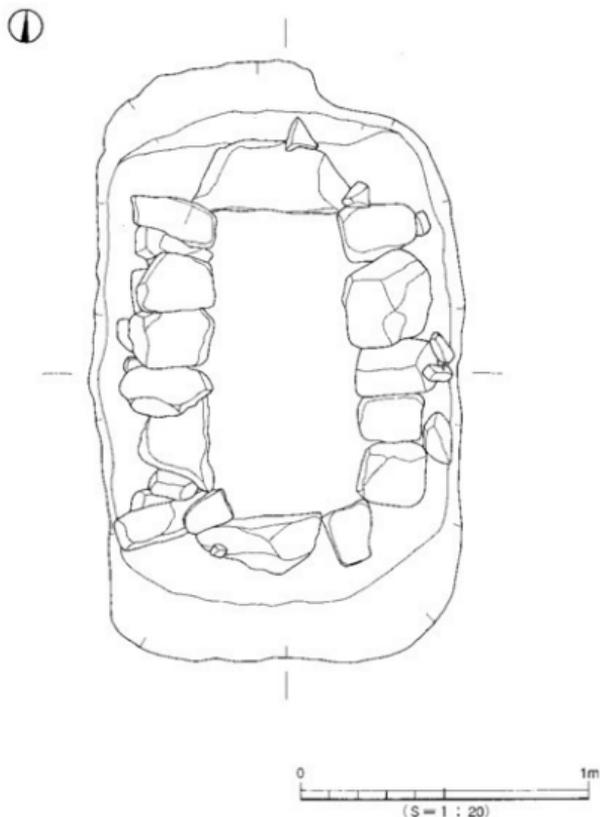
### 3. 遺構と遺物

#### (1) 古墳

本調査において石室を1基確認した。第Ⅶ層上面での検出である。

##### 1号石室 (第51・52図、図版33～35)

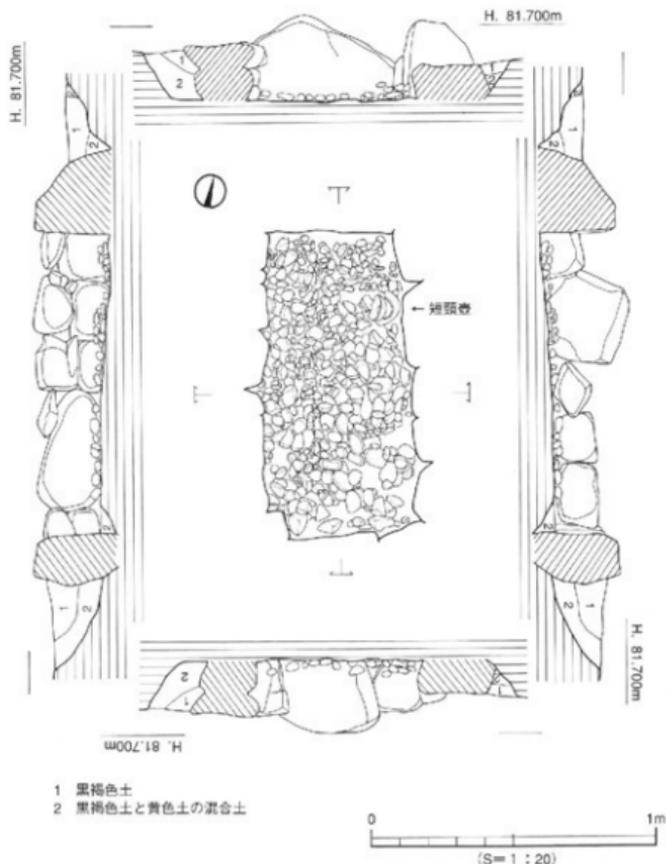
調査区北西部D2区に位置する。地表下約30cmの地点にて石室を検出した。石室上部は擾乱を受けたものと考えられ、天井石は抜き取られており、側壁、奥壁は1～2段の石材のみが残存していた。



第51図 1号石室測量図(1)

小型の竪穴式石室で、規模は長軸1.52m、短軸1.10mであり、内径長軸1.08m、短軸0.52mである。石棺的規模のもので、磁北より約8°西に方位を振っている。石室掘り方は長方形を呈し、規模は長軸2.1m、短軸1.3mを測る。深さは検出面下約20cmである。壁体は比較的ゆるやかに立ち上がる。石室のうらごめには黒褐色土と黄色土の混合土が用いられている。

石室に使用されている石材は安山岩、砂岩等の扁平な河原石で、平積構造である。奥壁は1枚石で閉塞されている。



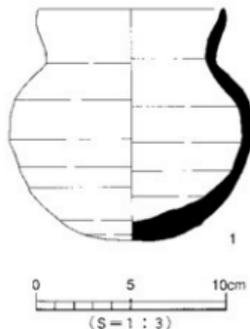
第52図 1号石室測量図(2)

石室床面は砂岩等の河原石（径3～5cm）をほぼ全面に敷きつめた状況であったが、各所に原位置をとめない石もみられた。墳丘を構成する盛土や周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は石室北東部床面付近から、割れた状態で須恵器短頸壺が1点出土している。

#### 出土遺物（第53図、図版36）

1は須恵器の短頸壺。口縁部がわずかに欠損するもののほぼ完形品である。口径9.6cm、器高12.2cmを測る。底部には右方向の回転ヘラ削りが施され、胴部から口縁部まで回転カキ目調整を施す。



第53図 1号石室出土遺物実測図

時期：出土した短頸壺は陶邑編年のTK47型式に相当するものと考えられる。しかしながら石室内の敷石の状況や天井石の抜き取り状況などから石室はかなりの攪乱を受けているものと考えられる。短頸壺が石室使用のものかは判断しかねるが、現段階では古墳時代後期、6世紀初頭頃の小型竪穴式石室と考えておく。

## 〔2〕土 坑

本調査において土坑2基を確認した。両者とも第Ⅶ層上面での検出である。

#### SK1（第54図）

調査区中央部西寄り、C2区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.83m、短径1.02m、深さは約40cmを測る。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒褐色土を基調とするが、底面及び壁体に黒褐色土に黄色土がブロック状に混入する土がみられた。

遺物は遺構中央東寄りの底面付近から須恵器割片が出土した。また、埋土中位から上位にかけて10～25cm大の礫が散在して出土した。

時期：出土した須恵器の時期は判断しかねるため、本土坑の明確な時期決定は難しいが、概ね古墳時代の遺構と考える。

#### SK2（第55図）

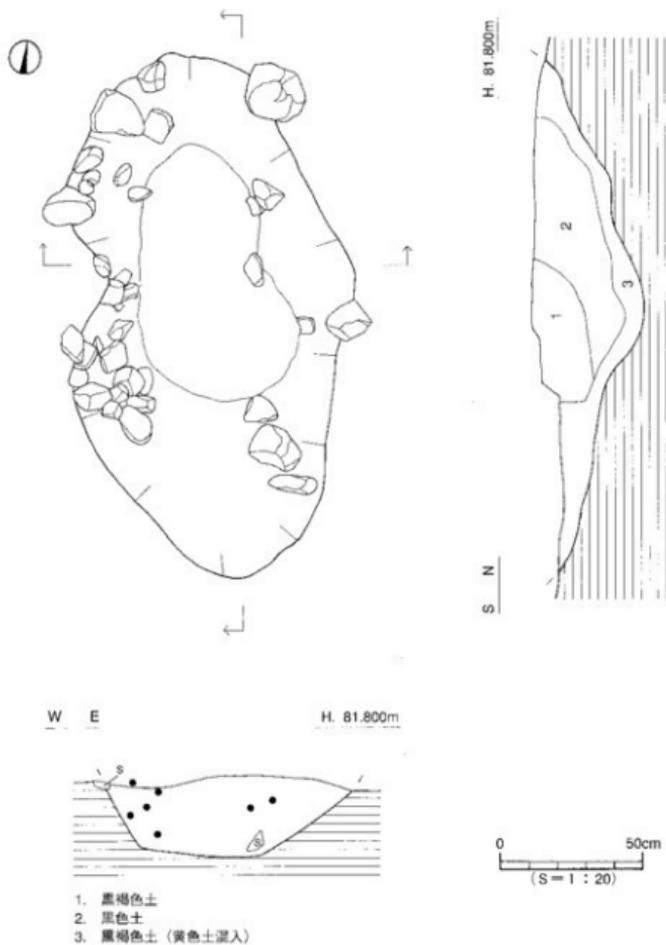
調査区中央部南東寄り、C3～D3区に位置する。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径1.67m、短径1.16m、深さ24～30cmを測る。断面形は浅い舟底状を呈する。

埋土は黒褐色土を基調とするが、底面付近には黒褐色土に黄色土がブロック状に混入する。

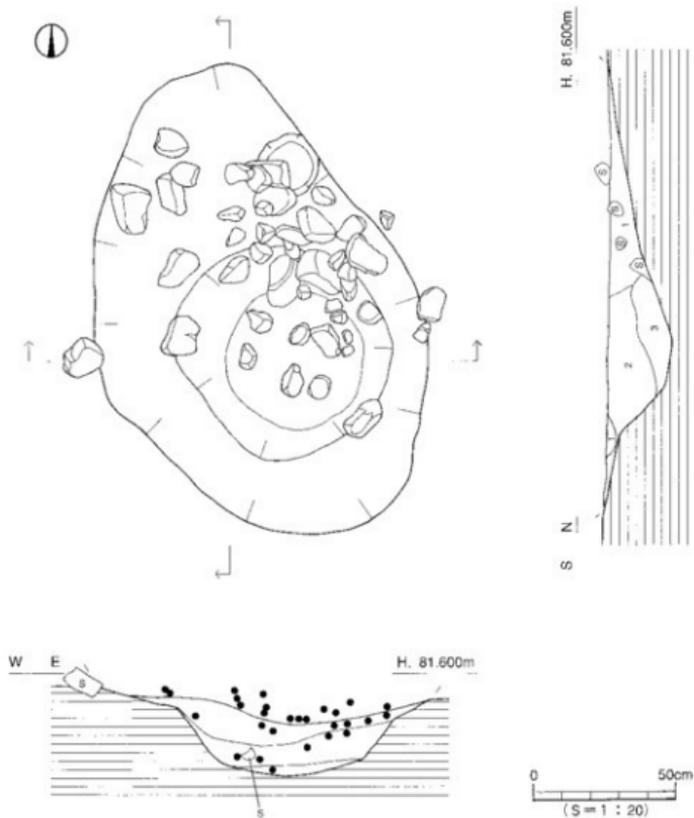
遺構北側底面にて径20～25cm、深さ10cmのピットを検出した。

遺物は土製品の出土はなく、10～30cm大の礫が埋土上位から散在して出土した。

時期：木十坑からは時期を判断しうる遺物の出土はなく、時期や性格は不明である。



第54図 SK1測量図



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土（黄色土がブロック状に混入）
3. 黒褐色土と黄色土の混合土（小レキ含む）

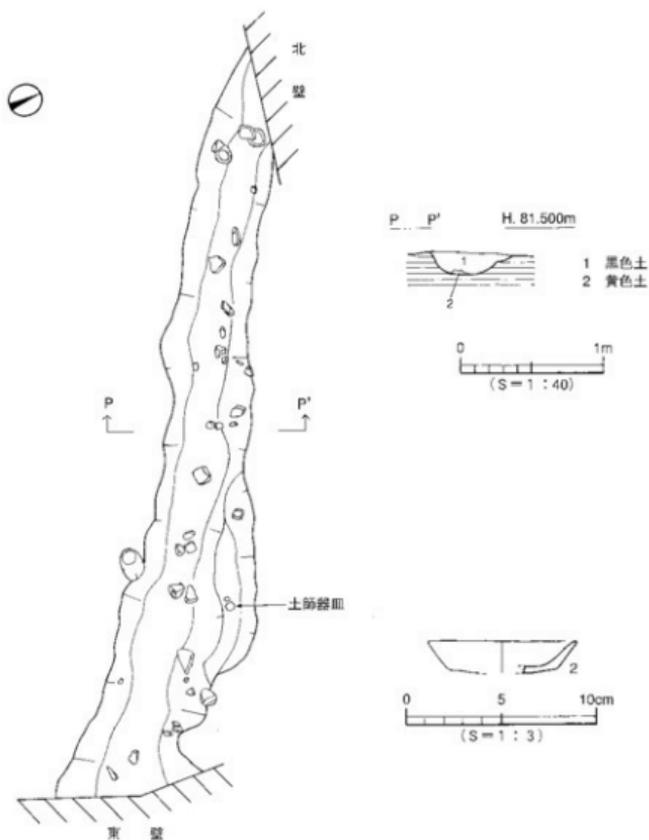
第55図 SK2測量図

[3] 溝

本調査において溝を1条検出した。第VI層上面での検出であるが、調査区北壁の土層観察により、第V層上面から掘り込まれていることを確認した。

SD1 (第56図、図版36)

調査区北東部、C4～D5区に検出した溝で、溝の東及び西端は調査区外に続く。規模は検出長5.4m、幅0.6～1.0m、深さは検出面下約15cmを測る。断面形はレンズ状を呈す



第56図 SD1測量図・出土遺物実測図

る。埋土は黒色土を基調とするが、溝底面付近には黄色土がブロック状に混入する。溝底は比較的平坦であり、わずかに西から東に向けて緩傾斜をなす（比高差3cm）。

遺物は埋土中にて土師器片が数点と、埋土上位からは5～10cm大の小礫が散在して出土した。

溝底にて径15cm前後の小ピットを2基検出した。埋土は黒色土で、ピット内からの遺物の出土はない。

出土遺物（第56図、図版36）

2は土師器の坏である。内外面共にヨコナデ調整を施す。

時期：出土した土師器の特徴から、溝の時期は古代、10世紀頃と考えられる。

#### 〔4〕その他の遺構と遺物

本調査において性格不明遺構2基（SX1・2）とピット87基及び遺物包含層を検出した。

##### （1）性格不明遺構

SX1（第57図、図版35）

調査区北西部、1号石室の北東部、C3～E3区で検出した集石状の遺構である。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査区北壁の土層調査により第Ⅴ層中に集石の礫が混入していることを確認した。

集石は5～20cm大の円・角礫からなり、特に調査区中央部付近に密集している。集石内からは遺物の出土はなく、明確な時期や性格はわからない。あえて時期を求めるとすれば第Ⅴ層堆積中、概ね古墳時代の遺構と考えられる。

SX2（第49図）

調査区北壁中央部、D・E3区に検出した不定形状の遺構である。遺構北側は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出である。

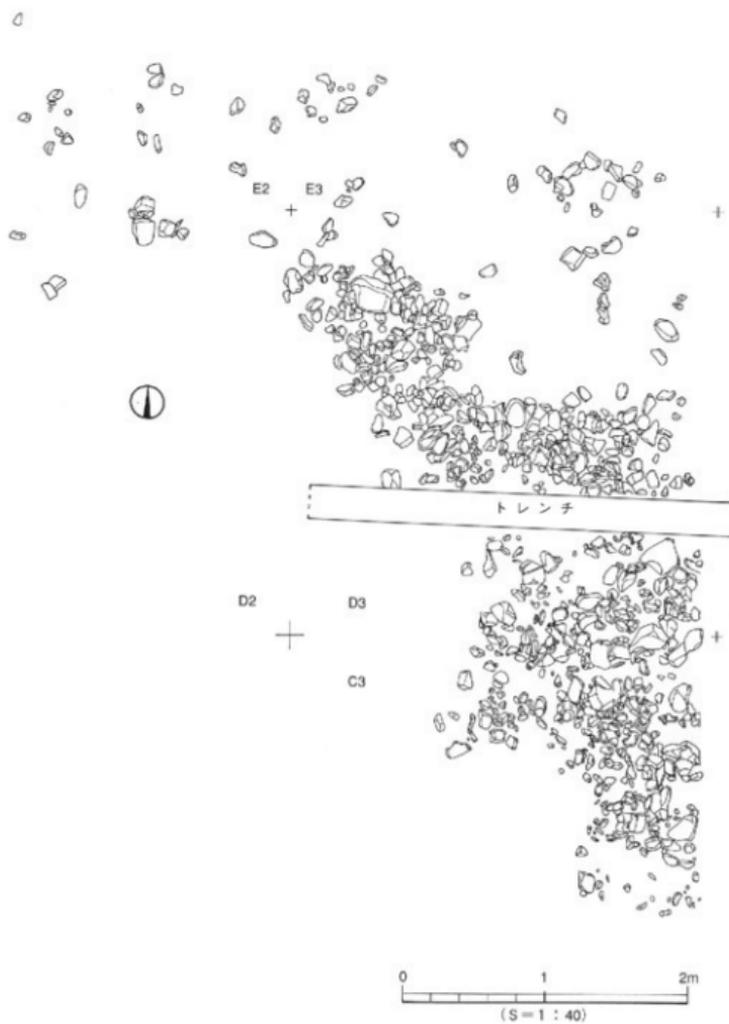
規模は南北2.0m、東西1.3m、深さは検出面下約40cmを測る。断面形は「U」字状を呈する。埋土は底面付近に第Ⅴ層と同様の黒褐色土があり、遺構上位には第Ⅵ層が部分的に検出された。土層の堆積状況から倒木痕と考えられる。遺構内からの遺物の出土はない。

時期：明確な時期判断はしかねるが、概ね古墳時代以前の倒木痕であろう。

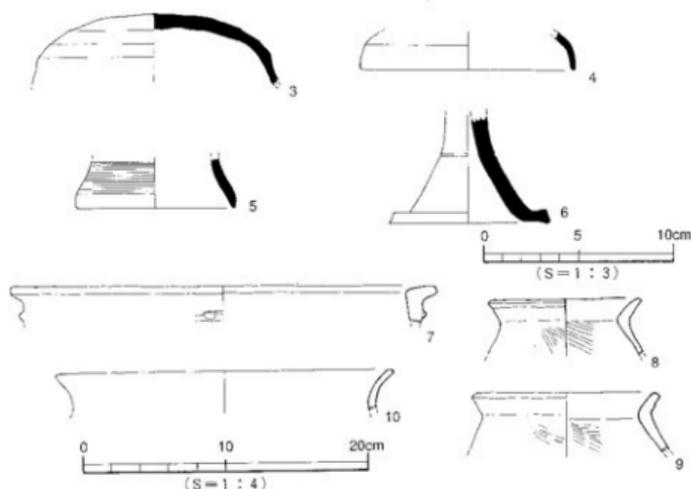
##### （2）第Ⅴ層出土遺物（第58図、図版36）

本調査において、第Ⅴ層中から弥生土器、須恵器、土師器片が数点出土した。図化しうるものを第58図に掲載した。

3・4は須恵器坏蓋である。3は天井部は丸く、天井部と口縁部を分ける稜は消失している。4は口縁部片。口縁端部は矢形気味に丸く仕上げている。5・6は須恵器高坏の脚部である。



第57図 S X 1 検出状況図



第58図 第V層出土遺物実測図

6は脚端部は下方に屈曲する。脚中に1条の沈線が走る。古墳後期。

7～9は弥生土器の甕である。7は逆「L」字状口縁の甕で、口縁下に凸帯を貼り付け、凸帯上を押圧する。弥生中期中葉。8・9は「く」の字状口縁の甕である。内外面共に刷毛目調整を施す。弥生後期。10は上飾器の甕。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。古墳後期。

#### 4. 小 結

本調査において、弥生時代・古墳時代・古代の遺構と遺物を検出した。

弥生時代は、時期比定しうる遺構は未検出であるが、第V層中より弥生時代中期中葉～後期の遺物が出土している。これは、当地周辺に弥生時代集落の存在を示唆するものである。古墳時代は小型竪穴式石室や土坑、集石状遺構を検出した。石室は長軸1.5m、短軸1.1mと小規模のもので、石室上部は攪乱により削平されている。発掘調査時、周溝等の検出につとめたが現存する土層の堆積状況からでは判断しがたく、墳丘の構造や中心主体の問題については、課題を残す結果となった。周辺地域の状況をもみても、類似する小型の竪穴式石室の検出例はなく、現段階では出土した須恵器の特徴から古墳時代後期の始め、6世紀初頭の石室と位置づけておく。

また、土坑内や第V層中より、6～7世紀代の須恵器、土師器が少量ではあるが出土している。そのほか、第V層と類似する埋土をもつピットが多数検出されたことから、掘立柱建物が存在した可能性もある。

これらのことから、当地を含め周辺地域に古墳時代集落が展開されていたものと考えられる。

古代は溝SD1内から10世紀代に比定される土師器片が出土している。溝の性格は不明だが、少なくとも古代においては、当地や近隣地域が集落域として利用されていたものと推測される。

これまで、当地や調査地域での発掘調査はあまり実施されておらず、遺跡の有無や範囲、性格などは不明な点が多かった。今回の調査では、少なくとも古墳時代においては当地が墓域として利用され、なおかつ、当地や周辺地域に古墳時代を通して集落が形成されていたことが判明した。今後は、資料収集を重ね、弥生時代から古墳時代を中心とした遺跡の構造や変遷を考えていかねばならないであろう。

#### 遺構・遺物一覧（作成者：宮内慎一）

(1) 以上の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) □→口縁部、胴上→胴部上位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1～4)→「1～4mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表16 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C2	長円形	舟底状	1.83×1.02×0.40	黒褐色土	須恵	古墳時代	
2	C3-D3	不整形円形	舟底状	1.68×1.16×0.23	黒褐色土		不明	

表17 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C4-D5	レンズ状	5.40×1.00×0.15	黒色土	土師	古代	第V層13号出土

## 上苧屋遺跡 1 次調査地

表18 1号石室出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・銘文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 9.6 残高 12.2	口縁部は内返し、肩部は外り 実味、底部の頸部、底面外面 に跡止ヘラナズリがみられる。	①ヨコナテ ②ヘラナズリ	回転ナテ	青灰色 青灰色	皆 ○		36

表19 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・銘文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
2	平	口径(10.2) 残高 2.2 底径(7.4)	土師器で、体部は実磨的 にやが上がる。口縁部は 大きく仕上げられる。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳白色 乳白色	皆 ○		36

表20 第V層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・銘文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
3	坏蓋	残高 3.7	やや丸みのある天弁部。 天弁部と口縁部を分ける 線は不明瞭。	①ヨコナテ ②回転ナテ	回転ナテ	青灰色 青灰色	皆 ○		36
4	坏蓋	口径(11.1) 残高 2.0	口縁部小片。肩部は丸く 仕上げられる。	回転ナテ	回転ナテ	暗灰色 暗灰色	皆 ○		
5	高坏	底径(8.0) 残高 2.6	胴部片。外反して下がり、 頸部部は垂下する。	回転ナテ	回転ナテ	青灰色 青灰色	皆 ○		
6	高坏	底径 8.2 残高 3.6	胴部部は大きく外反し、肩部 部は上下方に拡張する。底部 中に1本の流線が走る。	回転ナテ	回転ナテ	灰色 灰色	皆 ○	自然粘	36
7	甕	口径(20.5) 残高 2.7	逆し字状口縁。口縁下に肩部 二角形の凸部をもちけし、凸 部上に肩部直を残す。小片。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石長(1-3) ○		36
8	甕	口径(23.1) 残高 2.9	外反する口縁部。肩部は わずかに「コ」の字状に 仕上げられる。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳黄色 乳黄色	石長(1-3) ○		36
9	甕	口径(16.2) 残高 4.0	「く」の字状口縁。肩部は 「コ」字状に仕上げられる。口縁 部内面に彫刻が施されている。	①ヨコナテ ②ハケ	③ヨコナテ ④ハケ	乳褐色 乳褐色	石長(1-2) ○		36
10	甕	口径(12.4) 残高 4.2	「く」の字状口縁。口縁 中央がやや膨らむ。肩部は 「コ」字状に仕上げられる。	①ヨコナテ ②ハケ	③ヨコナテ ④ハケ	乳黄褐色 乳黄褐色	石長(1) ○		36

第5章

カミ カリ ヤ  
上 苧 屋 遺 跡

— 2次調査地 —



## 第5章 上苜屋遺跡2次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経過 (第59・60図)

1992(平成4)年1月、加藤六郎氏より松山市平井町甲980番地2地内における住宅建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.90 権現山古墳群」内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包蔵地内では、当地の北側に上苜屋遺跡1次調査地があり、古墳時代後期の小型竪穴式石室や土坑などが検出されている。

周辺の高尾には平井谷古墳群をはじめとする古墳時代後期の群集墳が数多く確認されているほか、松山平野における須恵器の一大生産が行われた駄場窯跡群などがある。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の広がりを確認するため、1992(平成4)年5月、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、須恵器、土師器を含む遺物包含層とピット2基を検出し、当該地に古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。



第59図 調査地位置図(1) (S=1:25,000)

この結果を受け、文化教育課・埋文センターと申請者の三者は遺跡の取扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺構・遺物について写真・記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は古墳時代における当地の集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者の協力のもと1994（平成6）年1月5日に開始した。

## （2）調査組織

調査地 松山市平井町甲980番地2

遺跡名 上胡屋遺跡 2次調査地

調査期間 1994（平成6）年1月5日～同年2月28日

調査面積 492.79㎡

調査主体 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当 調査員 宮内 慎一・水本 完児

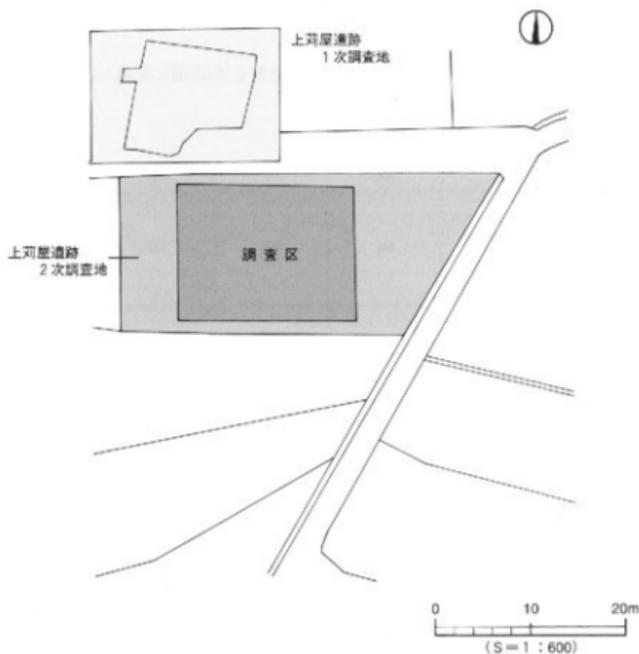


第60図 調査地位置図 (2) (S=1:1,500)

## 2. 層位 (第63・64図、図版37)

調査地は松山平野南東部、小野川上流域左岸、高縄山系南麓の開析扇状地上に位置する。標高は約81.5mを測る。調査地は調査以前は水田であった。調査対象面積は492.79㎡であるが、廃土置場や駐車場用地を調査地内に確保したため、最終の発掘調査面積は170㎡余りとなった(第61図)。

調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黄灰色土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層赤褐色土(礫混じり)、第Ⅴ層赤褐色土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は近現代の水田耕作に伴う耕土で、地表下15～30cmまで開発が行われている。第Ⅰ・Ⅱ層中からは近現代の陶磁器片が数点出土している。第Ⅲ層は砂質土壌で、調査区はほぼ全域にみられ、厚さ5～10cmの堆積である。本



第61図 調査地測量図

層中からは、土師器小片が数点出土している。第IV層は礫を含む粘性の強い土壌である。本層上面にて遺構を検出した。第V層は北壁の深掘りにより確認したもので、第IV層に比べより粘性が強い土壌である。第IV・V層中からの遺物の出土はない。本調査検出の第III層は1次調査検出の第III層もしくは第IV層、第IV層は第VII層に相当するものと思われる。しかしながら、1次調査検出の第V層・VI層は本調査では検出されなかった。

遺構はすべて第IV層上面での検出である(第65図)。掘立柱建物跡2棟、土坑2基、溝1条、ピット103基(掘立柱建物柱穴16基を含む)である。ただし、遺構の遺存状況から判断すると本米は第IV層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものが多い。

第IV層上面の標高を測量すると、調査区北西部から南東部にかけての中央部分が最も高く、北東部から南西部に向けて緩やかな傾斜をなす(北高差5cm)。

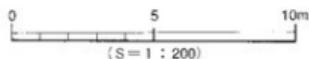
第IV層上面が北東から南西へ向けて傾斜をなすことは、1次調査においても同様の状況がみうけられた。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。各グリッドの呼称名は第62図に示す。

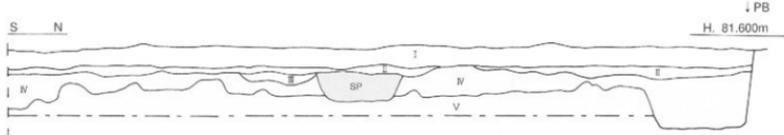
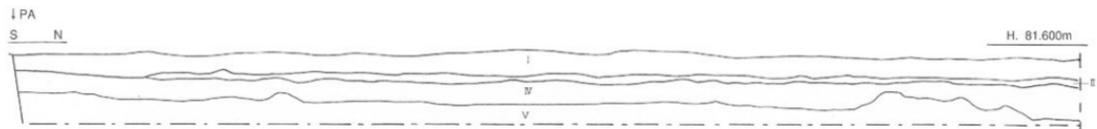
また、土層図のポイントPA、PB、PCは、位置を第65図に記載している。



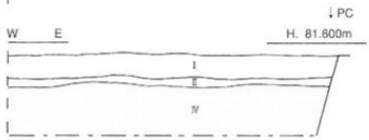
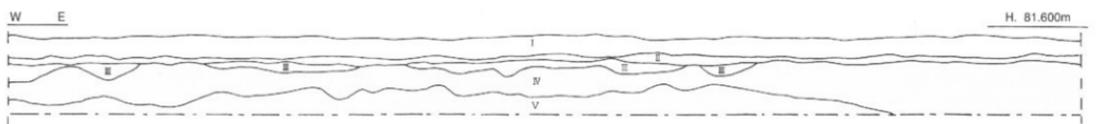
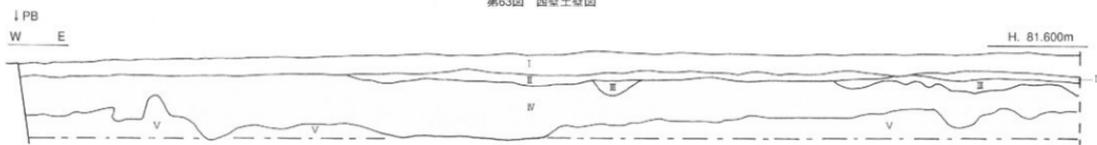
A6	A5	A4	A3	A2	A1
B6	B5	B4	B3	B2	B1
C6	C5	C4	C3	C2	C1
D6	D5	D4	D3	D2	D1
E6	E5	E4	E3	E2	E1



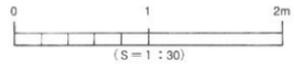
第62図 調査地区割図



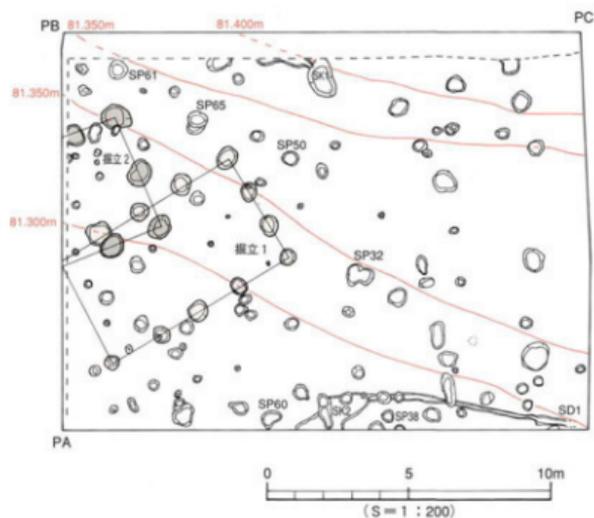
第63回 西壁土層図



- I 表土
- II 黄灰色土
- III 灰褐色土
- IV 赤褐色土 (礫混じり)
- V 赤褐色土



第64回 北壁土層図



第65図 遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

本調査において、掘立柱建物址2棟、土坑2基、溝1条、ピット103基を確認した。いずれも第IV層上面での検出である。

#### [1] 掘立柱建物址

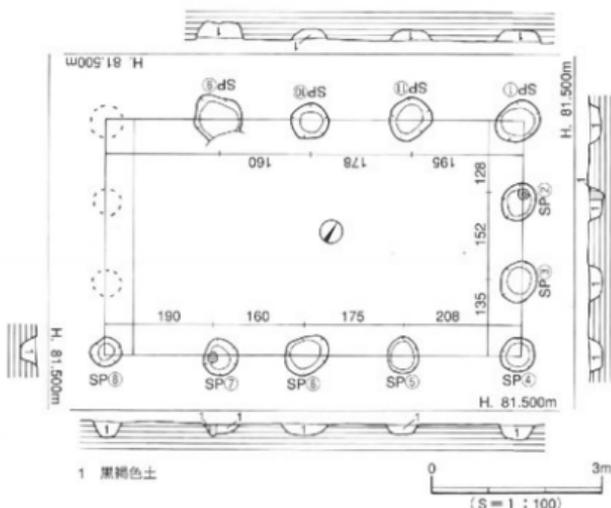
##### 掘立1 (第66図、図版39・40)

調査区南西部B4～D6区に位置する。11基の柱穴を検出したが、建物北西部は検出面がやや低くなっており、柱穴は未検出である。一部、柱穴が掘立2と切り合うが、掘立1が掘立2に先行する。

梁行3間、桁行4間の規模をもつ隅柱だけの建物址で、主軸方向はN-59°-Eである。建物規模は梁行長4.15m、桁行検出長7.33mを測る。平均柱間は東西2m、南北1.5mである。

柱穴掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、規模は径60～80cm、深さは検出面下20～30cmを測る。掘り方埋土は黒褐色土単層である。柱痕はSP②・⑦の2基が検出され、径15～20cm、深さ25cmを測る。柱痕埋土は黒色粘質土である。

遺物は埋土中にて須恵器坏蓋片、土師器小片が数点出土している。図化しうるものを2点掲載した。



第66図 掘立1測量図

出土遺物 (第67図、図版42)

1・2は須恵器杯蓋片である。天井部片であるため、天井部と口縁部を分ける稜の有無は分からない。

時期：出土した遺物がわずかであり、明確な時期判断は困難である。実測図に掲載した須恵器から判断すると、概ね、古墳時代後期、6世紀以降の建物址と考えられる。



第67図 掘立1出土遺物実測図

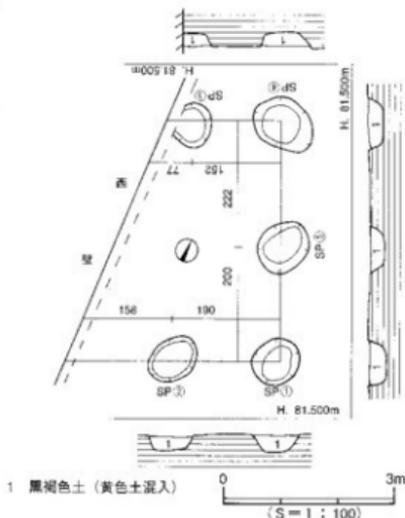
掘立2 (第68図、図版40・41)

調査区北西部B5～C6区に位置する。5基の柱穴を検出したが、建物はおそらく調査区外に続くものと考えられ、規模や形状は不明である。掘立1と柱穴が一部重複するが、掘立2が掘立1に後出する。

現状で、南北2間、東西1間以上の建物址で、規模は南北4.22m、東西検出長3.48mである。柱掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、規模は径80～100cm、深さは検出面下20～40cmを測る。柱痕は確認できなかった。掘り方埋土は黒褐色土に黄色土がブロック状に混入するものである。掘立1に比べ、掘立2の柱掘り方はひとまわりほど大型である。

柱穴内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物もなく時期判断は困難である。掘立1に後出することからあえて時期を求めるならば、古墳時代後期以降の建物址といえよう。



第68図 掘立2測量図

[2] 土坑

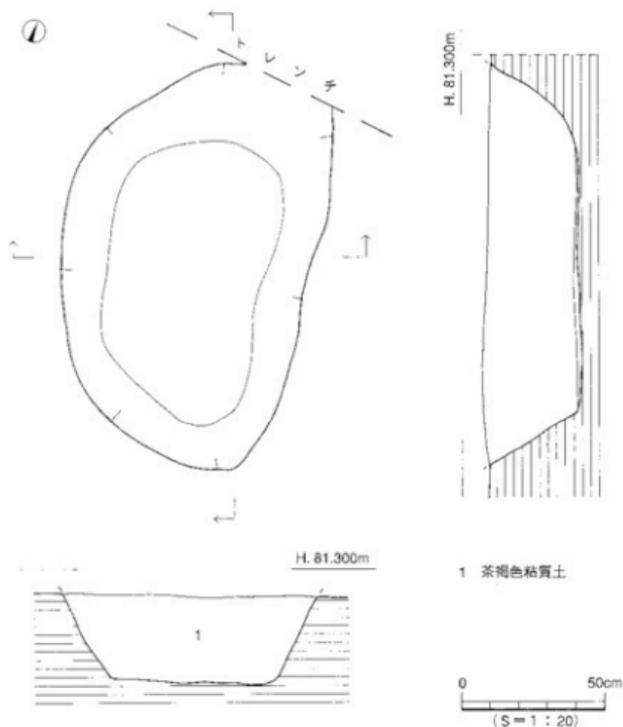
SK1 (第69図)

調査区中央北寄り、B3区に位置する。第IV層上面での検出である。遺構北隅はトレンチにより削平されている。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径1.42m、短径0.90m、深さは検出面下約30cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、坑上は茶褐色の粘質土である。

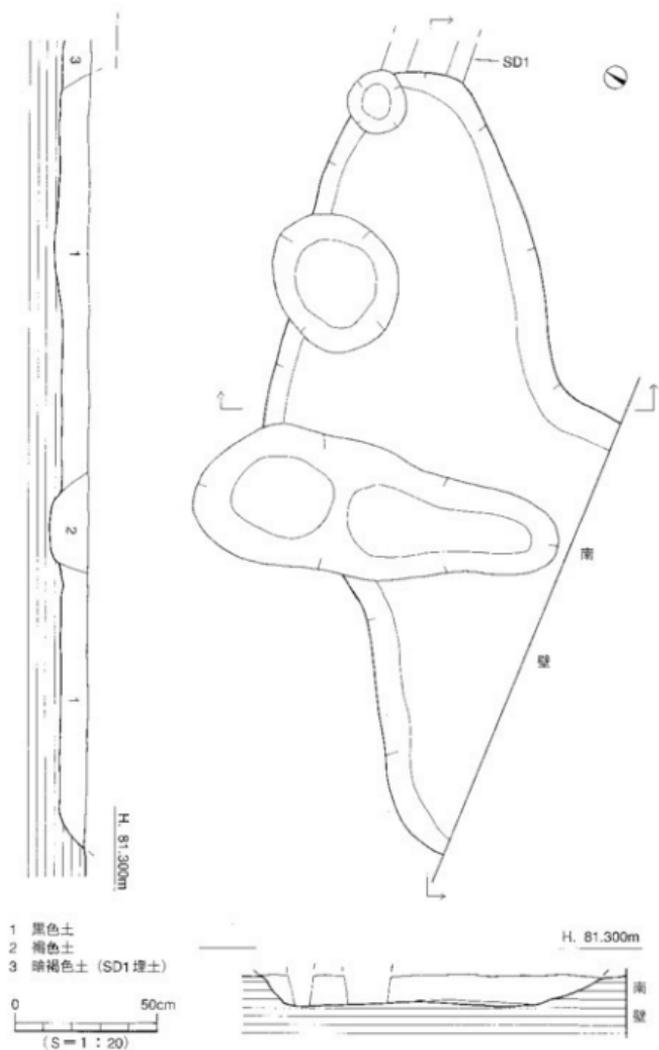
時期：土坑内からの遺物の出土はなく、時期や性格は不明である。

SK2 (第70図)

調査区南壁中央部、D3～E4区に位置する。第IV層上面での検出である。遺構東端は溝



第69図 SK1測量図



第70図 SK2測量図

SD1を切り、中央部は大小4基のピットに切られている。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径2.7m、短径1.25m、深さは検出面下約10cmを測る。埋土は黒色土単層である。土坑内から須恵器小片が数点出土しているが、図化しうるものはない。

時期：出土した須恵器が古墳時代後期、6～7世紀代に比定されることから概ね、本土坑の時期は古墳時代後期に比定されよう。

### [3] 溝

#### SD1

調査区南東部D3～E4区に位置する。溝の西側はSK2に切られ、東側は消失している。第IV層上面での検出である。規模は幅15～20cm、検出長7.3m、深さは検出面下3～7cmを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝底は西から東に向けてわずかに傾斜をなす（比高差3cm）。

時期：溝内からの遺物の出土はなく、明確な時期は不明であるが、古墳時代後期の土坑SK2に切られることから古墳時代後期以前の遺構と考えられる。

### [4] その他の遺構と遺物

#### (1) ピット

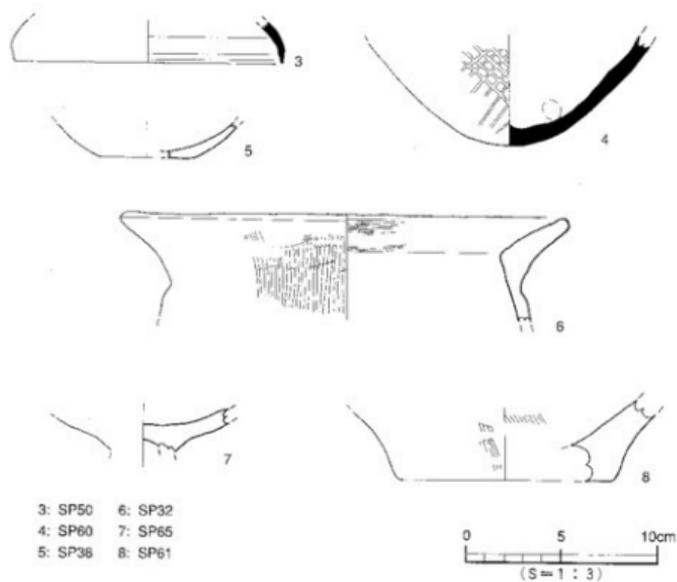
本調査において103基のピットを検出した。ピット埋土は灰褐色土、黒褐色土、黒色土に黄色土が混入するものの3種類に分けられる。黒褐色土を埋土にもつピット内からは、弥生土器や古墳時代の須恵器や土師器が出土し、灰褐色土を埋土にもつピット内からは古代の土師器破片が出土している。

これらのピットから出土した遺物のうち、図化しうるものを第71図に掲載した。

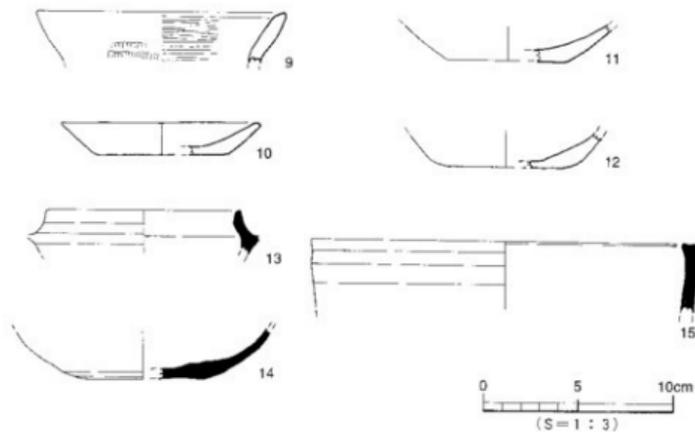
##### 出土遺物（第71図、図版42）

3・4・7・8は黒褐色土を埋土にもつピット、5・6は灰褐色土を埋土にもつピット内からの出土品である。3はSP50出土の須恵器坏蓋片である。口縁部の小片であるが、天井部と口縁部を分ける突出した稜は消失している。4はSP60出土の須恵器壺の底部片である。外面に格子叩きを施す。古墳時代後期。5はSP38出土の土師器坏である。口縁部は欠損している。底部の切り離しは磨滅の為不明である。古代。6はSP32出土の土師器甕である。口縁部の器壁は厚く、口頸部境外面は粘土貼り付けにより肥厚する。口頸部から胴部外面にかけて粗い刷毛目調整を施す。古代。7はSP65出土の土師器高坏である。坏底部には脚部接合痕を顕著に残す。古墳時代。8はSP61出土の弥生土器の壺の底部である。弥生時代後期。

#### (2) 第Ⅲ層出土遺物（第72図、図版42）



第71図 ビット出土遺物実測図



第72図 第三層出土遺物実測図

第Ⅲ層中からは土師器、須恵器片が数点出土した。図化するものを第72図に掲載した。

9は土師器甕の口縁部である。内湾する口縁部で、口縁端部は内傾する。古墳時代。10は土師器皿である。体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。11・12は土師器坏である。12は体部はわずかに内湾する。古代。13は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾する。14は須恵器坏、15は鉢である。15の口縁部は直立し、口縁端部は凹面をなす。古墳時代。

## 4. 小 結

本調査において、弥生時代、古墳時代、古代の遺構と遺物を検出した。

弥生時代は時期比定しうる遺構は未検出であるが、第Ⅲ層中及びピット内から弥生土器片が数点出土している。1次調査においても、黒色包含層中より弥生時代中期中葉から後期の遺物が出土していることから、これらの弥生時代の遺物は当地を含め周辺地域に弥生時代集落が存在することを物語る資料である。

古墳時代は掘立柱建物址2棟、土坑1基を検出した。明確な時期判断はしかねるが、掘立柱建物址は、柱掘り方や出土遺物などから古墳時代後期に建てられたものと考えられる。掘立柱1は3間×4間の建物址で柱掘り方は円形プランを呈している。1次調査においては掘立柱建物址は未検出であるが、本調査検出の建物址と同様の埋土をもつ柱穴が検出されていることから、近隣地域に同時代の建物址が存在する可能性が高いと考えられる。また、1次調査検出の石室に関する資料は本調査では検出されなかった。

6・7世紀代の須恵器が出土した土坑SK2においては調査時に土壌サンプルを採取した。分析結果についての評価は第10章に記載している。とりわけSK2埋没当時は当地や周辺地域にネザサ節などのタケ亜科の植物が繁茂する状況であったという結果が報告されている。

古代では、第Ⅲ層中及びピット内から該期の遺物が数点ではあるが出土している。

1次調査の結果をふまえ、今回の調査における古墳時代の遺構の検出は、該期の集落が存在していたことを立証するものとなった。今後は古墳時代はもとより、当地や周辺地域の弥生時代から古代までの集落の動態を明らかにし、それらのもつ性格や変遷を考えていかねばならないであろう。

### 【参考文献】

- 森 光裕 1975 『かいなご・松ヶ谷古墳』|松山市文化財調査報告書6|松山市教育委員会  
 田城武志 1993 『かいなご3号墳・平井谷1号墳』|松山市文化財調査報告書31|  
 新松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 松山市 1980 『松山市史料集-考古編Ⅰ』  
 松山市 1987 『松山市史料集-考古編Ⅱ』  
 宮内慎一 1994 『上町屋遺跡2次調査地』|松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ|  
 新松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

## 遺構・遺物一覧（作成者：宮内慎一）

- (1) 以上の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
- 例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。
- (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、刷上→胴部上位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部・底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4)→「1~4mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表21 掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規模 (間)	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	東西	4×3	7.33	1.90-1.60-1.75-2.08	4.15	1.35-1.32-1.28	30.12	遺立?を認む	古墳後期以降
2	東西	1×2	3.68	1.90・1.58	4.22	2.00-2.22	14.68	遺立?に認めらる	古墳後期以降

表22 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
				長さ×幅×深さ(m)					
1	B3	小変角円形	逆台形	1.42×0.90×0.30		茶褐色粘土		小 所	
2	D3-E4	不変角円形	円 状	2.70×1.25×0.10		灰色土	須恵 土器	古墳後期	SD1を切る。

表23 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
			長さ×幅×深さ(m)					
1	D3-E4	溝状	7.30×0.20×0.07		暗褐色土		古墳後期以降	SD2に切れる。

表24 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	耳蓋	残高 2.9	丸みのある天井部。口縁部は欠損する。天井部と口縁部を分ける段は小変。	◎刷毛ヘラツズリ ◎刷毛ナデ	刷毛ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	SPC	42
2	平蓋	残高 1.3	天井部は扁平。	刷毛ヘラツズリ	刷毛ナデ	黄灰色 黄灰色	密 ○	SPD	42

表25 ビット出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・銘文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	坏蓋	口径(13.9) 残高 2.2	天舟部と口縁部を分ける様はなく、口縁部は内下する。縁部は丸く仕上げられる。	同転ナデ	同転ナデ	青灰色 灰色	青 ○	SP30	42
4	皿	底径(14) 残高 5.3	底面平。外側に止まり部を有する。	同転ナデ	同転ナデ	灰色 灰赤	青 ○	SP60 自然胎	
5	坏	口径 4.8 残高 1.7	土師器坏。底部は平面で体部は内湾して立ち上がる。口縁部は欠損。	同転ナデ	マメツ	淡黄色 淡紫色	青 ○	SP38	
6	罎	口径(22.6) 残高 3.5	「く」の字状に前六音が二口縁部。口縁部の内面は厚肉である。口縁部内面に刻印が施されている。	ハケ	◎ハケ ◎ナデ	褐色 褐色	青系(1-3) ○	SP32	42
7	高坏	残高 1.6	高平の坏。胎土配合痕が残る。	マメツ	マメツ	棕色 褐色	青 ○	SP65	42
8	皿	底径(10.5) 残高 3.5	底の底面。平底。胎土は厚い。	ハケ	ハケ	褐色 灰褐色	青系(1-4) ○	SP61	42

表26 第Ⅲ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・銘文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
9	罎	口径(12.9) 残高 2.7	内湾する口縁部。胎土は内湾する。	ハケ	ハケ	明褐色 明褐色	青系(1-2) ○		42
10	皿	底径(6.9) 残高 1.5	土師器皿。胎土は底面に立ち上がり、口縁部付近でわずかに内湾する。縁部は丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	灰色 紫色	青(1) ○		42
11	坏	底径(6.3) 残高 1.7	土師器坏。胎土は色線的に立ち上がる。口縁部は欠損する。	マメツ	マメツ	棕色 褐色	青 ○		
12	坏	底径(6.1) 残高 1.6	土師器坏。胎土は内湾した後に立ち上がる。	ナデ	ナデ	黄褐色 褐色	青 ○		
13	坏身	口径(10.0) 残高 2.3	胎土は内湾した後に立ち上がる。縁部は丸く仕上げられる。小丸。	同転ナデ	同転ナデ	灰色 灰色	青 ○		42
14	坏	底径(6.2) 残高 2.4	土師器坏の胎土	◎同転ヘラケズリ ◎同転ナデ	同転ナデ	青灰色 灰色	青 ○		
15	钵	口径(20.0) 残高 3.6	底立する口縁部。縁部は内湾する。	同転ナデ	同転ナデ	灰色 灰色	青 ○		

第6章

ヒラキ

開 遺 跡

— 1次調査地 —



## 第6章 開遺跡1次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経過 (第73・74図)

1988(昭和63)年7月、医療法人財団慈強会(理事長 桑原公達)より松山市南土居町70番地1地内における病院看護婦寄宿舎建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.132 中ノ子廃寺及び遺物包含地」内にあたり周知の遺跡として知られている。当地の西方には白鳳期の寺院址である中ノ子廃寺の比定地がある。当地からは複弁八弁蓮華文軒丸瓦や忍冬唐草文と均整唐草文軒平瓦が出土したといわれ、松山平野でも最も強く法隆寺式の影響を受けた寺院と考えられている。また、南東500mの地点には全長約62mの松山平野最大規模の前方後円墳である波賀部神社古墳が所在する。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の広がりを確認するため、1988年9月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、須臾器、土師器を含む遺物包含層とピットや落ち込みを検出し、当該地に古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。



第73図 調査地位置図(1) (S=1:25,000)



第74図 調査地位圖(2) (S=1:1,500)

この結果を受け、文化教育課と申請者の二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺構、遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

調査は古墳時代における久米遺跡群南東部域の集落構造解明を主目的とし、松山市埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと1989（平成元）年1月6日に開始した。

## （2）調査組織

調査地 松山市南土居町70番1

遺跡名 開遺跡1次調査地

調査期間 1989（平成元）年1月6日～同年3月7日

調査面積 869.28㎡

調査主体 松山市教育委員会文化教育課

調査担当 調査員 池田 学（平成7年退職）

調査補助員 井上泰三（平成2年退職）

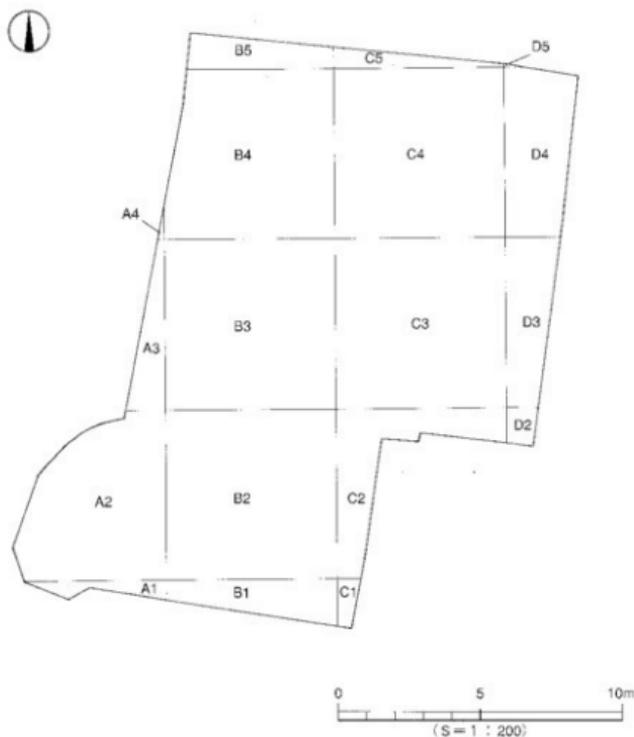


第75図 調査地測量図

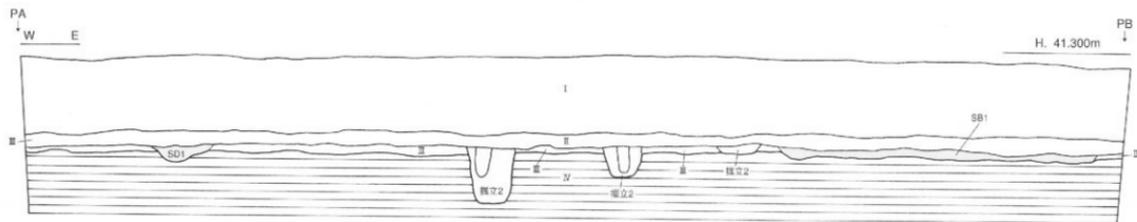
## 2. 層位 (第77～80図)

調査地は松山平野南東部、小野川と重信川に挟まれた氾濫原の中央部に位置する。標高は約41mを測る。調査地は調査以前は既存宅地であった。調査対象面積は869.28 $\text{m}^2$ であるが、廃上高場や駐車場用地のため、最終の発掘調査面積は300 $\text{m}^2$ 余りである(第75図)。

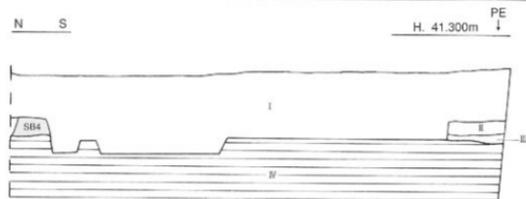
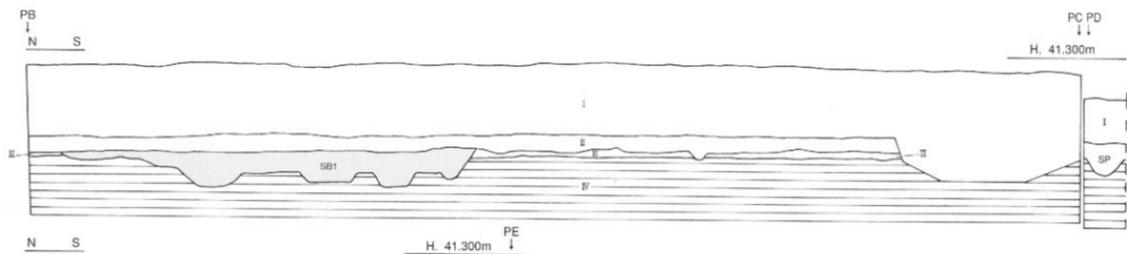
調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黄灰色土、第Ⅲ層黒褐色土、第Ⅳ層黄褐色土である。第Ⅰ層は近現代の造成による客土で、地表下60～80cmまで開発が行われている。第Ⅱ層は旧耕作土で厚さ10～20cmを測る。第Ⅲ層は調査区ほぼ全域にみられ、調査地北東部から南西部に向けて緩傾斜堆積をなす。厚さは北東部で約5cm、南西部では約25cmである。



第76図 調査地区劃図



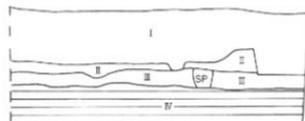
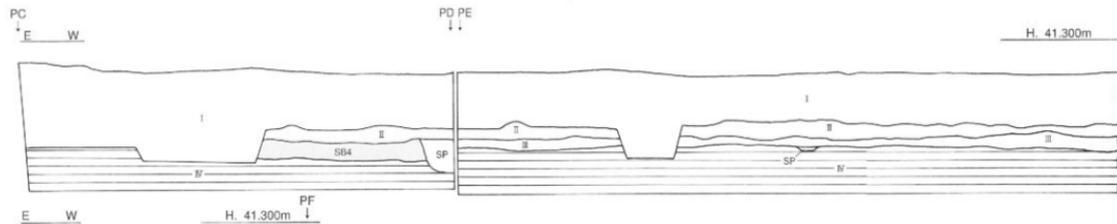
第77回 北壁土層図



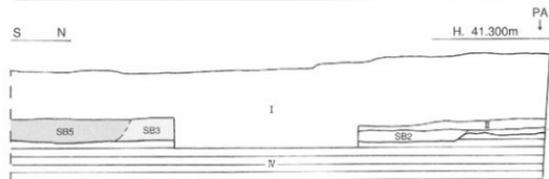
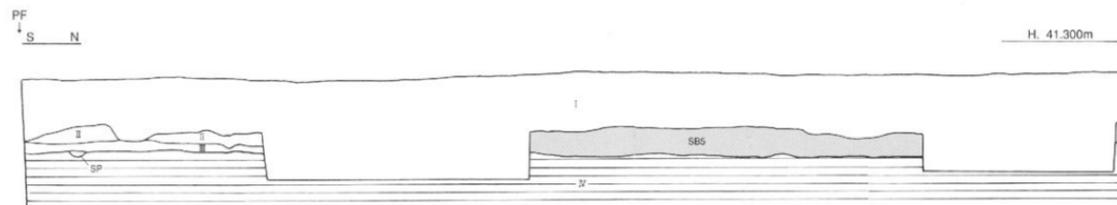
- I 表土
- II 黄灰色土 (水田床土)
- III 黒褐色土
- IV 黄褐色土



第78回 東壁土層図



第79図 南壁土層図



- I 表土
- II 黄灰色土 (水田床土)
- III 黒褐色土
- IV 黄褐色土



第80図 西壁土層図

本層中からは、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。第Ⅳ層は粘性の強い土壤である。第Ⅳ層上面は、本調査における最終の遺構検出面である。

遺構は第Ⅲ層及び第Ⅳ層上面での検出である（第81図）。第Ⅲ層上面では竪穴式住居址4棟（SB1・3・4・5）、掘立柱建物址3棟、土坑1基、溝1条、第Ⅲ層中では竪穴式住居址1棟（SB2）、第Ⅳ層上面では土坑1基、ピット80基を検出した。



第81図 遺構配置図

第Ⅳ層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、南西部に向けて緩傾斜をなす(比高差10cm)。

なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた。各グリッドの呼称名は第76図に記す。また、土層図のポイントPA～PEは、第81図に位置を記載している。

### 3. 遺構と遺物

#### [1] 竪穴式住居址

本調査において竪穴式住居址5棟を確認した。第Ⅲ層上面では4棟(SB1・3・4・5)、第Ⅳ層中では1棟(SB2)を検出した。

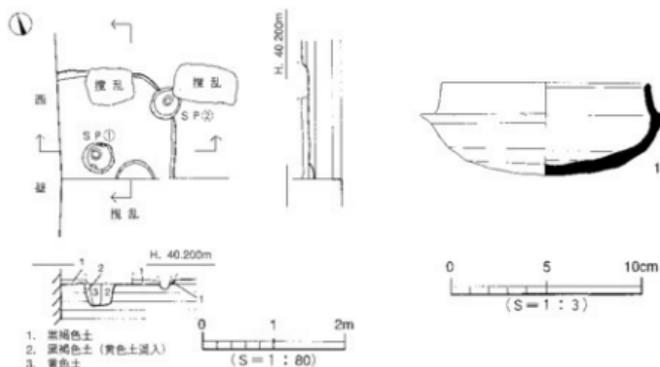
##### SB2 (第82図)

調査区北西隅B4区に位置する。遺構南半部及び北壁の一部は近現代の攪乱により削平され、北東部は暗褐色土を埋土にもつピットに切られている。西半部は調査区外に続くものと判断される。

平面形は方形プランを呈するものと考えられ、規模は現況で東西1.72m、南北1.50m、壁高は約8cmである。床面は比較的平坦であり、埋土は第Ⅲ層と同様の黒褐色土である。

遺物は住居址床面付近から、完形に近い須恵器坏身が1点出土している。

そのほか、住居址床面に2基のピットを検出した。SP①は径45～50cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。SP②は径60cm前後、深さ10cmを測る。埋土は住居址埋土と同様の黒褐色土である。これら2基のピットは埋土や出土遺物からは本住居址に伴うものと判断される。特にSP①はその位置から支柱穴の可能性もある。



第82図 SB2測量図・出土遺物実測図

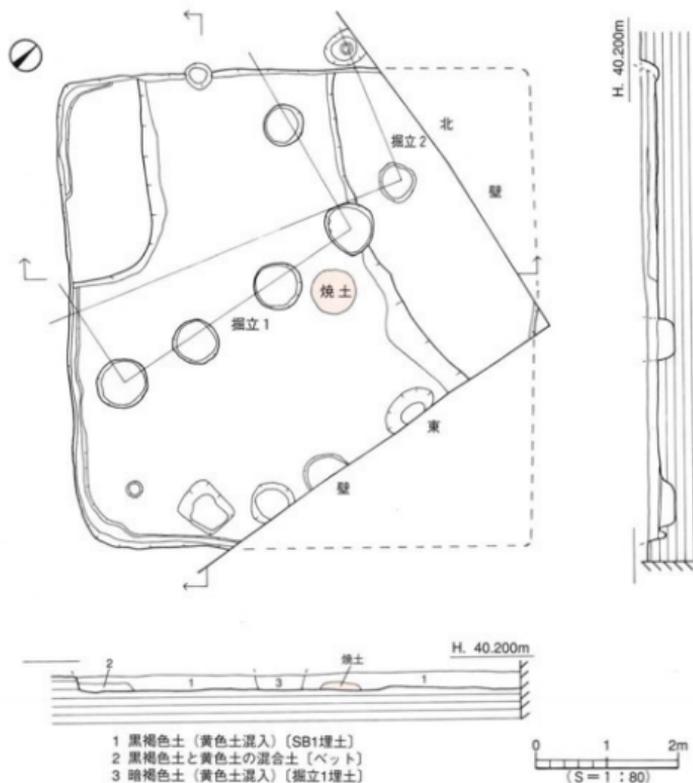
出土遺物 (第82図、図版48)

1は須恵器坏身である。たちあがりには内傾し、端部には内傾する。底部1/2まで回転ヘラケズリ調整を施す。

時期：床面出土の須恵器坏身が時期特定に有効な資料である。坏身は陶邑編年のTK47型式に比定されることから、本住居址の廃棄、埋没時期は古墳時代中期末～後期初頭、6世紀初頭頃と考えられる。

SB1 (第83図、図版44)

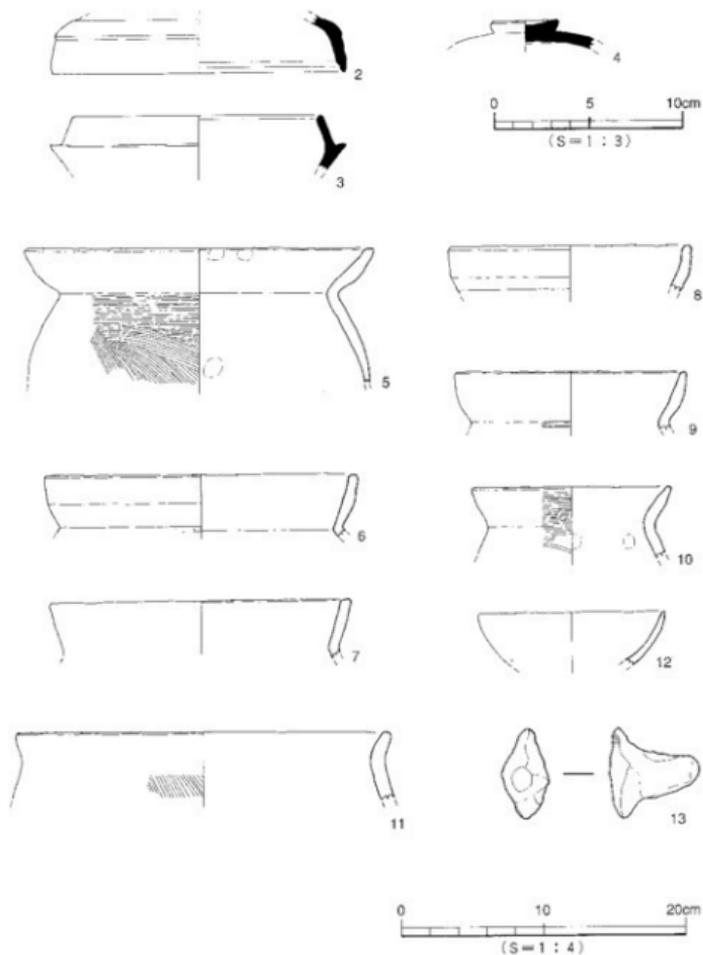
調査区北東部C4～D4区に位置する。遺構中央部は掘立1・2に切られ、東半部は調査区外に続く。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は北西-南東6.60m、北東-



第83図 SB1測量図

南西6.72m、壁高は約22cmを測る。床面は比較的平坦である。埋土は黒褐色土に黄色土が斑点状に混入するものである。

屋内施設は住居址北西部の壁体に沿って幅1.3m、長さ2.5m、高さ20cm前後の貼り付け（黒褐色土と黄色土の混合土を使用）による屋内高床部（ベット状遺構）を検出した。住



第84図 SB1出土遺物実測図

居址北東部では床面がわずかに高くなっており、地山削り出しによるベットの可能性もある。また、住居址中央部東寄りの床面にて径60cmの範囲に焼土を検出した。厚さ8cm前後で、焼土下の床面は焼けていた。

住居址南東部床面及び南西部のベット上面にて、壁体に沿って幅5～15cm、深さ5cm前後、断面「U」字状の溝が検出された。このほか住居址床面にて大小6基のピットを検出したが、支柱穴を特定するには至らなかった。

遺物は埋土中より土師器、須恵器片が散在して出土している。

#### 出土遺物（第84図、図版47）

2は須恵器坏壺である。天井部と口縁部を分ける稜は凹線により表されている。3は坏身である。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。4は高坏の蓋。つまみは中央部が凹む。

5～11は土師器の甕形土器である。口縁部はいずれも内湾し、口縁端部は内傾するもの（5～8）と、丸く仕上げるもの（9～11）がある。12は甕形土器。体部は内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。13は甕形土器の把手である。受部はほぼ水平にのびる。

時期：出土遺物の特徴から、本住居址の廃棄、埋没時期は古墳時代後期中葉～後半、6世紀中葉～後半と考えられる。

#### SB3（第85図、図版44）

調査区中央部西寄り、A3～C4区に位置する。遺構北西部及び南東部は近現代の攪乱により削平され、西半部は調査区外に続くものと考えられる。掘立3（6世紀後半）に切られ、SB5と重複する。切り合いよりSB3がSB5に先行する。

平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長6.7m、東西検出長4.7m、壁高は約18cmを測る。床面は比較的平坦である。埋土は黒褐色土層である。

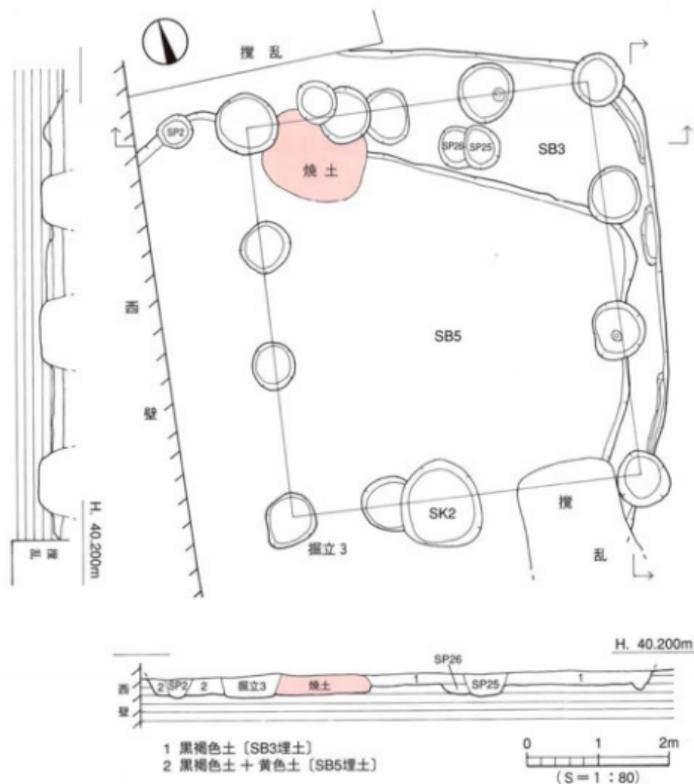
住居址床面にて3基のピットを検出したが、本住居址に伴うものかは不明である。また、住居址壁体に沿って幅10cm、深さ5cm、断面「U」字状の溝が部分的に検出された。

遺物は埋土中及び床面付近にて土師器、須恵器小片が数点出土している。

#### 出土遺物（第86図）

14～17は須恵器坏壺である。14・15は床面付近出土品である。14・15は天井部と口縁部を分ける稜は凹線により表されている。16・17は稜は消失している。18・19は須恵器坏身である。18はたちあがりは内傾し、端部は内傾する凹面をなす。19はたちあがりは短く内傾し、受部は上・外方にひねり出されている。20は甕の口縁部片である。頸部に波状文を施す。21は甕の口縁部である。口縁端部は断面長方形状を呈する。

22～24は土師器甕である。口縁部はいずれも内湾し、口縁端部は丸みをもって内傾する。22・24は口縁中位で屈曲部をもつ。25は土師器甕である。体部は内湾し、口縁部は尖り気味に丸く仕上げる。



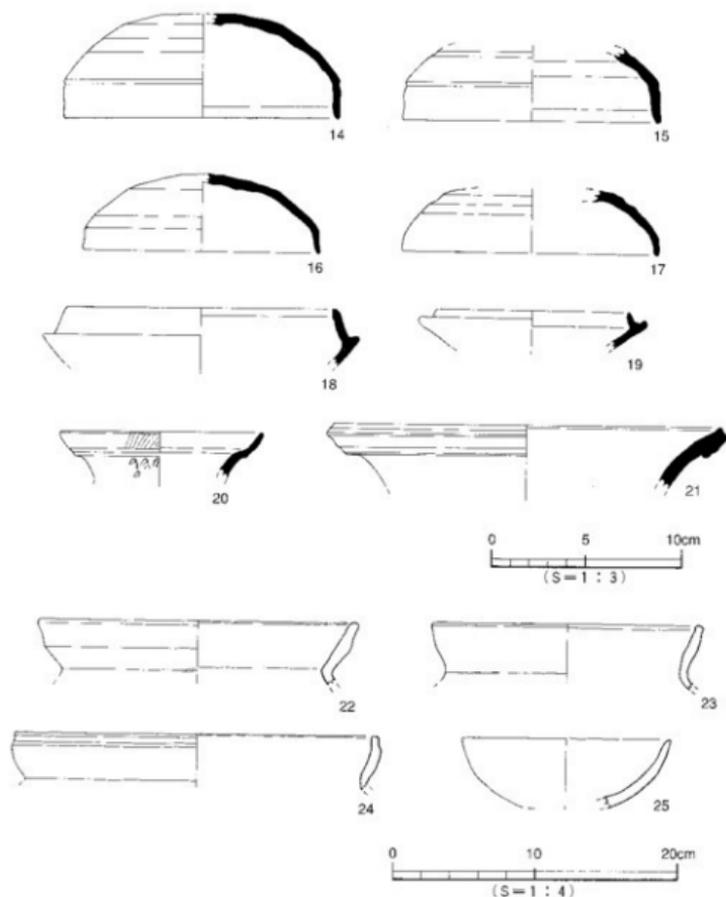
第85図 SB3測量図

時期：出土した遺物には多少の時期差がみられる。これは後述するSB5あるいは掘立3（古墳後期後半）の遺物が混在している可能性が高い。床面付近出土の須恵器坏蓋が時期特定に有効な資料である。須恵器の特徴から、本住居址の廃棄、埋没時期は古墳時代後期前半、6世紀前半頃と考えられる。

#### SB4（第87図、図版45）

調査区南東部、B2～C3区に位置する。住居址北東部及び南西コーナーは近現代の掘乱により削平され、東半部は調査区外に続く。

平面形は方形を呈するものと考えられ、規模は北東-南西6.3m、北西-南東2.7m、



第86図 SB3出土遺物実測図

壁高は約20cmを測る。床面は比較的平坦である。埋土は黒褐色土に黄色土が斑点状に混入するものである。床面にて大小6基のピットを検出したが、本住居址に伴うものかは不明である。

そのほか、住居址南西部床面にて焼土を検出した。70×100cmの範囲に広がっており、厚さは25cm前後である。床面は10～15cm程度掘りくぼめられており、炉として使用されたものと考えられる。

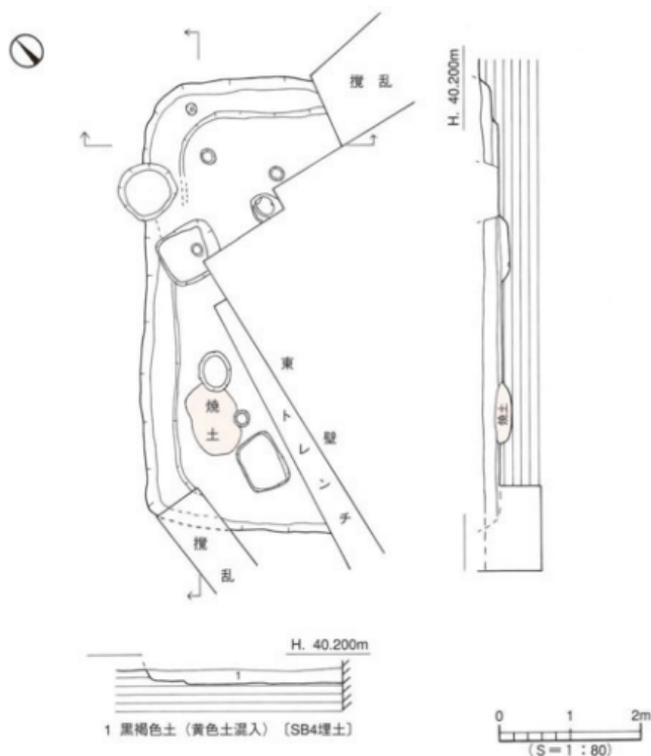
住居址南壁部分を除き、壁体に沿って、幅50cm前後、高さ5～7cmのベット状遺構（地山削り出し）が付設されている。

遺物は埋土中にて須恵器、土師器片が散在して出土している。

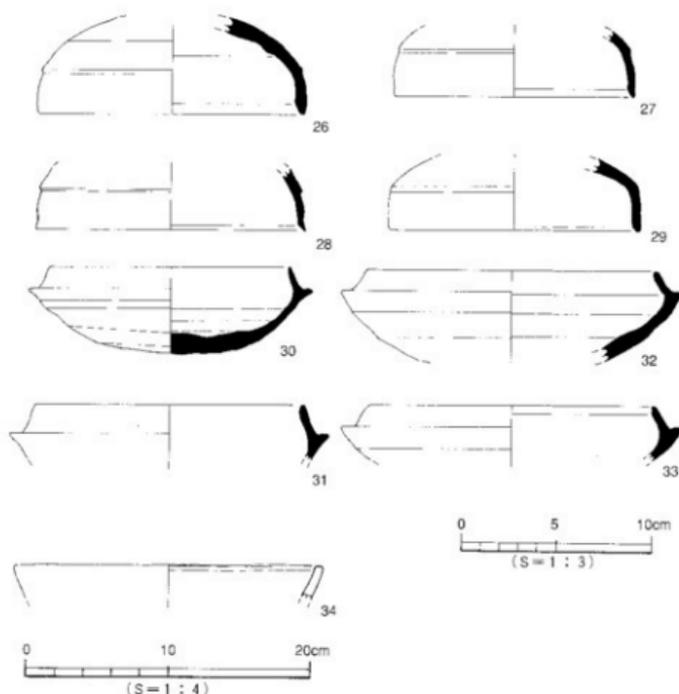
出土遺物（第88図、図版48）

26～29は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部を分ける稜は凹線により表されている。口縁端部はすべて内傾する。30～33は須恵器坏身である。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げるもの（30～32）と、わずかに内傾するもの（33）がある。34は土師器甕の口縁部片である。口縁端部はわずかに内傾する。

時期：出土した須恵器は陶邑編年のTK10型式におさまるものと思われる。よって、本住居址の埋没時期は古墳時代後期前半、6世紀前半～中葉に比定されよう。



第87図 SB4測量図



第88図 SB4出土遺物実測図

SB 5 (第89図、図版44)

調査区西壁中央部、A 3～B 4 区に位置する。遺構北東部及び東壁中央部は近現代の擾乱により削平され、南西部は調査区外に続く。南東隅及び北西隅は暗褐色土を埋土にもつピットに切られている。また、SB 5は掘立3及び土坑SK 2に切られ、SB 3を切っている。

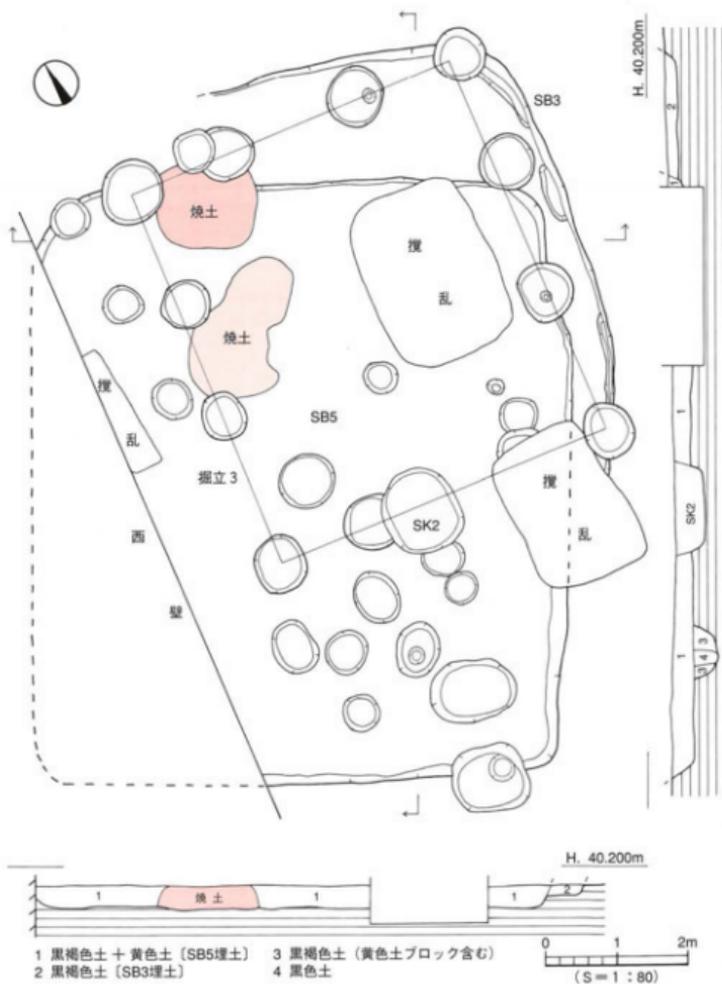
平面形はやや南北に長い方形プランを呈し、規模は北東-南西8.4 m、北西-南東7.5 m、壁高は35 cm前後を測る。住居址床面はわずかに凹凸があるが、比較的平坦である。埋土は黒褐色土に黄色土が斑点状に混入するものである。

床面にて大小15基のピットを検出したが、主柱穴は特定できなかった。炉や周壁溝等の施設は未検出である。

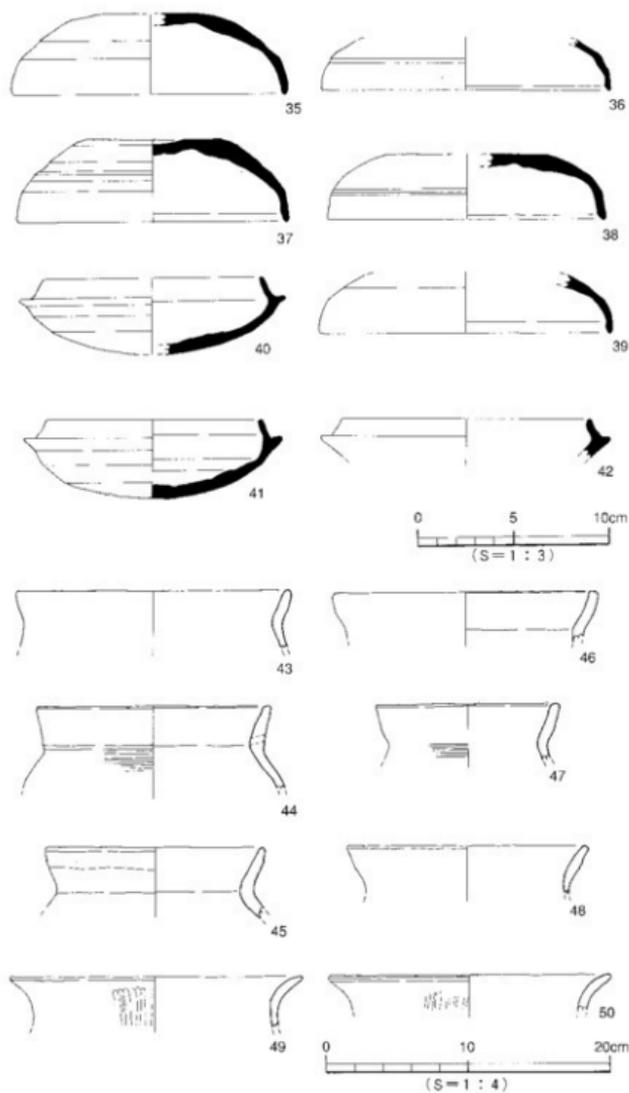
住居址北壁中央部西寄り及び北西部床面にて焼土を検出した。北壁にて検出した焼土は1.2×1.4 mの範囲で、厚さ25 cm前後を測る。検出状況や断面観察によりカマドと考えら

れるが、形状は確認できなかつた。また、北西部床面検出の焼土は1.3×2.1mの範囲に分布しており、厚さ5cm前後を測る。焼土下の床面に焼けた痕跡はみられなかつた。

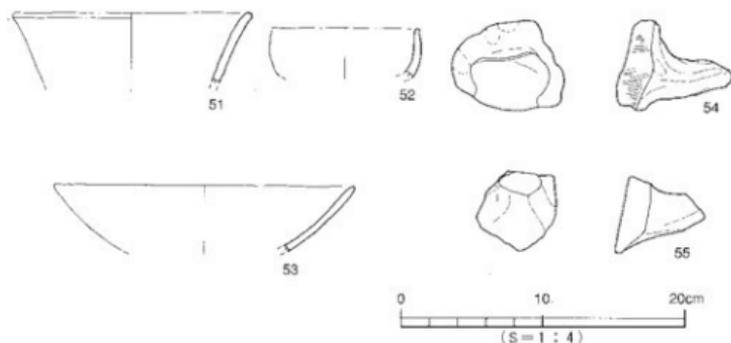
遺物は埋土中及び床面付近から土師器、須恵器片が散在して出土している。



第89図 SB5測量図



第90圖 SB5出土遺物実測図(1)



第91図 SB5出土遺物実測図(2)

## 出土遺物 (第90・91図、図版48・49)

35～39は須恵器坏蓋である。35・37・38は扁平な天井部からなだらかなカーブを描き、口縁部にいたる。36・38は天井部と口縁部との境界は凹線により表されている。40～42は須恵器坏身である。たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸く仕上げている。

43～50は土師器甕である。口縁部はやや内湾するもの(43～48)と、外反するもの(49・50)がある。口縁端部は44・47はわずかに内傾し丸みのある面をもつが、これら以外は丸く仕上げている。51は壺である。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げている。52は碗。体部は内湾し、口縁部は直立する。53は高坏の坏部片である。54・55は瓶の把手である。受部はほぼ水平にのび、受部端は尖る。

時期：出土した遺物は、6世紀中葉から後半の特徴を示している。よって本住居址の廃棄、埋没時期は6世紀中葉～後半に比定されよう。

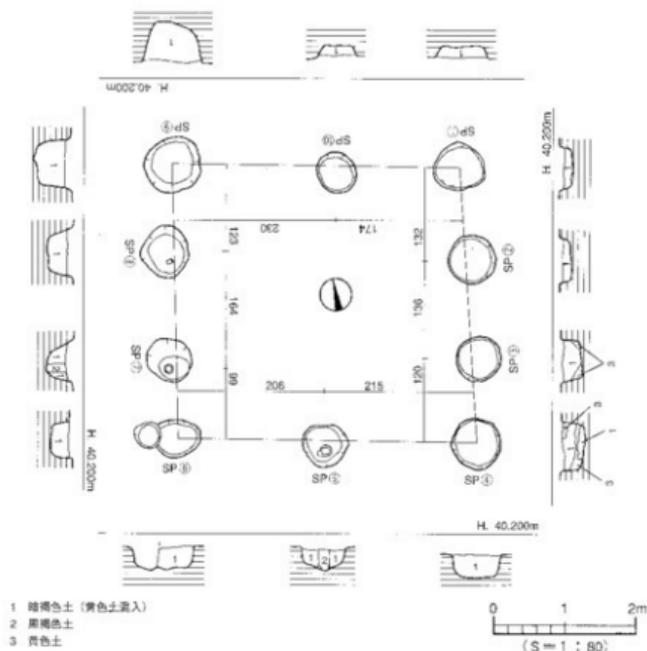
## 〔2〕掘立柱建物址

本調査において確認した掘立柱建物址は3棟である。すべて第Ⅲ層上面での検出である。

## 掘立1 (第92図、図版45)

調査区北東部、C4区に位置する。SB1及びSK1を切り、掘立2に切られる。東西棟で、梁行2間、桁行3間の規模をもつ側柱だけの建物址である。主軸方位はN-79°-Wである。梁行3.86m、桁行4.04～4.21mを測り、台形に近い平面形を呈する。

柱穴掘り方は円形または輪円形を呈し、径52～80cm、深さ18～60cmを測る。柱痕はSP⑤・⑦の2基検出され、径12～18cm、深さ26～38cmを測る。掘り方埋土は暗褐色土に黄色土が斑点状に混入するものを基測とするが、SP③・④の2基の柱穴内には黄色土がブロック



第92図 掘立1測量図

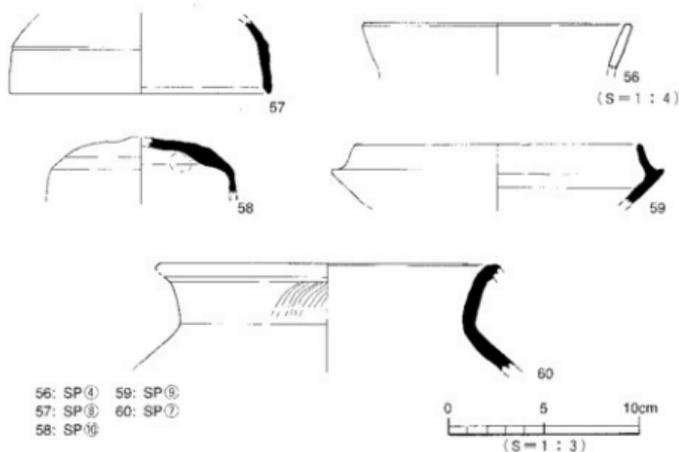
状に混入している。

遺物は土師器、須恵器小片が少量出土している。図化するものを5点、第93図に掲載した。

#### 出土遺物 (第93図)

56はSP④出土の土師器甕の口縁部片である。口縁端部は丸みを帯びる。57はSP⑧出土の須恵器坏蓋である。大井部と口縁部の境界は凹線により表されている。58はSP⑩出土の短頸壺の蓋である。59はSP⑨出土の須恵器坏身。ちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。60はSP⑦出土の須恵器甕の口頸部である。口縁部は外反し、口縁端部は欠損している。

時期：出土した遺物の特徴と、SB1 (6世紀中葉～後半)を切ることから、掘立1は6世紀後半以降の造営と考えられる。



第93図 掘立1出土遺物実測図

#### 掘立2 (第94図)

調査区北東部、B4～C4区に位置する。建物東側の柱穴は未検出である。SB1及び掘立1を切っている。梁行3間、桁行3間の規模をもつ個柱だけの建物址である。主軸方位はN-69°-Wである。梁行5.09～5.16m、桁行4.98～5.27mを測り、ほぼ方形に近い平面形を呈する。

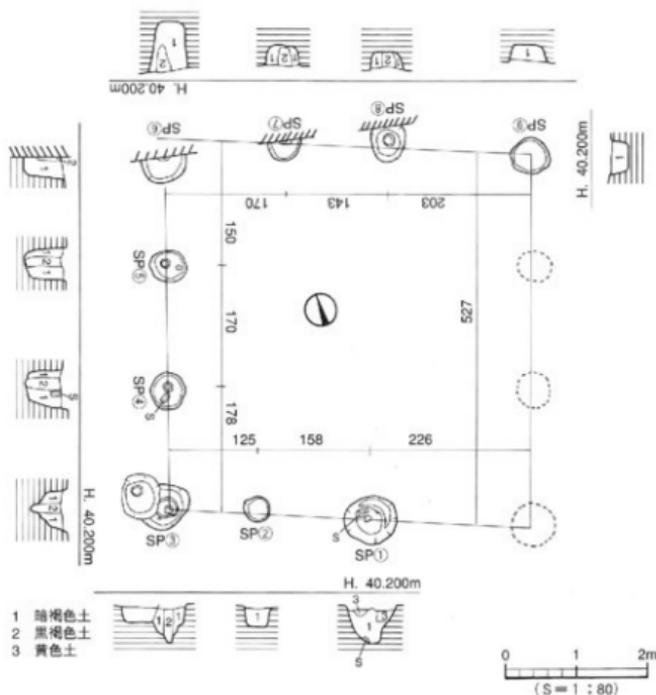
柱穴掘り方は円形または楕円形を呈し、径38～77cm、深さ30～72cmを測る。柱痕はSP②・⑨を除く柱穴で確認され、径16～20cm、深さ22～48cmを測る。掘り方埋土は暗褐色土を基調とするが、SP①内には黄色土がブロック状に混入している。またSP①底面には径15cm前後の角礫を検出した。そのほか、SP④の埋土上位にて径20cm前後の礫が検出された。

遺物は土師器の細片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で明確な時期判断はしかねるが、SB1及び掘立1を切ることから、古墳時代後期後半、6世紀後半以降の建物址であろう。

#### 掘立3 (第95図、図版46)

調査区中央西寄り、B3～C4区に位置する。SB3及びSB5と重複するが、切り合いより掘立3はこれらの住居址より後出する。建物南側の柱穴はSK2及び近現代の攪乱により一部削平されている。

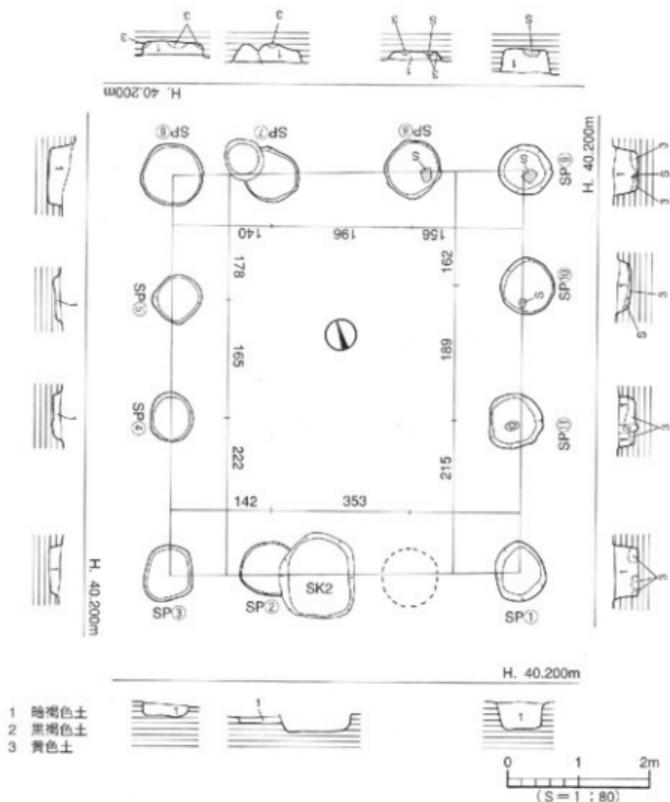


第94図 掘立2測量図

梁行3間、桁行3間の規模をもつ側柱だけの建物址である。主軸方位は $N-74^{\circ}-W$ である。梁行長4.92m、桁行長5.65mを測り、やや長方形に近い平面形を呈する。

柱穴掘り方は円形または楕円形を呈し、径60~80cm、深さ12~40cmを測る。柱痕はSP①で検出され、径12~20cm、深さ30cmを測る。SP⑧・⑨・⑩の底面には径20cm前後、厚さ3cm程度の扁平な石が検出された。掘り方埋土は暗褐色土を基調とするが、SP①・⑥~⑩の7基の柱穴内には黄色土がブロック状に混入している。

遺物は土師器、須恵器小片が数点出土している。

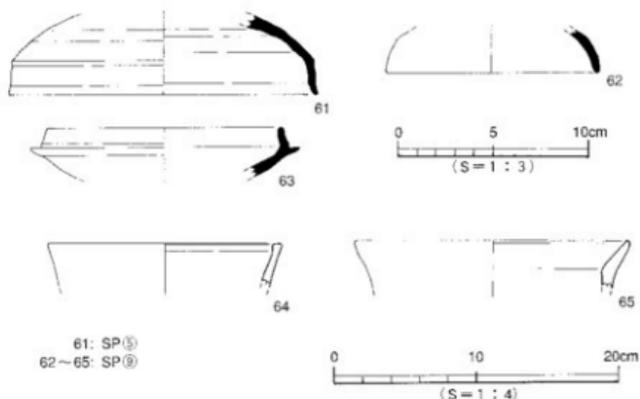


第95図 掘立3測量図

出土遺物 (第96図)

61はSP⑤、他はSP⑨出土品である。61・62は須恵器坏蓋である。61は天井部と口縁部の境界は段差による稜をもち、口縁端部は内傾する。62は稜は消失している。63は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾する。64・65は土師器甕である。64は口縁端部は内傾する。65は口頸部境内面に稜をもつ。

時期：出土した遺物の特徴と、SB3及びSB5を切ることから、掘立3は古墳時代後期後半、6世紀後半頃の建物址と考えられる。



第96図 掘立3出土遺物実測図

## 〔3〕土坑

本調査において土坑2基を確認した。SK1は第Ⅲ層上面、SK2はSB5検出時に確認したものである。

## SK1 (第97図)

調査区北壁中央部付近、C4区に位置する。土坑南側は掘立1柱穴及び暗褐色土（黄色土が混入）を埋土にもつ大小2基のピットに切られている。

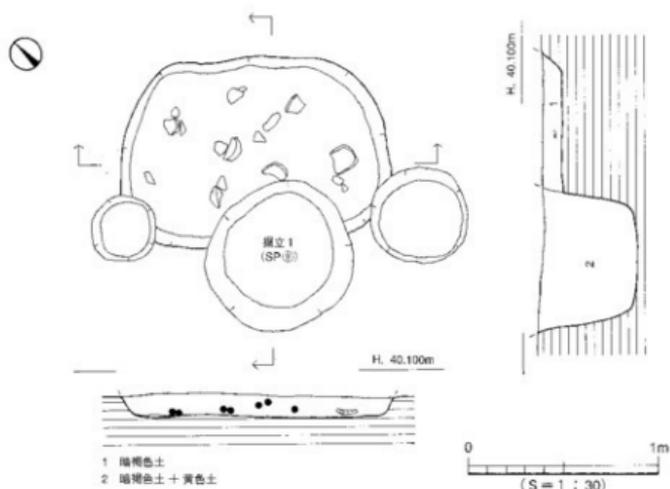
平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長さ1.42m、幅1.0m、深さは約10cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。床面はほぼ平坦であり、壁体はゆるやかに立ち上がる。

遺物は床面付近及び埋土中から土師器、須恵器のほか石庖丁が1点出土している。

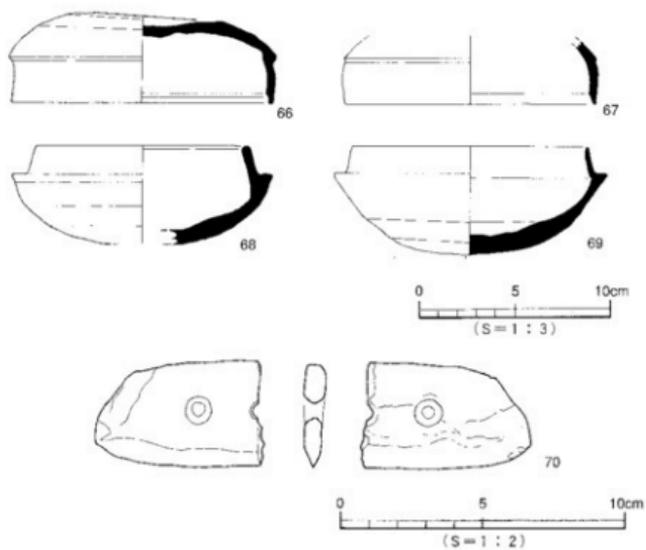
## 出土遺物 (第98図、図版50)

66・67は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部の境界は丸みのある断面三角形の稜をもつ。口縁端部は内傾する。68・69は須恵器坏身である。たちあがりは内傾し、端部はわずかに内傾するもの(68)と、丸く仕上げるもの(69)である。70は緑泥片岩製の石庖丁である。

時期：出土した須恵器が6世紀前半頃の特徴を示す。掘立1に切られることと出土した遺物から、本上坑は6世紀前半頃の遺構と考えられる。



第97図 SK1測量図

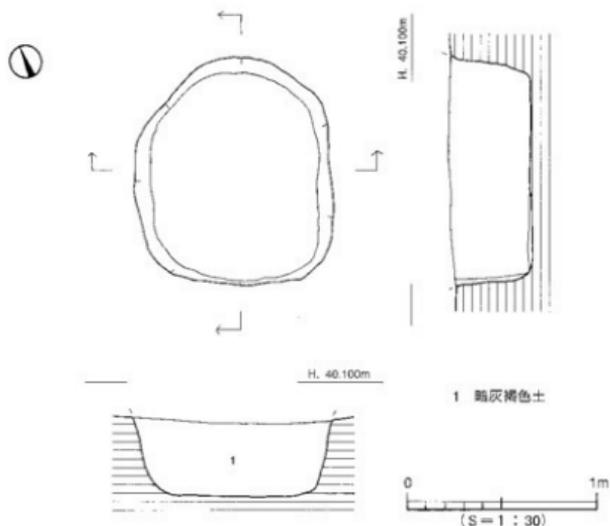


第98図 SK1出土遺物実測図

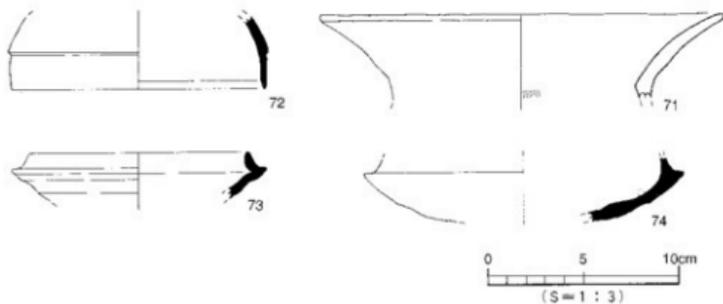
SK2 (第99回)

調査区中央やや西寄り、B3区に位置する。SB5検出時に確認した土坑である。SB5及び掘立3柱穴を切っている。

平面形は不整の隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.2m、幅1.0m、深さ約40cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、埋土は暗灰褐色土単層である。床面は平坦で、壁体はほぼ垂直に立ち上がる。



第99図 SK2測量図



第100図 SK2出土遺物実測図

遺物は弥生土器、土師器、須恵器が埋土中に散在して出土している。

#### 出土遺物（第100図）

71は弥生土器の壺の口縁部である。泥入品。72は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部の境界は段差により表される。73・74は須恵器坏身片である。73はたちあがりは短く内傾し端部は尖る。

時期：出土した遺物には時期差がみられるが、SB5や掘立3に後出することから、本土坑は古墳時代後期後半、6世紀後半以降のものであろう。

### [4] 溝

本調査では溝を1条確認した。第Ⅳ層上面での検出であるが、調査区北壁の上層観察により、第Ⅲ層上面から掘り込まれたものである。

#### SD1（第81図）

調査区北西部、B4・5区で検出した南北方向の溝である。溝の南側及び中央部付近は近現代の攪乱により削平され、北側は調査区外に続く。形状はわずかに蛇行している。規模は幅40～65cm、検出長2.5m、深さは約15cmを測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は暗灰褐色土単層である。溝底は北から南に向けてわずかに傾斜している。溝内からの遺物の出土はなく、溝の性格は不明である。

時期：出土遺物がなく、時期判断はしかねるが、第Ⅲ層上面から掘り込まれていることから概ね、古墳時代後期以降の遺構と考えられる。

### [5] その他の遺構と遺物

本調査において80基のピットと遺物包含層を検出した。ピットは暗褐色土、暗褐色土と黄色土の混合土、黒褐色土を埋土にもつ3種類がある。いずれのピット内からも小片ではあるが、古墳時代の上師器、須恵器が出土している。

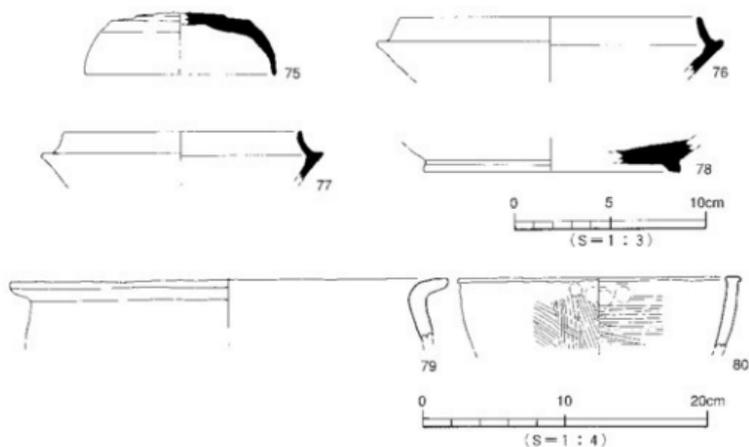
第Ⅲ層中からは弥生土器、土師器、須恵器が少量ではあるが出土した。そのほか、出土地点や層位が不明な遺物が数点あり、ここでは地点不明出土遺物として記載する。

#### 第Ⅲ層出土遺物（第101図、図版50）

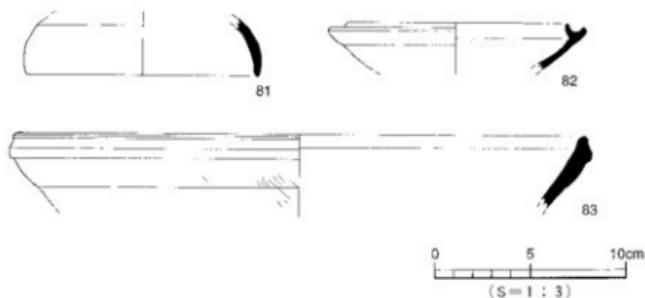
75は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部を分ける稜はなく、天井部外面に回転ヘラ切り痕を残す。76・77は須恵器坏身である。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。78は高台の付く坏である。79・80は弥生土器。79は壘形土器で逆「L」字形の口縁部をもつ。80は鉢形土器。体部は内湾し、口縁端部は肥厚する平坦面をなす。内外面共に丁寧な刷毛目調整を施す。

## 地点不明出土遺物 (第102図)

81は須恵器坏蓋である。82は須恵器坏身で、受部は上外方にひねり出されている。83は東播系のこね鉢である。口縁端部は上下方に肥厚し、端面はナデ円む。



第101図 第三層出土遺物実測図



第102図 地点不明出土遺物実測図

## 4. 小 結

本調査で検出した遺構や遺物は、古墳時代のものが主体をなす。遺構は竪穴式住居址5棟、掘立柱建物址3棟、土坑2基を確認した。

まず、調査地内に住居址が出現するのは遅くとも古墳時代中期末～後期初頭、6世紀初頭頃である。SB2は近現代の擾乱による削平が著しく全容は不明だが、方形プランを呈する当該期の竪穴式住居址と考えられる。

6世紀前半以降、調査地内に住居址が増加する。6世紀前半、SB3が調査地中央部に出現する。近現代の擾乱やSB5と重複することから、全容は判断しかねるが、一辺6mを超える方形竪穴式住居址である。壁体に沿って周溝が巡る。SB3とあまり時期を隔てることなく、SB3の南東部にSB4が出現する。遺構東半部は調査区外に続くため全容は判断しかねるが、一辺6mを超える方形竪穴式住居址と考えられる。壁体に沿って幅50cm前後の地山削り出しにより屋内高床部を付設する。

次いで6世紀中葉～後半になると、新たに2棟の住居址が出現することになる。両者共に平面形は方形プランを呈する。SB1は一辺6.6m前後を測る住居址で、部分的な屋内高床部を2ヶ所に付設する。SB1と時期をあまり前後せずSB5が調査区中央部に出現する。一辺7.5mを測る住居址で、本調査検出の住居址のうち、最も大型のものである。北壁中央部付近に造りつけのカマドを付設している。

これら5棟の住居址はいずれも平面形が方形を呈していることや、規模的にみると、6世紀前半から中葉、後半にかけてやや大型化している点など、松山平野における古墳時代住居の形態と対応する。注目すべきは6世紀前半以降に出現した住居址は方位を同じにしている点である。SB1・4・5は規模的にみるとやや違いがみられるが、方位を北東-南西方向にとっていることは興味深い事象である。

次に、掘立柱建物址が調査区内に出現するのは、竪穴式住居址が埋没した後、つまり6世紀後半頃と考えられる。掘立1は2×3間の建物址でSB1に後出する。その後、掘立2、掘立3が出現することになる。両者は3×3間の建物址である。掘立3は切り合いよりSB3・SB5に後出する。掘立2については出土遺物がなく明確な時期判断はしかねるが、掘立1に後出することや、柱穴埋土や建物方位が掘立3と類似することなどから、掘立3とはほぼ同時期の建物址と考えられる。

これら建物址のほか、古墳時代の遺構に土坑2基があげられる。両者共に平面形は隅丸長方形を呈する。SK1は掘立1に先行する時期のもので、出土遺物から6世紀前半頃の遺構と考えられる。一方、SK2はSB5及び掘立3に後出することや出土遺物から6世紀後半以降の遺構と判断される。

本調査では古墳時代の遺構や遺物のほかに、わずかではあるが、遺構内や第Ⅲ層中から弥

生土器及び古代の遺物が出土している。明確に時期比定しうる遺構は未検出であるが、これらの遺物は、当地を含め周辺地域に既期の集落の存在を示唆する資料である。

本論では、住居址の形態や変遷について簡単にまとめを行った。調査地内では古墳時代中期末から後期後半までの約1世紀の間、継続的に集落が営まれていたことが判明した。竪穴式住居址は古墳時代中期末から後期中葉ないし後半まで存続する。形態は平面形が方形を呈し、規模は時期が下るにつれ大型化する傾向がみられた。その後、6世紀後半以降、掘立柱建物が増え、竪穴式住居にかわり、調査地内に出現する。つまり、6世紀後半を境にして、住居構造が竪穴から掘立へと移行している。

今回の調査結果は当地区と周辺地域の古墳時代集落の構造や変遷を考えるうえで、貴重な資料となるものである。今後、周辺地域の調査により、竪穴から掘立への移行の時期も含め、古墳時代集落の広がりや構造、変遷を追究していかねばならないであろう。

表27 遺構の変遷

	5c末～6c初期	6c前半		6c中葉	6c後半
竪穴式住居址	SB2+	SB3→	SB4→ (ベツ付設)	SB1 (ベツ付設)	→SB5 (カマド付設)
掘立柱建物址					掘 ⅴ1 → 掘 立2 (2×3間) 掘 ⅴ3 (3×3間)

遺構・遺物一覧（作成者：宮内慎一）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び視察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物視察表の各記載について。

測量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 上器の各部位名称を略記。例) □→口縁部、胴上→胴部上位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4)→「1~4mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表28 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周壁溝	備 考
						高床	土坑	炉	カマド		
1	古墳後期中葉~後半	方 形	6.72×6.60×0.22	44.35		○				○	掘りこに切られる。 焼土あり
2	古墳後期初葉	隅丸方形	1.72×1.50×0.08	2.58							
3	古墳後期前葉	隅丸方形	(6.70)×(4.70)×0.18	31.89						○	掘りこ・SB3に切られる。
4	古墳後期前半~中葉	方 形	6.30×(2.70)×0.20	17.01		○		○			焼土あり
5	古墳後期中葉~後半	方 形	8.40×(7.50)×0.35	63.00						△	掘りこ・SK2に切られる。 SK3を切らる。焼土あり。

表29 掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規 模 (間)	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	備 考	時 期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	東西	2×3	4.21	2.06・2.15	3.86	1.23・1.64・0.99	16.25	SB1, SK1を切り 掘りこに切られる。	古墳後期後半
2	東西	3×3	5.16	2.03・1.63・1.70	4.98	1.50・1.70・1.78	25.70	SB1, 掘りこを切らる。	古墳後期後半
3	北北	3×3	5.65	1.78・1.65・2.22	4.92	1.56・1.96・1.40	23.80	SK3, SB2を切り SK2に切られる。	古墳後期後半以降

表30 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C4	隅丸長方形	混合形状	1.42×1.00×0.10	暗褐色土	土師・須恵・石器	古墳後期前半	掘りこに切られる。
2	B3	隅丸長方形	混合形状	1.26×1.00×0.40	暗灰褐色土	弥生・土師・須恵	古墳後期後半以降	掘りこ・SD5を切らる。

遺物観察表

表31 溝一覽

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B4・3	レンズ状	250×0.40×0.15	埋戻土		古墳後期以降	墓室周土層からの掘り込み

表32 SB2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	平足	口径 10.8 器高 4.9	口縁部は、たれあがり内傾し、 器底は内傾する。5等分15等分の び、2部間に2部間の間隔をもつ。	①白磁ナテ ②黒磁ヘラタズリ 1/2	白磁ナテ	灰白色 灰白色	Ⅰ-表(1-2) ○		48

表33 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	埴輪	口径(15.2) 残高 3.0	口縁部は直下し、口縁部は内 面に流線状の内みあり。わず かに丸みのある段をもつ。	①黒ヘラタズリ	白磁ナテ	青灰色 青灰色	Ⅰ(1) ○		
3	埴輪	口径(12.8) 残高 2.9	たれあがり内傾し、乳首は太く あがり。底部はやや内傾し、 び、受胎部は2部間の間隔をもつ。	白磁ナテ	白磁ナテ	青灰色 青灰色	Ⅱ ○		
4	蓋	残高 1.1	有蓋高の蓋。中央部が 円形扁平なつまみをもつ。	白磁ナテ	白磁ナテ	灰色 灰色	Ⅰ(1-3) ○		
5	蓋	口径(24.0) 残高 9.0	内傾する口縁部。口縁部は内 面に流線状の内みあり。外 面に2部間の間隔をもつ。	①白磁ナテ ②ハテ (5-7cm/1m)	①白磁ナテ ②ハテ (5-7cm/1m)	乳白色 乳白色	Ⅰ-表(1-5) ○		47
6	蓋	口径(21.0) 残高 4.2	内傾する口縁部。口縁部は内 面に流線状の内みあり。口 縁部は2部間の間隔をもつ。	①白磁ナテ ②ハテ	白磁ナテ	乳白色 乳白色	Ⅰ-表(1-5) ○		47
7	埴輪	口径(20.7) 残高 3.8	口縁部はわずかに内傾し、 流線状の内みあり。口縁部は 2部間の間隔をもつ。	ナテ	ナテ	乳白色 乳白色	Ⅰ-表(1-3) 金 ○		
8	埴輪	口径(16.0) 残高 4.0	口縁部は内傾し、流線状の内 みあり。口縁部は2部間の 間隔をもつ。	①白磁ナテ ②ハテ	ナテ	乳白色 乳白色	Ⅰ-表(1-2) ○		47
9	埴輪	口径(16.5) 残高 3.3	内傾する口縁部。口縁部は 流線状の内みあり。口縁部は 2部間の間隔をもつ。	白磁ナテ	白磁ナテ	乳白色 乳白色	Ⅰ-表(1-3) ○		
10	埴輪	口径(13.7) 残高 4.7	内傾する口縁部。口縁部は 流線状の内みあり。口縁部は 2部間の間隔をもつ。	ハテ (3-5cm/1m)	ナテ	乳白色 乳白色	Ⅰ-表(1-2) ○		47
11	埴輪	口径(25.0) 残高 4.6	広く内傾する口縁部。口縁部は 流線状の内みあり。口縁部は 2部間の間隔をもつ。	①白磁ナテ ②ハテ	マメツ	乳白色 乳白色	Ⅰ(1-3) 砂吹き多し ○		47
12	埴輪	口径(12.0) 残高 3.8	口縁部は直下し、口縁部は内 面に流線状の内みあり。口 縁部は2部間の間隔をもつ。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	○		
13	埴輪	残高 6.4	腹の扁平。底部は水平に 長くのびる。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	Ⅰ-表(1) ○		47

表34 SB 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
14	坏蓋	口径(14.3) 残高 4.4	丸く窪みのある天笠形。おすかに壁をもつ。口縁縁部は内底する不明瞭な段をもつ。	②回転ヘラケズリ 1/2 ③回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1-5) 砂粒多し ○		
15	坏蓋	口径(13.3) 残高 3.8	天笠部と口縁部の境界はわずかに壁をなす。口縁縁部は内底する不明瞭な段をもつ。	②回転ヘラケズリ ③回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1-4) ○		
16	坏蓋	口径(12.2) 残高 4.0	丸みのある天笠部。天笠部と口縁部の境界はわずかに壁をもつ。口縁縁部は丸く仕上げられる。	②回転ヘラケズリ 1/2 ③回転ナデ	回転ナデ	赤色・茶色 青灰色	長(1) ○		
17	坏蓋	口径(13.3) 残高 3.5	やや扁平な天笠部。天笠部と口縁部中央付近は消失している。口縁縁部は丸く仕上げられる。	②回転ヘラケズリ 1/3 ③回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
18	坏蓋	口径(13.8) 残高 3.0	たちあがりは内底し。口縁部は内底する。全面にやや外方へのび交差した筋の跡あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ○		
19	坏身	口径(30.0) 残高 1.8	たちあがりには窪く内底し。縁部は突出。受胎は内方にひねりあがっている。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		自然釉
20	蓋	口径(10.4) 残高 2.4	口縁部はやや外反し。縁部は丸く仕上げられる。蓋縁外面に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
21	蓋	口径(20.0) 残高 3.3	口縁部は外反し。口縁縁部は断面が球形をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
22	蓋	口径(22.0) 残高 3.1	内底する口縁部。口縁中央で黒白の段をもつ。口縁部は丸く仕上げられる。	ハケ	マメツ	乳白色 乳白色	石(1-2) 砂粒・金 ○		
23	蓋	口径(18.5) 残高 4.1	内底する口縁部。縁部に丸く仕上げられる。口縁部縁部外面に不明瞭な段をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石(1-2) 砂粒多し ○		
24	蓋	口径(25.6) 残高 4.4	内底する口縁部。口縁上で段をなした段。蓋正す。口縁部は断面をなす。口縁部外面に波状文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石(1) 砂粒多し ○		
25	蓋	口径(14.5) 残高 4.8	縁部は内底し。口縁縁部は突り角縁に丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	砂粒多し ○		

表35 SB 4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
26	坏蓋	口径(13.7) 残高 3.1	丸みのある天笠部。断面は内底の段をもつ。口縁縁部内面は与保する段をなす。	②回転ヘラケズリ 1/2 ③回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 砂粒多し ○		
27	坏蓋	口径(13.9) 残高 3.2	小形。断面は内底のシャープな段をもつ。口縁部は内底して下がり。口縁縁部は内底する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1-2) ○		
28	坏蓋	口径(12.4) 残高 3.5	丸みのある断面一角形の不明瞭な段をもつ。口縁縁部内面は与保する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	茶褐色・青灰色 青灰色	長(1-5) ○		
29	坏蓋	口径(13.0) 残高 3.8	天笠部と口縁部の境界は不明瞭な段をもつ。口縁縁部内面は内底する不明瞭な段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
30	坏身	口径 12.5 残高 4.5	口縁部はたちあがり内底し。縁部は丸く仕上げられる。全面に外方へのび交差した筋の跡あり。	②回転ナデ ③回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石(1-5) ○		48

遺物観察表

SB4出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	流量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	坏身	口径(13.9) 残高 2.9	たちあがり内側し、縁部は丸く仕上げる。文部は中央のび、交差部は縁部を囲む。	①紅ナテ	①紅ナテ	黄灰色 黄灰色	石系(1-4) 砂粒多し ○		
32	坏身	口径(15.0) 残高 4.7	たちあがり内側し、縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。	①紅ナテ ②紅ヘラナズリ	①紅ナテ	青灰色 黄灰色	石系(1-3) ○		
33	坏身	口径(14.7) 残高 2.4	たちあがり内側し、縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。	①紅ナテ ②紅ヘラナズリ	①紅ナテ	灰色 灰色	長(1)		
34	甕	口径(21.3) 残高 2.4	内湯気味の口縁部。両部は平ら面をなす。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石系(1-2) ○		

表36 SB5出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	流量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
35	坏蓋	口径(14.3) 残高 3.4	扁平な天井部。天井部と口縁部の境目は凹線による。口縁縁部は内側する段をなす。	①紅ヘラナズリ 1/3 ②紅ナテ	①紅ナテ	地灰色・灰色 灰色	石系(1-2) 砂粒多し ○		
36	坏蓋	口径(14.9) 残高 2.6	天井部と口縁部の境目は凹線状の凹みによる。口縁縁部は内側する凹面をなす。	①紅ナテ	①紅ナテ	青灰色 青灰色	長(1) ○		
37	坏蓋	口径(14.0) 残高 4.0	天井部は丸く滑しい。天井部と口縁部を分ける線は凹線している。口縁部は内側する段をなす。	①紅ヘラナズリ 1/2 ②紅ナテ	①紅ナテ	青灰色 灰色	石系(1-2) 砂粒多し ○	48	
38	坏蓋	口径(14.2) 残高 4.2	扁平な天井部。天井部から小さな穴から中心へズを穿る。口縁部に至る。口縁部は丸く仕上げる。	①紅ヘラナズリ 1/2 ②紅ナテ	①紅ナテ	黄灰色・黄灰色 灰色	石系(1-2) ○		48
39	坏蓋	口径(15.1) 残高 3.0	小片。天井部から小さな穴に口縁部に至る。口縁縁部は丸く仕上げる。	①紅ヘラナズリ 1/2 ②紅ナテ	①紅ナテ	灰色 灰色	石系(1) ○		
40	坏身	口径(11.3) 残高 4.0	たちあがり内側し、縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。	①紅ナテ ②紅ヘラナズリ 1/2	①紅ナテ	赤灰色 青灰色	長(1-2) ○		48
41	坏身	口径 11.1 残高 4.0	たちあがり内側し、縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。底面は丸く仕上げる。	①紅ナテ ②紅ヘラナズリ 1/2	①紅ナテ	青灰色 青灰色	長(1) ○		48
42	坏身	口径(12.8) 残高 2.0	小片。たちあがり内側し、縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。	①紅ナテ	①紅ナテ	灰色 灰色	皆 ○		
43	甕	口径(18.8) 残高 4.0	内湯気味の口縁部。両部は丸く仕上げる。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石系(1-3) 金 ○		49
44	甕	口径(16.0) 残高 5.8	わずかに内湯気味の口縁部。縁部は内側する段をなす。口縁部縁部は凹線状をなす。	①ココナテ ②ハテ	ナテ	黄褐色 乳白色	石系(1-2) 金 ○		49
45	甕	口径(15.0) 残高 4.3	内湯気味の口縁部。縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。	マメツ	ナテ	赤褐色 赤褐色	石系(1-2) 砂粒多し ○		49
46	甕	口径(18.0) 残高 3.2	内湯気味の口縁部。縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。	マメツ	ナテ	褐色 褐色	石系(1-2) 金 ○		49
47	甕	口径(22.6) 残高 3.8	内湯気味の口縁部。縁部は丸く仕上げる。文部は中央のびにのびる。	①ココナテ ②ハテ	ナテ	乳白色 乳白色	石系(1-4) 金 ○		49

SB5 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・描 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
48	米	口径(16.4) 残高 3.3	わずかに内湾する口縁部。 肩部は「コ」字状に仕上げる。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	黄(1~2) 砂粒多し ○		49
49	甕	口径(20.2) 残高 3.1	外反する口縁部。肩部は丸く仕上げる。	ヘラミガキ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	黄 ○		49
50	甕	口径(19.3) 残高 2.5	外反する口縁部。肩部は丸みのある「コ」字状に仕上げる。	ヘラミガキ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	黄 ○		49
51	甕	口径(16.2) 残高 5.0	やや外反して立ち上がる口縁部。肩部は丸い。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	黄(1) ○		
52	甕	口径(10.2) 残高 3.1	肩部は内湾し、口縁部は直立する。肩部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	マメツ	乳白色 乳白色	黄 ○		
53	高杯	口径(20.7) 残高 4.6	ゆるやかに内湾する口縁部。肩部は丸い。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	黄(1) ○		
54	瓶	残高 6.2	瓶の把手。水平に長くのびる。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	黄 ○		45
55	瓶	残高 5.4	瓶の把手。受器部は丸くなる。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	黄 ○		45

表37 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・描 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
56	甕	口径(18.4) 残高 3.3	内湾する口縁部。肩部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	黄灰0-10 ○	SP①	
57	坏蓋	口径(13.4) 残高 3.8	天井部と口縁部を分ける縁は丸い。口縁部は垂下し、肩部は内湾する箇所をもつ。	ヨコナデ	内転ナデ	青灰色 青灰色	黄灰0-10 ○	SP②	
58	坏蓋	残高 2.9	扁平な天井部。外側に凹部へラ切り痕が見える。	⑤青灰ヘラクスリ ①内転ナデ	内転ナデ	青灰色 青灰色	○	SP③	
59	坏蓋	口径(14.8) 残高 3.1	たちあがりは内湾し、肩部は丸い。受器は短く上方にのびる。	内転ナデ	内転ナデ	青灰色 青灰色	○	SP④ 絵柄	
60	甕	口径(17.5) 残高 5.3	肩部は直立し、口縁部は外反する。肩部は肥厚する(一部欠損)。	内転ナデ	内転ナデ	青灰色 乳白色	黄(1) ○	SP⑤	

表38 掘立3出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・描 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
61	坏蓋	口径(16.0) 残高 4.1	丸みのある天井部。天井部と口縁部を分ける縁は丸い。口縁部は内湾する。	⑤内転ヘラクスリ ②内転ナデ	内転ナデ	青灰色 青灰色	黄(1~2) ○	SP⑥	
62	坏蓋	口径(10.9) 残高 2.2	天井部と口縁部を分ける縁は直立する。口縁部は丸い。	内転ナデ	内転ナデ	青灰色・青灰色 青灰色	砂粒多し ○	SP⑦	

遺物観察表

掘立3出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(m)	形 態・銘 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
63	杯青	口径(12.0) 残高 2.6	たちあがりは低く内傾し、肩部は丸い。受縁は水平にのび、受唇に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	青 ○	SK⑤	
64	甕	口径(16.2) 残高 3.1	直立で口縁に立ち上がる口縁部。肩部は丸い。内面は内傾する面をなす。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石灰(1~3) 金 ○	SK⑥	
65	甕	口径(19.0) 残高 3.4	わずかに内湾する口縁部。肩部は丸い。内面は内傾する面をもつ。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石灰(1~2) 金 ○	SK⑦	

表39 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(m)	形 態・銘 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
66	杯茶	口径(13.6) 残高 4.0	扁平な式鉢。断面三角形の丸みのある底をもつ。口縁部は内傾する形面をなす。	①回転ヘラケズリ 1/2 ②回転ナデ	回転ナデ	青灰色・灰色 灰色	長(1) 砂粒多し ○		50
67	杯茶	口径(13.0) 残高 3.3	丸みのある断面三角形の底あり。口縁肩部に内傾する段をもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
68	杯青	口径(11.0) 残高 5.1	たちあがりは内傾し、肩部はわずかに内傾する段をもつ。受縁は広く水平にのびる。	①②回転ヘラケズリ 1/2 ③回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石灰(1~2) ○		50
69	杯茶	口径 12.2 残高 5.7	たちあがりは内傾し、肩部は丸い。受縁は水平にのびる。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	回転ナデ	青白色 灰白色	長(1) ○		50

表40 SK1 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)		
70	石念丁	1/2	凝灰岩	6.0	3.6	0.8	31.272		50

表41 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(m)	形 態・銘 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
71	甕	口径(20.9) 残高 4.4	大きく外反する口縁部。肩部は「コ」字状に仕上げられる。	ナデ	ハテ	乳白色 乳白色	密 ○		
72	杯茶	口径(13.1) 残高 3.8	丸みのある断面三角形の底あり。口縁部は垂下し、肩部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
73	杯青	口径(11.5) 残高 2.5	たちあがりは低く内傾し、肩部は尖り状に丸い。受縁は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
74	杯青	口径(16.6) 残高 3.8	たちあがりは丸型。受縁はほぼ水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		自然焼

表42 第三層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(m)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
75	坏蓋	口径(16.0) 残高 3.2	開口を天母蓋、天母蓋と口縁部を合せる溝はなく、口縁内面に丸く仕上げた。	① 黒刺ハラクナデ 1/3 ② 黒刺ナデ	黒刺ナデ	灰赤・黄灰色 灰赤・黄灰色	石(1-2) ○		50
76	坏身	口径(15.5) 残高 2.0	たらいがけの内側し、底部は丸い。多数は丸く仕上げた。変部に口縁部が認められる。	黒刺ナデ	黒刺ナデ	灰赤 灰赤	石(1-2) ○		
77	坏蓋	口径(22.3) 残高 2.6	たらいがけの内側した後、丸とする。底部は丸い。変部は丸く仕上げた外方にひける。	黒刺ナデ	黒刺ナデ	黄灰色 黄灰色	黄 ○		
78	坏	口径(13.3) 残高 1.2	変部の付く坏。変部は底縁部付近に付き、丸く丸い。	黒刺ナデ	ナデ	灰赤 灰赤	黄 ○		
79	甕	口径(22.6) 残高 3.0	返し字柄を施す口縁部。肩部はやや「コ」字状に生じける。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	勢較多し ○		
80	鉢	口径(19.2) 残高 5.0	変部は内側し、口縁部は直立意味に立ち上がる。口縁部は面をなす。	ハナ (6cm/1cm)	ハナ	黄灰色 黄灰色	長(1) ○		

表43 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(m)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
81	坏蓋	口径(12.0) 残高 3.0	天母蓋と口縁部を分ける溝は浅くする。口縁部は丸く仕上げた。	黒刺ナデ	黒刺ナデ	黄灰色 黄灰色	長(1) ○		
82	坏身	口径(11.3) 残高 2.4	たらいがけの内側し、底部は丸い。変部は上外方にひねり出されている。	黒刺ナデ	黒刺ナデ	灰赤 灰赤	黄 ○	自然輪	
83	土器	口径(29.3) 残高 3.8	外反する口縁部。変部外側に縦線文が施される。	黒刺ナデ	黒刺ナデ	黄灰色 黄灰色	石(1-2) ○		

第7章

ヒラキ

開 遺 跡

— 2次調査地 —



## 第7章 開遺跡2次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経過 (第103図)

1992(平成4)年5月、窪田 靖氏より松山市南土居町179番地1地内における住宅建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.132 中ノ子廃寺及び遺物包含地」内にあたり周知の遺跡として知られている。同包蔵地内ではこれまでに、当地の東方約900mの地点に開遺跡1次調査地があり、古墳時代の集落関連遺構や遺物が多数確認されている。このほか、白鳳期の寺院址である中ノ子廃寺の比定地がある。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無を確認するため、1992(平成4)年6月に財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、6～7世紀の須恵器、土師器を含む遺物包含層とピット、落ち込みを検出し、当該地に古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・埋文センターと申請者の両者は遺跡の取扱いについて協議を行い、住宅建設により破壊される遺構、遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

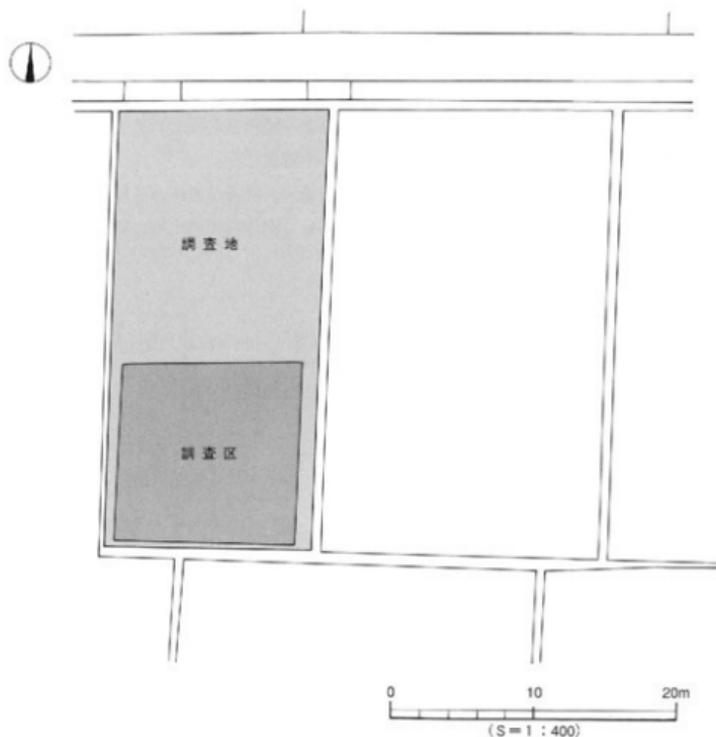


第103図 調査地位置図 (S=1:1,500)

発掘調査は古墳時代における当地の集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者の協力のもと1993（平成5）年11月1日に開始した。

(2) 調査組織

調査地 松山市南土居町179番1  
 遺跡名 開遺跡2次調査地  
 調査期間 1993（平成5）年11月1日～同年12月27日  
 調査面積 498.10㎡  
 調査主体 財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 調査担当 調査主任 出城 武志  
           調査員 水本 完児



第104図 調査地測量図

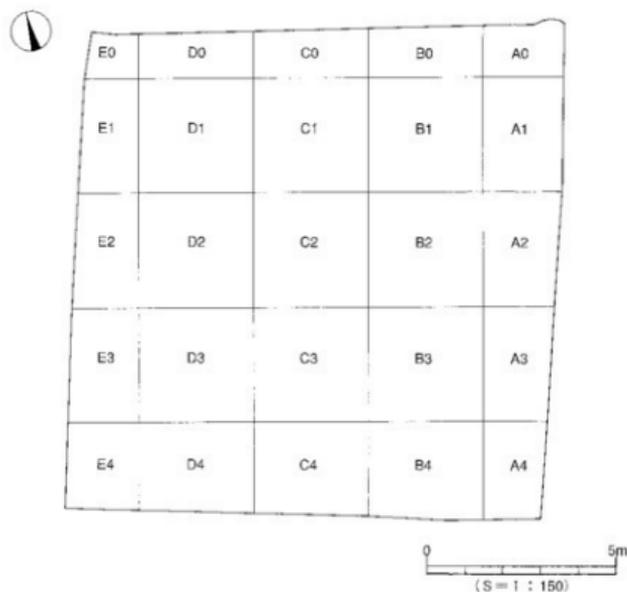
## 2. 層位 (第107～110図)

調査地は松山平野南東部、小野川と重信川に挟まれた氾濫原のほぼ中央部に位置する。標高は約39.8 mを測る。調査地は調査以前は水田であった。調査対象面積は498.10 m<sup>2</sup>であるが、廃土置場や駐車場用地を確保したため、最終の発掘調査面積は170 m<sup>2</sup>余りである (第104図)。

調査地の基本層位は、第I層表土、第II層黄灰色土、第III層灰褐色土、第IV層暗灰褐色土、第V層黒褐色土、第VI層茶褐色土、第VII層茶褐色砂礫層である。

第I層は水田耕作による耕上で、地表下10～20 cmまで開発が行われている。第II層は水田耕作に伴う床上で厚さ5～10 cmを測る。第III層は調査区南西部のみにみられ、厚さ5～10 cmを測る。第IV層は調査区北東部を除くほぼ全域でみられる。調査区中央やや北東寄りの地点が最も厚く約20 cm、南西部は約5 cmの堆積である。第V層は第IV層と同様、調査区北東部を除くほぼ全域でみられる。調査区南東部が最も厚く約20 cm、そのほかの地点では5～10 cm程度の堆積である。本層中からは弥生土器、土師器、須恵器が出土している。第VI層は調査区北東部を除く全域でみられる。本層上面は調査における最終の遺構検出面である。第VII層は拳大の礫を含む砂礫層である。調査区北東部では第VII層上に第I層が覆う状況であった。

本調査検出の第V層黒褐色土及び第VI層茶褐色土は、1次調査検出の第III層及び第IV層に

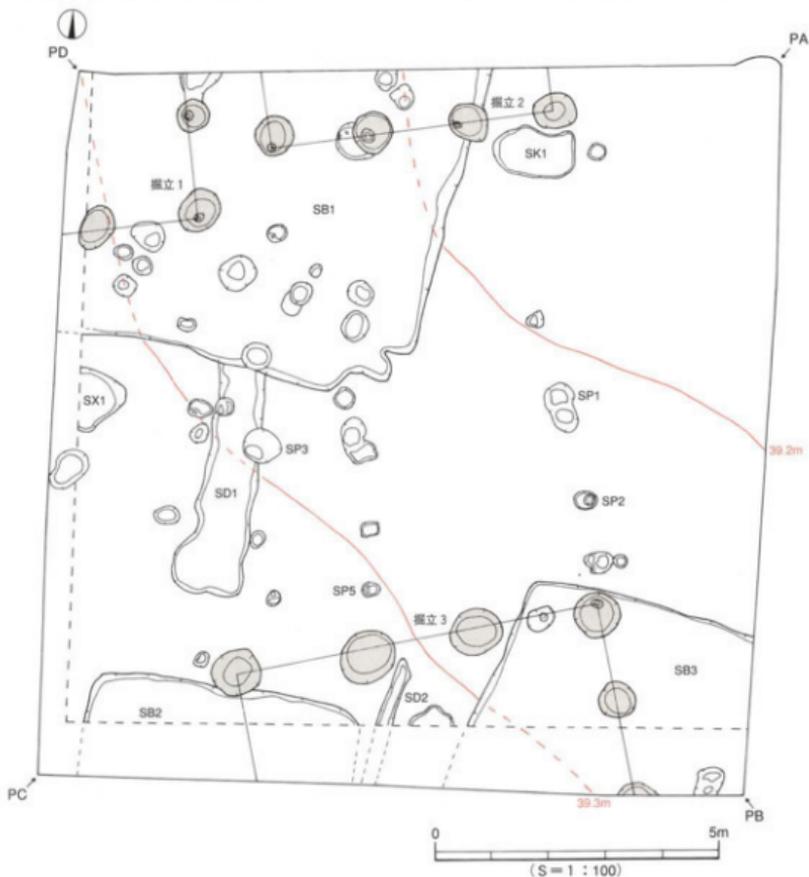


第105図 調査地区割図

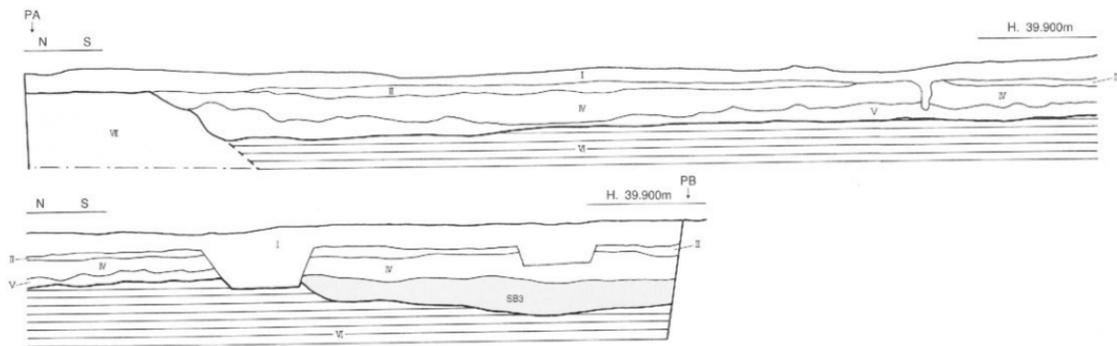
それぞれ対応するものと考えられる。

遺構は第V層上面及び第VI層上面で検出した（第106図）。第V層上面では掘立柱建物址3棟、第VI層上面では竪穴式住居址3棟、土坑1基、溝2条、ピット36基、性格不明遺構1基を検出した。

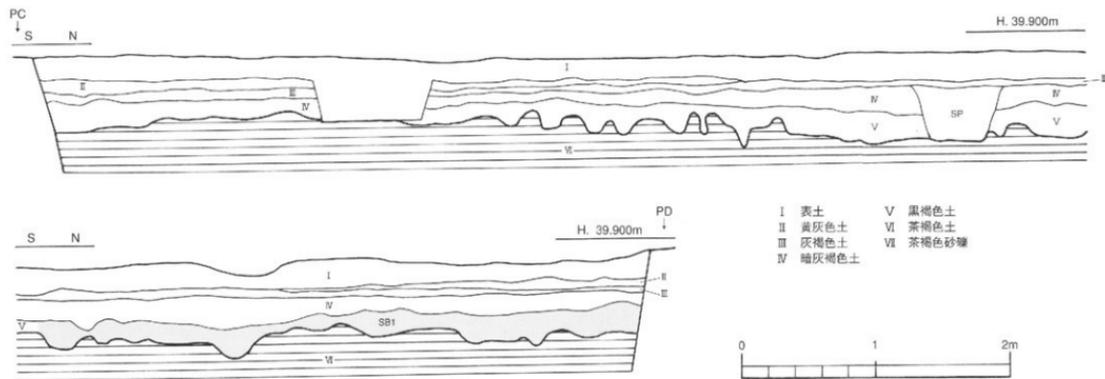
第VI層上面の標高を測量すると、調査区北東部が最も高く、南西部に向けて緩傾斜をなす（比高差10cm）。なお、調査にあたり調査区内を3m四方のグリッドに分けた。呼称名は第105図に記す。また、土層図のポイントPA～PDは第106図に位置を記載している。



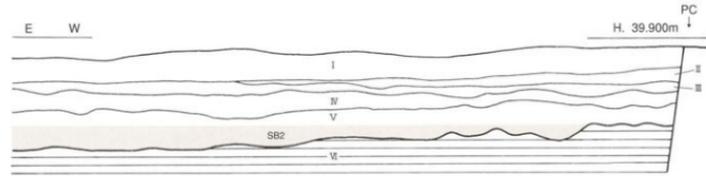
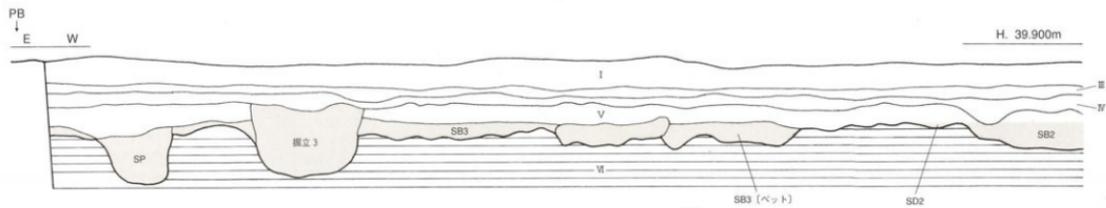
第106図 遺構配置図



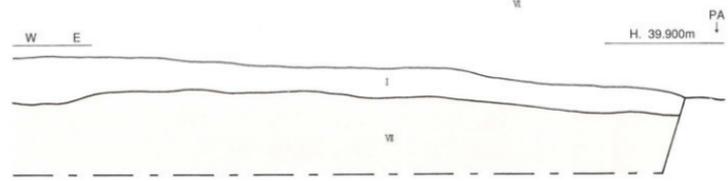
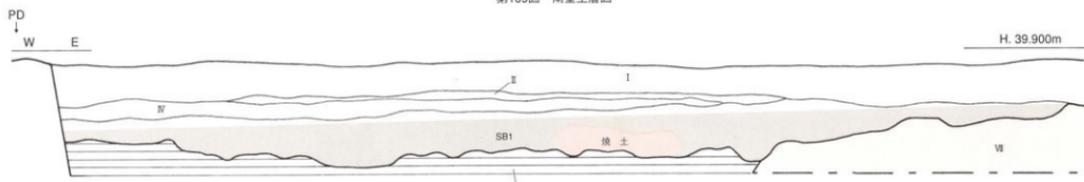
第107回 東壁土層図



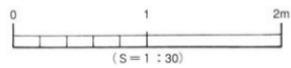
第108回 西壁土層図



第109図 南壁土層図



- I 表土
- II 黄灰色土
- III 灰褐色土
- IV 暗灰褐色土
- V 黒褐色土
- VI 茶褐色土
- VII 茶褐色砂礫



第110図 北壁土層図

### 3. 遺構と遺物

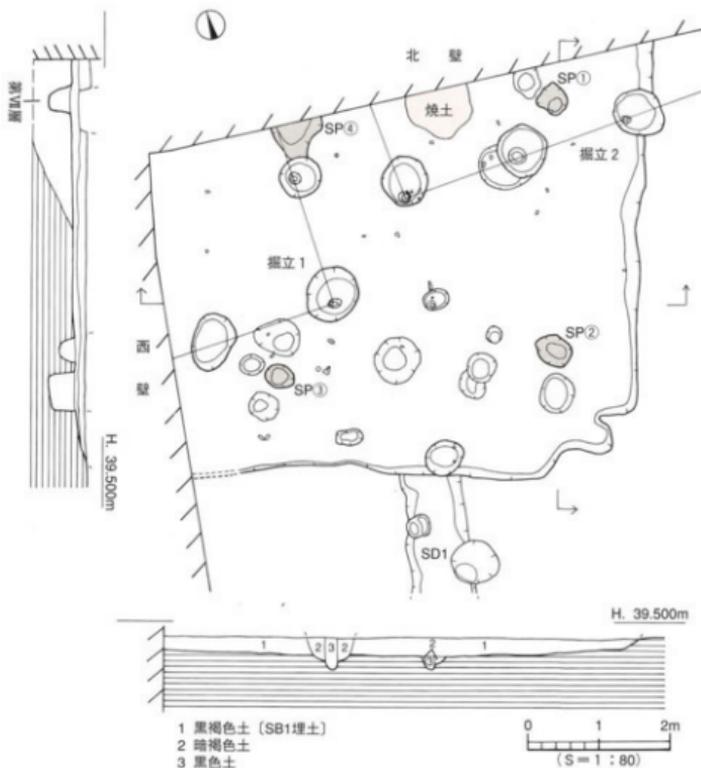
#### 〔1〕 竪穴式住居址

本調査では3棟の竪穴式住居址を確認した。いずれも第VI層上面での検出であるが、遺存状況から判断すると、遺構は第V層以上の層から掘り込まれた可能性が高い。

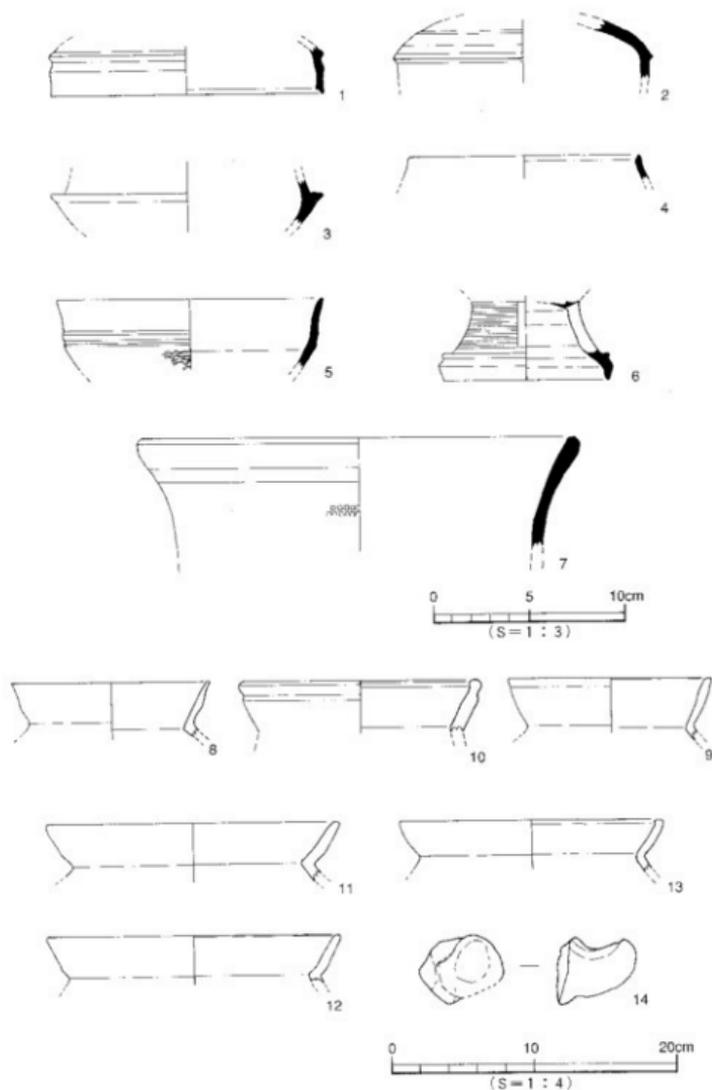
SB1 (第111図、図版52)

調査区北西部、B0～E2区に位置する。住居址北壁及び西壁は調査区に続く。住居址南壁は溝SD1を切っている。また、住居址北西部は掘立1、北東部は掘立2にそれぞれ切られている。

平面形は方形プランを呈するものと考えられ、規模は東西検出長6.7m、南北検出長6.3m、壁高は検出面下約25cmを測る。住居址埋土は黒褐色土単層である。



第111図 SB1測量図



第112図 SB1出土遺物実測図

床面は住居址中央部がやや凹み、壁体はゆるやかに立ち上がる。床面北東部は第Ⅰ層の砂礫層に及んでおり、向面は凹凸が著しい。礎が多数露出しており、この面を床面として使用したかは判断しがたい。

主柱穴はSP①～④の4本を検出した。各柱穴の平面形は円～楕円形を呈し、規模は径33～73cm、深さ22～30cmである。柱穴間はSP①-②間3.4m、SP②-③間3.7mを測る。床面にて主柱穴以外に大小11基のピットを検出したが、住居址に伴うものかは不明である。

このほか、住居址北壁中央部の埋土中に焼土を検出した。60×80cmの範囲に焼土の広がりが見られた。断面観察によりカマドの可能性がある。

遺物は埋土中にて土師器、須恵器が散在して出土している。

#### 出土遺物 (第112図、図版56)

##### 須恵器 (1～7)

1・2は坏蓋である。丸みのある断面三角形の稜をもつ。1の口縁端部は内傾する凹面をなす。3は坏身片、4は短頸壺の口縁部片である。5は無蓋高坏で坏中位に2条の凸線が走り、下位に波状文を施す。6は高坏の脚部である。脚端部は下内方に屈曲し、脚外面に回転カキ目調整を施す。透かしあり。7は壺の口縁部。外面に格子叩きを施す。

##### 土師器 (8～14)

8～13は甕形土器である。口縁部はすべて内湾する。口縁端部は内傾するもの(9・11・12)、内側に肥厚するもの(13)、珠毛状に肥厚するもの(10)、尖り気味に仕上げるもの(8)がある。いずれも口頸部境内外面に稜をもつ。14は甕形土器の把手である。上外方に湾曲する。

時期：出土遺物はいずれも小片ではあるが、遺物の特徴と、掘立1・2に切られることから、本住居址の廃棄、埋没時期は古墳時代後期初頭、6世紀初頭頃に比定されよう。

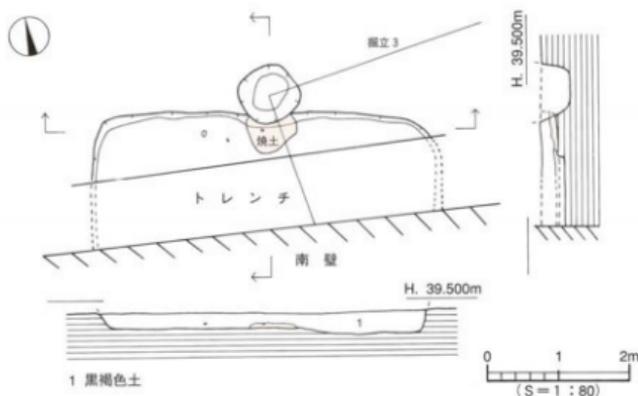
#### SB2 (第113図、図版53)

調査区南西部、C4～E4区に位置する。住居址南半部はトレンチに削平され、かつ調査区外に続く。北壁中央部は掘立3柱穴に切られている。

平面形は方形プランを呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.90m、南北検出長1.92m、壁高は検出面下約30cmを測る。床面は住居址東半部がやや凹んでいる。住居址埋土は、黒褐色上草層である。

屋内施設は未検出であるが、北壁中央部床面付近にて焼土を検出した。60×70cmの範囲に焼土の広がりが見られ、厚さ約5cmを測る。

遺物は埋土中にて須恵器、土師器小片が数点出土している。円化しうるものを1点掲載した。



第113図 SB2測量図

#### 出土遺物 (第115図)

15は土師器碗である。体部は内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。あえて時期を求めるならば、掘立3に切られていることから、廃棄、埋没時期の下限は古墳時代後期前半と考えられる。

#### SB3 (第114図、図版54)

調査区南東部、A3～B4区に位置する。住居址東側及び南側は調査区外に続く。中央部は掘立3柱穴に切られている。

平面形は方形プランを呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.0m、南北検出長5.3m、壁高は検出面下約15cmを測る。床面は住居址中央部がやや高くなっている。埋土は黒褐色土に黄色土が斑点状に混入するものである。

住居址床面に大小2基のピットを検出したが、住居に伴うものかは不明である。

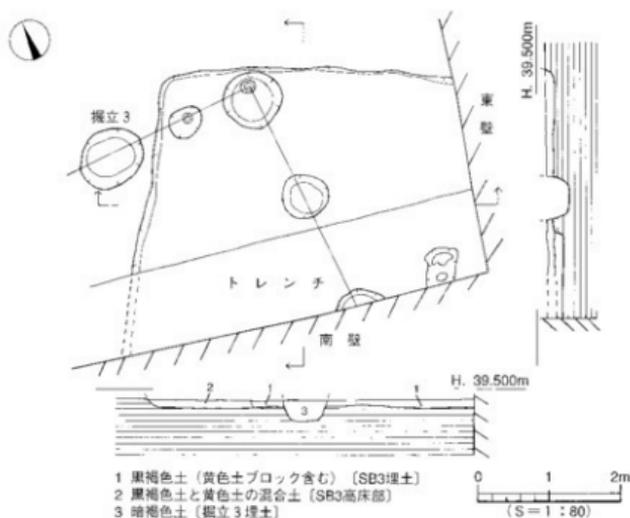
屋内施設は未検出であるが、SB3の掘り下げ終了時にベルト及び調査区南壁の土層観察により、屋内高床部(ベット状遺構)が付設されていることを確認した。ベットは住居址西壁沿いに幅1.3m、高さ10cm前後の造り付け(黒褐色土と黄色土の混合土)によるものである。

遺物は埋土中にて弥生土器、土師器、須恵器片が数点出土している。図化するものを1点掲載した。ただし、全体の出土遺物から判断すると、本住居址から出土した弥生土器は流れ込みの可能性が高い。

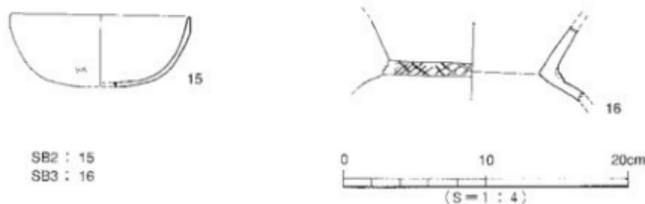
出土遺物 (第115図)

16は弥生土器の壺形土器類制部片である。頸制部境に凸線が走り、凸帯上に斜格子目文を施す。

時期：出土した遺物が僅少であり、明確な時期判断は困難である。掘立3に切られていることから、あえて時期を求めるとすれば、廃棄、埋没時期の下限を古墳時代後期前半と考えられる。



第114図 SB3測量図



SB2 : 15  
SB3 : 16

第115図 SB2・SB3出土遺物実測図

## 〔2〕掘立柱建物址

本調査では3棟の掘立柱建物址を確認した。すべて第V層上面での検出である。

## 掘立1 (第116図)

調査区北西隅、D0～E1区に位置し、SB1を切っている。1間×1間以上の建物址と考えられ、規模は東西検出長2.3m、南北検出長2.6mを測る。建物址は磁北より4～5°西に方位を取っている。

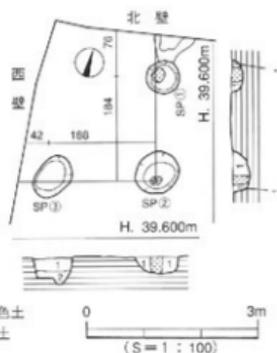
各柱穴は円～楕円形を呈し、規模は径58～80cm、深さ40～50cmである。掘り方埋土は、暗褐色土を基調とするが、SP③には床面付近に黄色土が混入する。柱痕はSP①・②で検出され、径17～24cm、深さ20～45cmである。柱痕埋土は黒褐色土である。

遺物は須恵器、土師器小片が数点出土している。図化しうるものを1点掲載した。

## 出土遺物 (第119図)

17は掘立1 (SP②) 出土の須恵器坏蓋片である。天井部と口縁部の境界は凹線状の凹みにより表されている。

時期：出土遺物が僅少であり、明確な時期判断はしかなる。SB3を切っていることや、第V層上面からの掘り込みであることから、概ね古墳時代後期前半、6世紀前半以降の建物址と考えられる。



第116図 掘立1測量図

## 掘立2 (第117図、図版54)

調査区北壁中央部、B1～D1区に位置し、SB1を切っている。3間×1間以上の建物址で、掘立1とはほぼ同じ方位をとる。

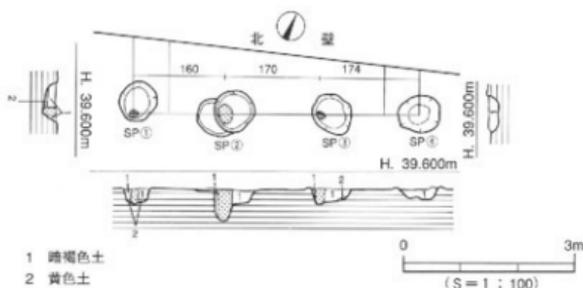
建物の規模は東西5.04m、南北検出長1.30mを測る。柱穴間は1.6～1.7mである。各柱穴は円形または楕円形を呈し、規模は径60～76cm、深さ16～45cmを測る。掘り方埋土は暗褐色土を基調とするが、SP①・③は底面付近に黄色土がブロック状に混入する。柱痕はSP①・②・③で検出され、径14～24cm、深さ27～55cmを測る。柱痕埋土は黒褐色土である。

遺物は須恵器、土師器小片が数点出土している。図化しうるものを1点掲載した。

## 出土遺物 (第119図)

18は掘立2 (SP①) 出土の須恵器坏蓋片である。天井部と口縁部の境界は凹線により表されている。

時期：出土遺物は僅少であり、明確な時期判断は困難である。掘立1と同様、SB3を切っていることや、第V層上面からの掘り込みであることから、概ね6世紀前半以降の建物址



第117図 掘立2測量図

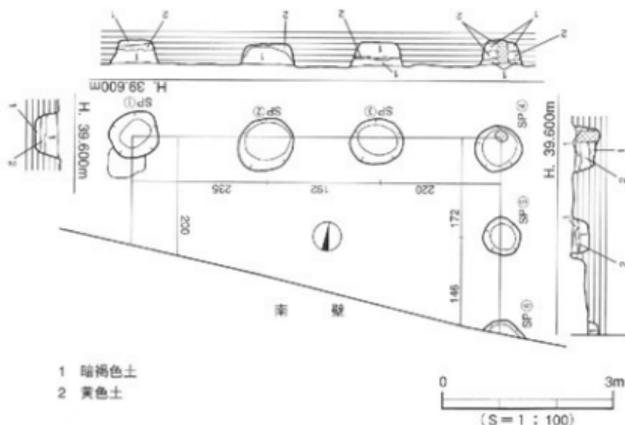
と考えられる。

**掘立3** (第118図、図版55)

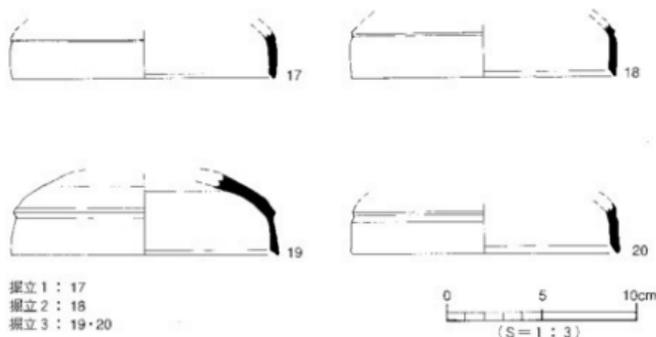
調査区南側、B3～D4区に位置し、SB2及びSB3を切っている。3間×2間以上の建物址で、建物方位を掘立1・掘立2とはほぼ等しくする。

建物の規模は東西6.47m、南北検出長3.18mである。各柱穴は円または楕円形を呈し、規模は径65～100cm、深さ32～50cmを測る。掘り方埋土は暗褐色土と黄色土の混合土である。柱痕はSP④で検出され、径18～20cm、深さ45cmを測る。柱痕埋土は黒褐色土である。

遺物は須恵器、土師器小片が数点出土している。図化するものを2点掲載した。



第118図 掘立3測量図



第119図 掘立出土遺物実測図

出土遺物 (第119図)

19は掘立3 (SP④)、20は掘立3 (SP③) 出上の須恵器坏壺である。19は天井部と口縁部の境界は断面三角形の稜をもつ。20は境界は凹線により表されている。

時期：出土遺物や、SB2・3を切っていること、さらに第V層上面からの掘り込みであることなどから、本建物址の時期は、概ね古墳時代後期前半、6世紀前半以降と考えられる。

[3] 土坑

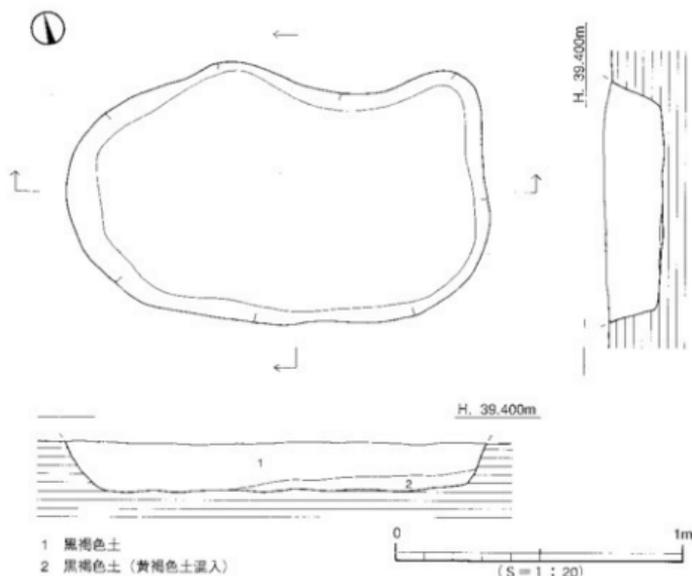
本調査において土坑を1基確認した。第VI層上面での検出である。

SK1 (第120図)

調査区北東部、B1区に位置する。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径1.46m、短径0.92m、深さは検出面下約17cmを測る。断面形は皿状を呈する。掘り方最終面は第VI層の砂礫層に及び、このため床面は凹凸が著しい。埋土は黒褐色土であるが、上坑東半部床面付近には黄色土が斑点状に混入する。土坑の性格は不明である。

遺物は埋土中にて須恵器、土師器小片が数点出土したが、円化するものはない。

時期：明確な時期判断はしかなるが、出土遺物からSK1は概ね古墳時代の遺構と考えられる。



〔4〕 溝

第120図 SK1測量図

本調査において2条の溝を確認した。いずれも第VI層上面での検出である。

SD1 (第106図)

調査区中央部西寄りD2・3区で検出した溝で、北側はSB1に切られ、中央部付近は暗褐色土を埋土にもつ2基のピットに切られている。規模は幅0.8～1.2m、検出長4.1m、深さは検出面下10～13cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒色土単層である。溝底は北から南に向けて緩やかに傾斜する(比高差3cm)。

溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物もなく、時期判断は困難である。SB1に切られていることから、溝の時期は下限を古墳時代後期前半と考える。

SD2 (第106図)

調査区南端中央部、C4区で検出した短くて不定形状の溝である。規模は幅25～30cm、深さは検出面下5～6cmを測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は黒色上半層である。溝底はわずかに北から南に向けて緩傾斜をなす(比高差2cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物もなく、時期判断は困難である。調査区南壁の土層観察により第V層堆積以前の遺構であることから、概ね古墳時代以前の遺構と考えられる。

## 〔5〕 その他の遺構と遺物

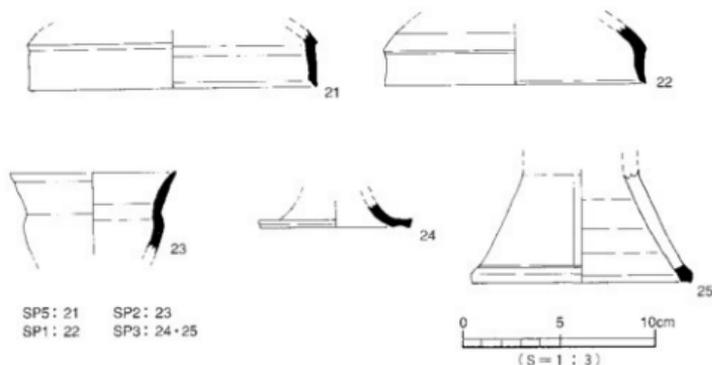
本調査において、ピット49基（掘立柱建物柱穴13基を含む）、性格不明遺構1基、土師器、須恵器を含む遺物包含層（第V層）を検出した。

## (1) ピット

本調査で確認したピットは49基である。第V層及び第VI層上面での検出である。第V層上面検出のピットはすべて暗褐色土もしくは暗褐色上に黄色土が混入するものである。第VI層上面検出のピットは暗褐色土、黒褐色土の2種類に分けられる。そのうち、暗褐色土を埋土にもつピット内から少量ではあるが、須恵器、土師器が出土している。図化するものを5点掲載した。

## 出土遺物（第121図、図版57）

21はSP5、22はSP1出土の須恵器坏蓋である。両者共に大井部と口縁部の境界には丸みのある断面三角形の稜をもつ。23はSP2出土の須恵器小型壺である。口径約8.4cmを測る。24・25はSP3出土品である。24は須恵器高坏の脚部片。脚端部は上下方に肥厚する。25は高坏もしくは台付壺の脚部である。長方形の透かしを看取する。



SP5: 21    SP2: 23  
SP1: 22    SP3: 24・25

第121図 ピット出土遺物実測図

## (2) 性格不明遺構

## S X 1（第122図）

調査区西壁中央部、E2区に位置する。第VI層上面での検出である。遺構西半部は調査区外に続く。平面形は不整の楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.84m、南北1.12m、深さは検出面下約18cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土を基調とし、遺構南半部床面付近には黄色土が斑点状に混入する。床面はほぼ平沢であり、壁

体はゆるやかに立ち上がる。

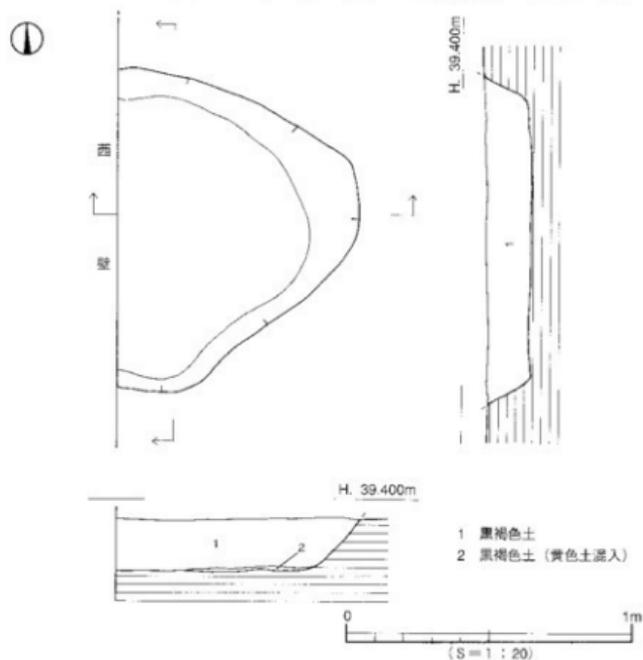
遺構の全容は不明であり、ここでは性格不明遺構として記載している。

遺物は埋土中にて須志器坏蓋、坏身片が出土している。

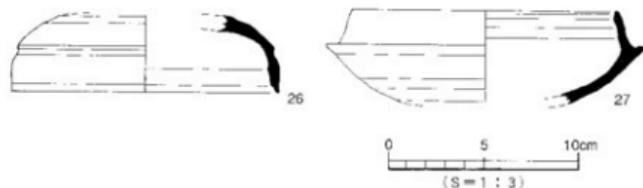
出土遺物（第123図、図版57）

26は須志器坏蓋である。天井部と口縁部の境界は凹線により表されている。口縁端部は内傾する。27は須志器坏身である。たちあがりは内傾し、端部は内傾する。いずれも1/2の残存である。

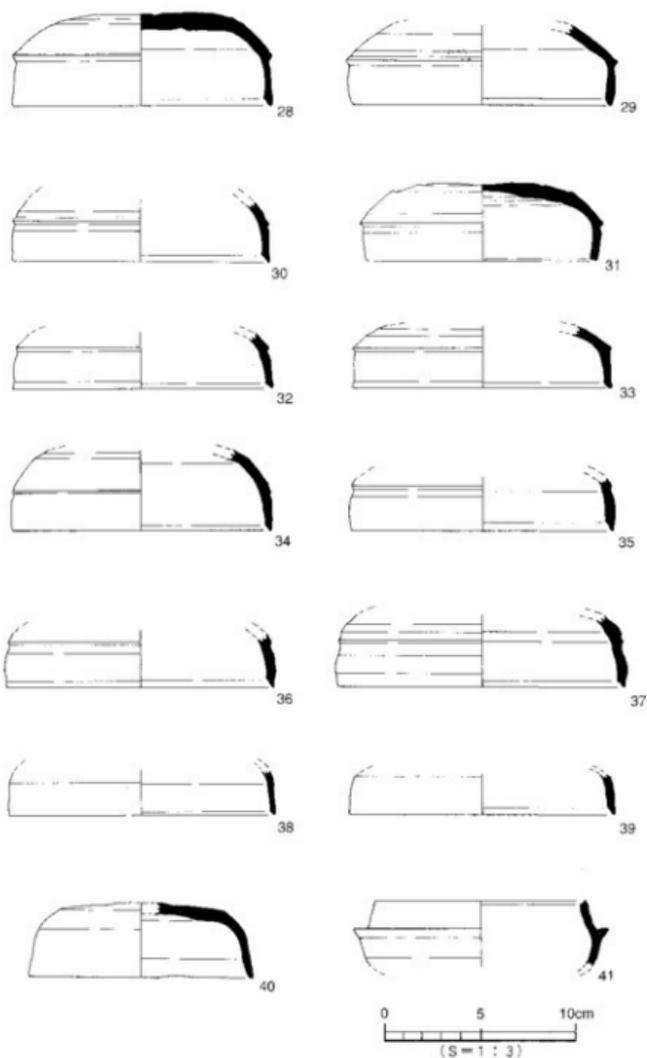
時期：出土した須志器の特徴より、本遺構の時期は6世紀前半頃と考えられる。



第122図 SX1測量図



第123図 SX1出土遺物実測図



第124圖 第V層出土遺物実測図(1)

## (3) 第V層出土遺物 (第124・125図、図版57・58)

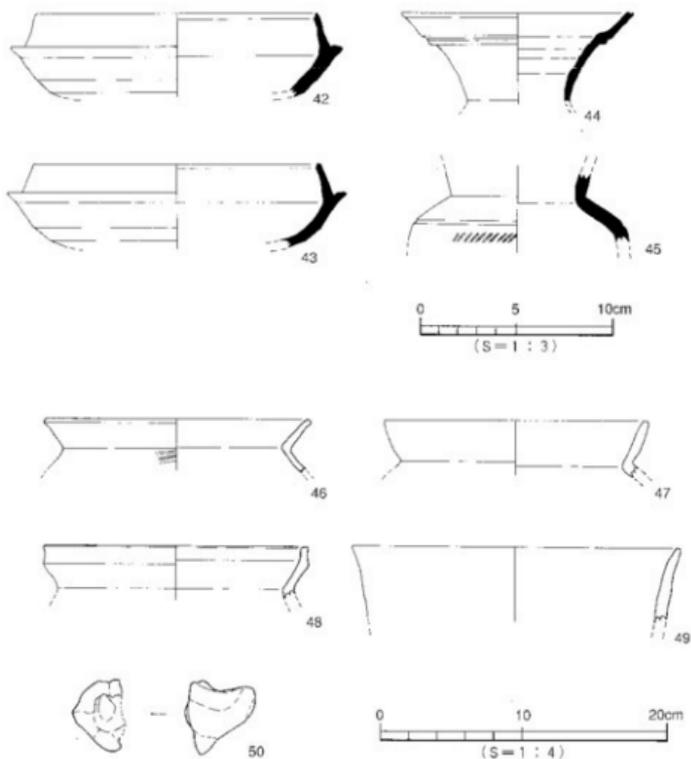
## 須恵器 (28～45)

28～40は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境界は断面三角形の稜をもつもの (28～33)、凹線で表されるもの (34～37)、稜をもたないもの (38～40) がある。口縁部はすべて内傾する。

41～43は須恵器杯身である。ちあがりは内傾し、端部はすべて内傾する。44・45は甕である。45は体部中に1条の沈線が走り、沈線下に刺突列点文を施す。

## 土師器 (46～50)

46～48は菱形土器である。口縁部は内湾し、口縁端部は「コ」字状に仕上げるもの (46)、



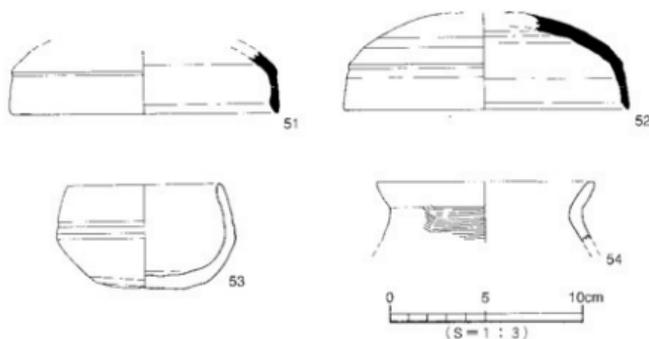
第125図 第V層出土遺物実測図 (2)

丸くおさめるもの(47)、内傾するもの(48)がある。49・50は甌形土器。49は口縁部がやや外反し、肩部は丸く仕上げる。

#### (4) 地点不明出土遺物(第126図、図版58)

本調査において出土地や出土層位の不明な遺物が数点ある。ここでは地点不明出土遺物として掲載する。

51・52は須恵器坏蓋である。両者共に天井部と口縁部の境界は凹線により表されている。53は上師器碗。焼成は硬く、須恵器を模倣した感がある。底部外面にはヘラ削り調整を施す。54は壺形土器である。器壁は比較的厚く、胴部外面に粗い刷毛目調整を施す。



第126図 地点不明出土遺物実測図

## 4. 小 結

本調査は、古墳時代の集落構造解明を主目的として実施された。その結果、竪穴式住居址3棟、掘立柱建物址3棟をはじめ、多数の古墳時代の遺構や遺物を確認することができた。

### (1) 竪穴式住居址の構造

本調査では3棟の竪穴式住居址を確認した。調査地内に住居址が出現するのは遅くとも古墳時代後期初頭、6世紀初頭頃と考えられる。SB1は、方形の住居址で4本の主柱穴から構成される。断定はできないが、住居址北側部分にて焼土を検出したことから、カマドが付設された可能性もある。SB1とあまり時期を前後することなく、SB2・SB3が出現することになる。明確な時期判断はしかねるが、概ね古墳時代後期前半以前の住居址であろう。両者共に平面形は方形を呈するものと考えられる。

これら3棟の住居址は規模的には差がみられるが、いずれの住居址も建物方位を等しくする。

## (2) 掘立柱建物址の構造

本調査では3棟の掘立柱建物址を確認した。掘立1は規模や形状は定かではないが、掘立2及び掘立3は、3間×1間以上の建物址で、側柱だけの柱構造と考えられる。いずれも建物方位を磁北よりやや西に取っている。柱穴内からの出土遺物と、掘り方検出面などから、6世紀前半から中葉頃の建物址と推測される。

1次調査検出の掘立柱建物址は6世紀後半頃と考えられており、建物方位を磁北より10°余り東に取っている。本調査検出の建物址とは建物方位が異なることから6世紀中葉～後半期において掘立柱建物の方向が変化するものと推測される。

## (3) 住居の変遷

当地における住居の形態は6世紀前半～中葉を境にして大きく変化している。6世紀初頭頃に出現した竪穴式住居址は6世紀前半頃まで存在するが、6世紀前半～中葉以降、掘立柱建物址が当地に出現することになる。掘立柱建物址の出現期については、建物柱穴内からの遺物が僅少で明確ではないが、遅くとも古墳時代後期、6世紀後半頃までには造営されていたものと推測される。

多少の時期差はあるが、開遺跡1次調査においても、6世紀中葉～後半を境にして本調査と同様に住居形態が変化している。

## (4) まとめ

今回の調査では、1次調査の住居も含め、当地や周辺地域の古墳時代集落構造をわずかではあるが解明することができた。古墳時代後期、6世紀においては、当地や周辺地域に集落が形成され、継続的に集落が営まれていたことが判明した。加えて、6世紀初頭には竪穴式住居が住居の主体をなしていたものが、6世紀中葉～後半頃を境にして掘立柱建物へと移行しているのである。

今後、周辺地域の調査を通じて、久米地区東域の古墳時代における集落の広がりや規模、構造をさらに解明し、当地域の動向や性格をも追求していかねばならないであろう。

## 【参考文献】

- 田城 武志 1994 「開遺跡2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』  
 水本 完児 松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

(註) 年報記載の各遺構のうち、本稿では遺構番号を変更しているものがある。

(年報：SB1・本稿：SB3、年報：掘立1・本稿：掘立3)

遺構・遺物一覧（作成者：宮内慎一）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出上遺物欄の略号について。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴上→胴部上位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4) →「1~4mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表44 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時期	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	床面積 (㎡)	土柱穴 (本)	内部施設			周壁溝	備考
						高床	土坑	炉		
1	古墳後新石器	方形	(6.70)×(6.30)×0.25	92.2	4				△	遺跡1・遺跡2に 含まれる。S3に 含まれる。焼1。
2	古墳後新石器	方形	4.90×(1.92)×0.30	9.4						遺跡3に 含まれる。焼土。
3	古墳後新石器	方形	(5.30)×(3.00)×0.15	26.5		○				遺跡3に 含まれる。

表45 掘立柱建物址一覧

掘立柱	方位	規模 (間)	桁行		梁行		床面積 (㎡)	備考	時期
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	不明	1×1以上	2.60	1.84-0.76	2.30	1.88-0.42	5.98	SB1を切る。	古墳後新石器以降
2	東西	3×1以上	5.04	1.60-1.70-1.74	1.30	1.30	6.95	SB1を切る。	古墳後新石器以降
3	東西	3×2以上	6.47	2.20-1.92-2.35	3.18	1.72-1.46	20.37	SS2, SB3を切る。	古墳後新石器以降

表46 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考

表47 溝 一 覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
			長さ	幅×深さ (m)				
1	D 2・3	曲状	4.10	1.20×0.10	黒色土		古墳後継前半以前	SB1に知られる。
2	C 4	レンズ状	1.30	0.30×0.06	黒色土		古墳時代以前	

表48 性格不明遺溝 一 覧

性格不明遺溝 (S X)	地 区	平面形	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
				長さ	幅×深さ (m)				
1	E 2	不整形門形	浅台形	1.12	0.84×0.18	黒褐色土	瓦 器	古墳後継前半	

表49 SB1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・備 考	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 熟 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	坏蓋	口径(14.3) 残高 2.6	断面三角形の丸みのある様をもつ。口縁部は歪み、胎土の粗さの回差をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	表(1-3) ○		
2	坏蓋	径径(13.5) 残高 3.1	扁平な円形。断面三角形のシャープな縁をもつ。	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
3	坏蓋	径径(14.2) 残高 2.4	かたまりは欠損。全体はやや上方外へのびた縁部に流線状の内面あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	表(1-4) ○		
4	高坏	口径(12.0) 残高 1.3	逆卵形の口縁部小片。口縁部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	表(1) ○		
5	高坏	口径(13.9) 残高 3.7	断面扁平。下半部に2本の凸縁がある。口縁部は外反し縁部は丸い。下半部に流線状をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ○		
6	高坏	口径(8.6) 残高 4.2	胎土は外反縁部以下がり、青褐色胎土に1本の凸縁がある。透かしあり。(二枚型)	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
7	蓋	口径(22.4) 残高 5.7	外反する口縁部。口縁部は肥厚する。胎土外面に格子印を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	表(1-2) ○		
8	蓋	口径(14.0) 残高 3.5	内湾した立ち上がる口縁部。口縁中位でわずかに屈曲する。	マメツ	マメツ	棕色 赤褐色	石(1) ○		56
9	蓋	口径(14.0) 残高 3.9	内湾する口縁部。縁部はわずかに凹をなす。	マメツ	マメツ	赤褐色 乳褐色	表(1-5) ○		56
10	蓋	口径(16.3) 残高 3.7	内湾する口縁部。口縁部で肥厚し、胎土は肥厚する。口縁部内面に割線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	石(1-3) 金 ○		56
11	蓋	口径(20.5) 残高 3.6	内湾する口縁部。胎土はわずかに凹をもつ。口縁部境の内外面に2線を施す。	回転ナデ	回転ナデ 割ハケ	乳白色 乳白色	石(1-2) 金 ○		55
12	蓋	口径(20.4) 残高 3.4	内湾する口縁部。胎土は内湾する調をもつ。	マメツ	マメツ	褐色 赤褐色	石(1-4) 金 ○		56

SB 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
13	夾	口径(18.4) 残高 3.1	内湾する山縁部。口縁端部は内側に肥厚する。	ソメツ	マメフ	灰色 褐色	石(1-3) ○		36
14	瓶	残高 4.8	瓶の折で、受部は上方にのびる。	ナゲ	ナゲ	乳褐色 乳褐色	長(1-2) ○		36

表50 SB 2・3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
15	瓶	口径(12.5) 底径 3.6 残高 3.0	口縁の肥厚、頸部内湾し、山縁部は突出して立ち上がる。口縁端部は先り肥厚。	①ソコナゲ ②ソケ	ナゲ	黒褐色 褐色	長(1-3) ○	SB2 脚4	
16	壺	胴径(11.9) 残高 4.6	外反する頸部、頸部端部に凸部を立ち付けし、内面上に刻印文字を施す。	ソコナゲ	ナゲ	淡褐色 灰褐色	短長(1-5) ○	SB3	

表51 掘立出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
17	坏蓋	口径(13.8) 残高 2.8	断面三角形の縁をもつ。口縁端部は内湾する凹面をなす。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 有灰色	壺 ○	掘立1 SP2	
18	坏蓋	口径(13.5) 残高 2.4	実形部と口縁部の境界は底縁により表われる。口縁端部は内湾する凹面をなす。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 青灰色	石(1-2) ○	掘立2 SP1	
19	坏蓋	口径(14.0) 残高 4.3	断面三角形の縁あり。口縁部は扁平し、端部は内湾する凹面をなす。	①回転ヘラケズリ ②回転ナゲ	灰色ナゲ	灰色 灰色	石(1-2) ○	掘立3 SP4	
20	坏蓋	口径(13.9) 残高 2.6	先みのある断面三角形の鋭い縁をもつ。口縁端部は内湾する。小片。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰褐色 青灰色	長(1) ○	掘立3 SP3	

表52 ビット出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面/内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
21	坏蓋	口径(13.0) 残高 3.0	断面三角形のシャープな縁をもつ。口縁部は扁平し、端部は内湾する凹面をなす。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 青灰色	壺 ○	SP5	
22	坏蓋	口径(13.5) 残高 3.1	先みのある鋭い縁あり。口縁部は外反し、端部は内湾する。	①回転ヘラケズリ ②回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 青灰色	石(1) ○	SP1	
23	壺	口径(8.5) 残高 4.3	小型の壺。唇部は底縁で山縁部は外反する。	回転ナゲ	回転ナゲ	青灰色 灰色	石(1-2) ○	SP2	37
24	高坏	肩径(7.9) 残高 2.3	頸部は外反し、肩縁部は下方に肥厚する。肩縁部に凹溝あり。	回転ナゲ	回転ナゲ	灰色 灰色	長(1) ○	自然胎 SP3	

## 遺物観察表

ピット出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	灰坪	口径(11.3) 残高 6.0	縁部は外反し、唇部は湾 正状に厚化する。胎土質は わずかに凹凸。透かしあり。	同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(1) ○	520	57

表53 SX1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
26	坏蓋	口径(14.0) 残高 4.0	大弁部と口縁部を分ける 縁は凹縁により表わされ る。口縁部は内傾する。	②同軸ヘラケズリ ③同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(1~4) ○		57
27	坏身	口径 13.8 残高 4.8	たもとがやや膨し、縁部は やや厚くなる。表部は上方に 凸り、空室が凹縁部のみあり。	④同軸ナテ ⑤同軸ヘラケズリ	同軸ナテ	灰白色 灰白色	長(1~2) ○		57

表54 第V層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
28	坏蓋	口径 13.8 径内 4.4	扁平な実舟形。断面三角形の シャープな縁をもつ。口縁部 は蓋下し、縁部は内傾する。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	青灰色 青灰色	長(1~3) ○		58
29	坏蓋	口径 13.6 残高 4.2	断面二内形状の縁あり。口 縁部は内凹縁状に凸り、 縁部は内傾する。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	青灰色 青灰色	長(1~3) ○		
30	坏蓋	口径(13.4) 残高 3.2	断面二内形状のシャープな縁 をもつ。口縁部は蓋下し、 縁部は大傾する。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	青灰色 青灰色	長(1~2) ○		
31	坏蓋	口径(12.0) 残高 4.0	扁平な実舟形。断面一角形状 のシャープな縁をもつ。口縁部 は蓋下し、縁部は平直な縁をもつ。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(1~5) 形勢多し ○		58
32	坏蓋	口径 13.6 残高 2.9	丸みのある断面三角形状の 縁あり。口縁部は蓋下し、 縁部は内傾する凹縁をなす。	同軸ナテ	同軸ナテ	青灰色 青灰色	長(1~2) ○		
33	坏蓋	口径(13.5) 残高 3.3	扁平な実舟形。断面一角形状 のシャープな縁をもつ。口縁 部は蓋下し、縁部は内傾する。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	青灰色 青灰色	長(1~2) ○		
34	坏蓋	口径(13.5) 残高 4.2	丸みのある実舟形。不規則 な縁をもつ。口縁部は蓋下 し、縁部は内傾する。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(1~2) ○		
35	坏蓋	口径(13.7) 残高 2.8	大弁部と口縁部を分ける縁 は凹縁により表わされる。 口縁部は内傾する。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(1) ○		
36	坏蓋	口径(14.0) 残高 2.9	大弁部と口縁部の境界は凹 縁による。口縁部は内傾 し、縁部は内傾する。	同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(1~3) ○		
37	坏蓋	口径(15.0) 残高 3.8	大弁部と口縁部の境界は凹 縁による。口縁部は内傾 し、縁部は内傾する。	④同軸ヘラケズリ ⑤同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(1~3) ○		
38	坏蓋	口径(14.0) 残高 2.3	大弁部と口縁部の境界は不 規則な縁による。口縁部 は内傾する。小片。	同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長(2) ○		
39	坏蓋	口径(14.0) 残高 2.1	大弁部と口縁部の境界は長 縁による。口縁部は蓋下 し、縁部は内傾する。	同軸ナテ	同軸ナテ	灰色 灰色	長 ○		

第V層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
40	坏瓦	口径(11.8) 高さ 3.9	扁平な天部。口縁部はやや外反して下がり、端部は丸く仕上げた。	④白磁ヘラズリ① ④白磁ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1~2) ○		58
41	坏香	口径(11.0) 残高 3.5	たちあがり内傾し、端部は内傾する。受部は上方外方にのびる。	①白磁ナデ ④白磁ヘラズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~3) ○		
42	坏香	口径(14.6) 残高 4.3	たちあがり内傾し、端部は内傾する。受部は本材の口外、受部端に浅彫刻の跡あり。	①白磁ナデ ④白磁ヘラズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~4) ○		
43	坏分	口径(14.7) 残高 4.4	たちあがり内傾し、端部は内傾する。受部は上方外方にのび、受部端に浅彫刻の跡あり。	①白磁ナデ ④白磁ヘラズリ①②	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~2) ○		
44	瓶	口径(12.0) 残高 4.8	頸部は外反し、口縁部端に1条の内線が走る。	白磁ナデ	回転ナデ	灰 色 青灰色	長(1~3) ○		38
45	瓶	口径(6.9) 残高 3.7	頸部は内傾し、口縁部は上方外方にのび、口縁部は浅彫刻の跡あり。	白磁ナデ	回転ナデ	青灰色 灰 色	長(1~3) ○	自然胎	58
46	瓶	口径 18.2 残高 3.6	立ちあがり内傾し、端部は内傾する。口縁部は浅彫刻の跡あり。	①白磁ナデ ④白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色 乳白色	長(1~4) ○		57
47	瓶	口径(18.3) 残高 3.4	内傾する口縁部。端部はわずかに外反する。	マメフ	マメフ	乳白色 乳白色	長(1~5) ○		57
48	瓶	口径(18.2) 残高 3.3	内傾する口縁部。口縁中央で直した後直立する。口縁部は浅彫刻の跡あり。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	長(1~5) ○		57
49	瓶	口径(22.8) 残高 5.0	頸部は外反し、口縁部はやや外反する。口縁部は丸く仕上げた。	マメフ	マメフ	青灰色 青灰色	長 ○		
50	瓶	残高 5.3	瓶の把手。受部は上方外方にのびる。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	長(1~3) ○		58

表55 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
51	坏瓦	口径 13.8 残高 3.2	丸みのある鋭い縁あり。口縁部はやや下がり、端部は内傾する。	白磁ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~3) ○		
52	坏香	口径(14.8) 残高 3.0	丸みのある大唇型。丸みのある鋭い縁をもち、口縁部は浅彫刻の跡あり。	④白磁ヘラズリ①② ④白磁ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1~3) ○		
53	瓶	口径 8.0 残高 4.0 残高 5.5	中央の頸部。深部に内傾し、口縁部は浅彫刻の跡あり。口縁部は浅彫刻の跡あり。	①白磁ナデ ④白磁ヘラズリ	回転ナデ	乳白色 乳白色	長(1~3) ○		38
54	瓶	口径 11.1 残高 3.1	「く」の字状の口縁部。端部は丸く仕上げた。	①白磁ナデ ④白磁ナデ (5~6cm)	マメフ	乳白色 乳白色	長(1~3) ○		

第8章

ミナミ ク メ ガ タ マ フ  
南久米片廻り遺跡

— 2次調査地 —



## 第8章 南久米片廻り遺跡2次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査の経緯 (第127図)

昭和63年8月、川田正雄氏より、松山市南久米町534-1、534-3の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

当該地は松山市の指定する「126 高畑遺物包含地」内にある。同包含地内には古代の官衙遺跡として知られる久米高畑遺跡がある。

よって、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために昭和63年度に試掘調査を実施した。調査の結果、当該地に遺跡が存在していることが明らかになった。この結果を受け、宅地開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存を行うため、文化教育課は申請者の協力のもと、平成元年2月～4月の間に本格的な発掘調査を実施した。調査は、米住・久米地区における古墳時代～古代の集落構造解明を主目的としたものである。

#### (2) 調査組織

調査地	松山市南久米町534-1、534-3
遺跡名	南久米片廻り遺跡2次調査地
調査期間	平成元年2月8日～平成元年4月2日
調査面積	901㎡
調査協力	川田正雄
調査担当	松村 淳 (平成5年退職) 山本 健一

### 2. 層位

南久米片廻り遺跡は、標高30mにあり、調査前は水田であった。昭和60年に調査された1次調査地は本調査地の800m東にある。

本調査地の地形は、南から北へ、さらに東から西へ傾斜し、北西部が最も落ち込んでいる。中央部の耕作土直下では、南東から北西に向け、湾状の稜線が存在し、調査地はこれを境に南面は段丘部、北面は沖積低地になる。

層位は、第I層表土、第II層水田床土、第III層地山である。ただし、北の低地には褐色系の十層 (遺物包含層) がみられる。調査地は既に近現代の土地開発に伴い、大きく改変されており、遺物包含層は大きく削平されたものと考えられる。